
あの日のあたる場所で

玲音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日のあたる場所で

【Zコード】

N4170D

【作者名】

玲音

【あらすじ】

不思議な力が与えられたわけでもない。凄い才能があるわけでもない。普通の高校生が、いろんな事にもがき、悩む、そんな日常生活を描いた作品。また、あの日のあたる場所で余おひ。そひ、僕たちは約束した。

P・1 僕

僕の名前は、内藤楓。^{ないとうかえで}高校1年生という、微妙なお年頃。

高校は、志望校があつたわけでもなく、ただ、なんとなく受験し、入学をした。

高校での僕の活躍振りはとくと、マジと書いて本当に普通の学校生活だった。

勉学もそれほどできるわけではないが、赤点はとらない程度の学力はあつたし、

高校3年間で何かやつておいつと、テニス部にも入った。もともと、中学から軟式テニスをしていたので、すんなり部の雰囲気に慣れることができた。

そこで、同じクラスの男子が入部していることを知り、部活を通して、友とよべる仲間もつくることができた。

授業中は部活の疲れからか、居眠りすることもあるし、休み時間では、仲の良い友とお喋りをしたり、
部活では、ダブルスの試合で、やるかやられるかの熱い試合なんかもしていた。

そんな、平凡な毎日が当たり前かのように過ぎることに僕は、複雑な想いを抱え始めていた。

僕の人生は、未来はどうなっていくのだろうかと。期待や希望に満ちた感情ではなく、不安で恐くて……

今にでも逃げ出してしまってやうになるぐら、本当に、どうなつてしまふのかと考えることも、ここ最近、多いような気がする。

他の人から見れば、僕の今の生活は充実しているように思えるだろう。部活も、勉学やプライベートも。

でも、僕自身は、なぜかこんなに充実している毎日なのに、何かしていいこと、できていないことがあるのではないかという、複雑な感情がいつも、どこにあるのだ。

時間よ止まってくれ。と思つても、時間は止まつてはくれない。そう、時間は刻々と過ぎ、そうやつて人間は平等に老いていくのだ。今日も、時間は動き続け、そして、僕は今日も、走り続ける。

「つひ、おい、楓ー何、ぼーっとしてんだよー。」

「え？」

ふと、みやもとじん富本仁の声に異世界から現世へと連れ戻される。

仁は、僕の氣迫のない態度に呆れた顔をした。

「何が、『え？』だ。あと、5周！ 気合を入れて走るだ。」

仁はさう言つと、楓の背中を少々強めに叩き、走るスピードを速め

た。

宮本 仁……。僕と同じクラスで、部活で知り合った仲間の一人だ。勉強は全然できないものの、かなりの運動神経の良さであり、その運動神経、ルックスから、女子生徒にはかなりの人気者である。ただ、仁は、俺に近寄るなオーラを出している（本人曰く）らしく、実際に告白されたことは、あまりないらしい。

僕は、その話を聞かされたとき、こいつには負けたくない。といつ、闘争心が不覚にも沸いてしまった。

仁は、僕のことをライバルと思っているのかどうか分からぬが、無論、僕は、ライバルだと思っている。

部活の朝練、最後のメニューは、決まって高校の校舎周りを10周する。というものであった。

今日も、その走り込みをしている最中なのだが、どうにも今日は、考え込んでしまう口らし！

それでも、仁の気合い注入のおかげで、僕は正気を取り戻し、やつとのことで、走り込みを終わらせることができた。ありがとう、仁。

1時間目が終わり、休み時間のチャイムが鳴り響く。

「ふあ～あ。よく寝たつと。」

隣の席で、そう言ったのは、仁だ。半年に何度も、席替えどころも

のがあるらしいのだが、なぜか毎回僕の隣は「仁」であった。

今回の席替えでも、当たり前かのように隣の席には「仁」がいた。どんだけ……

席は、一番右端の後ろの席であったので、かなりの特等席であった。一番右端の後ろの席は、クラスの誰もが狙っている席で、遅刻をしても何気ない顔で席につけるし、帰りも一番早く帰れる。授業中に寝っていても先生にあまり気づかれることはなく、快適な睡眠を保証してくれるのだ。

「てか、寝るなよ。」

「楓、お前は何か勘違いをしている」

仁は急に真剣な顔をしながら話してきた。

「勘違い?」

「授業の目的だよ」

「授業の目的だなんて、将来のためだろ? 大学や就職するときに、成績は大きく関わってくるだろ? じ。」

僕は、なぜか滅多に言わない、凄く一般論を口に出していた。僕がそんな一般論を話していると、「仁は違う違うと言わんばかりの表情を見せた。

「良いか、楓。授業の目的は適度な睡眠をとること。だ。」

「ちょい待て。それは目的じゃねえだろ。」

僕は、眞面目な顔をしながらそんなことを言つ仁^{にん}がとても滑稽に見え、ついつい笑ってしまった。

「いいや。睡眠をとることにはだ。部活で使う体力をしっかりととり、そして、放課後の練習で最高のパフォーマンスを出すことができる。」

「はあ……」

「今日だって、放課後の練習試合で仁^{にん}とのダブルスの練習試合があるんだぜ？そのためにはよく寝て、体力を温存しておくれと。」

それと、これとは話が別なような気がした。

でも、それを仁^{にん}のはナンセンスな話だ。仁^{にん}は、スポーツが生き甲斐と言つほど、スポーツに対する情熱は人一倍なのだから。もし、ここで話は別だろと言えば、仁^{にん}の熱いトークが待ち受けていることも十分承知であった。

「楓^{かづら}ー！仁^{にん}ー！金がなくて飯買えないよー！ー！」

意味不明だった。

そんな意味不明なことを言いながら、僕と仁^{にん}の方に小走りしてきた奴こそ、秋山翔太^{あきやま しょうた}に間違はずなかつた。いつもハイテンションで、いつでもどこでもハイスピードトークを

展開する。まあ、クラスに一人は必ずいるウザイ奴だ。

背が低いので、さらにもつつき度が増すというか……

翔太との出会いは、同じ部活で知り合ったわけではなかつた。

きっかけは、数ヶ月前。翔太がゲーセンで一人で熱くなつて遊んでいた時、不良数人に絡まれた。

背が低くて弱そうなのに、なぜか一人でゲーセンに行つていたのも疑問であつたが、かなりの絶体絶命状態であつた。

それを偶然発見したのが僕と仁で。もちろん、不良たちをボコボコにしたのは仁だつたのだが、それがきっかけで、翔太は僕たちに絡む……もとい、仲間となつたのだった。

ウザイ奴とは言つても、何気にムードメーカー的な存在があり、そんな存在が少々羨ましかつたりもした。

「金がなくて買えないのは当たり前だろ」

僕が的確なツッコミを入れてみせる。

「あーあー楓にはがつかりだ、がつかりだよー！」

翔太は、頭を抱えながらそう声を張り上げた。

「がつかりつて……。仁、なんとかしてやれよ。」

僕が、何気なく、仁に話を振つた。

仁は、白由田を向いていた。

「お、おい、仁！人の顔をしつかり見ろよ！友達が、飢え死にするかもしれないってのに！」

「なら飢え死にじろ！」

僕と仁は、ほぼ同じタイミングで同じ言葉を発していた。

そのやうどりが、馬鹿馬鹿しく、でもとてもおもしろかった。

と、授業の開始のチャイムが鳴り響いた。

次の授業は国語。僕の一番苦手分野だった。

どうにも、国語の授業は眠くなってしまうのだ。他の授業も、もちろん眠くなってしまうことはあるのだが、国語は他の授業よりも半端ない。

古典含め、語学がどうにもできないらしい。

国語の先生は、チャイムが鳴り終わると同時に、教室に入り、何事もなく授業を始めた。

「おい、内藤。この文、訳してみる」

「分かりませーん」

ひつして、今日も一日はあつという間に流れ、すでに放課後の部活の時間となっていた。

僕と仁には、テニスウェアに着替え、放課後に行われる練習試合のために、作戦を練るうと、部室でミーティングを開いた。

練習試合とはいえ、今回の対戦相手は、1・Cの七原、小早川コンビである。1・Cとは、勉学やスポーツなど、色々なところで敵対することが多かった。僕と仁は1・Aなのだが、1・Aはいたつて、普通のクラスであるのに対し、1・Cは人を見下す奴や、人生楽ばかりしてここまできた奴など、ほんとにむかつくな奴の多いクラスなのだ。1・Bや1・Dは、1・Cの事はもうすでに無視の状態であるが、1・Aだけは、なぜか敵対心むき出しなのだ。ちなみに、僕も、1・Cはどうしても好きになれない。

もちろん、テニスでも1・Cと1・Aは敵対しているといふのは言うまでもないだろう。

さて、今回、なぜ練習試合が行われたのかといふと、率直に言つてしまえば、顧問の勝手な興味心なのだが。

職員室で、1・Aと1・Cの仲が悪いという話を聞いた顧問の、小林和宏は、これはおもしろいことになりそุดと、

部活の練習中に、1・Aの僕と仁。1・Cの七原と小早川を呼び出し、練習試合をすると話してきた。
もちろん、負けたチームは、その練習試合の次の日、走り込みをプラス5周追加という罰ゲーム付きで。

最初は、顧問の身勝手な思いつきに嫌がっていた僕と仁であつたが、1・Cの挑発に見事に乗った仁のせいにより、急遽練習試合をすることになったのだ。

そして、ついに練習試合が行われた。

「悪いけど、1・Aには手加減しないんで。」

と言い放ち、ラケットを僕たちの方に向け、嫌な笑みを浮かべる奴こそ、僕たちがテニス部の中で唯一敵対心を持つ、1・Cの小早川わあきと昭人であった。

「昭人くん。落ち着いていこうね。」

その後ろでは、同じ1・Cの七原大輝ななはらだいきが、穏やかな笑みを浮かべ、昭人に話しかけていた。

この七原大輝が、強者である。

小学校から、テニススクールに通い、親のスバルタ教育を受け、育つたという。高校で行われるシングルスのテニス大会でも、毎回上位に位置するほどの有望株なのだ。

性格は穏やかであるが、何か裏がありそうな雰囲気が七原の特長だ。

「てめえら、余裕じゃねえの。こちとら、負ける気、全然ないんで。」

「

と、食つてかかるのが、仁であった。

仁は、スポーツのこと、特に勝負事になると、熱くなる性格なのだ。

「あれ、楓くんは、やる気がないのかな。」

「え？」

七原が急に話しかけてきたので、僕は少々驚きながら、答えた。

「仕方ねえよ。俺たちに勝てる可能性なんて、ゼロなんだし。諦め
も肝心だぜ？」「

クスクスと、小早川が僕の方を見てそう罵倒する。

「やつらのまま返してやるぞー。」

僕が言う前に、仁が小早川に言い放った。

そのやりとりを楽しそうに見る、顧問の小林先生。僕が、小林先生
を、結構、鬼畜な先生なんだと、そう思つようになつたのは、この
頃からだろう。

「楓」

「ん？」

「」の試合、勝とうぜ。」

仁は、感情的になりながらも、この試合をとても楽しんでいるかのよつこ、笑みを浮かべ、僕に話しかけた。

僕も、あんなことを言われて、当然、七原と小早川に勝ちたいと思うようになっていた。

「しゃあねえな。なんか奢れよ！」

「カレーで勘弁な。」

テニスコートは一気に緊張感に包まれていた。ギャラリーは、顧問の先生と、1・A、1・B、1・C、1・Dのテニス部員。
2年生や3年生の部員は、他のコートで練習試合や、基礎練習をしていたので、あまりいなかつたが、1・Bや1・Dの部員は、食い入るようにこの試合の見物をしに集まっていた。

人数はだいたい、20人程度か。

でも、今はそんなことは関係ない。この試合に勝ちたい。その感情があつたからか、緊張感はあまりなかつた。

そして、試合は始まったのだった。

試合をして、分かったことがある。それは、七原大輝は、本当に強いということだった。

ボールの読みもそうだし、相手がどう動いて、どう攻めるのかも、

一瞬で見極め、動き、対処する。

力のあるショットを打つわけでもないし、回転がめちゃくちゃかかったスライスを放つわけでもない。でも、確かに七原は強いのだ。七原の相方、小早川とはいって、前衛での小技を得意とする。前衛に出た時の小早川の強さといつたら、なかなかのものだった。

「あまいぜー！」

小早川のボレーを仁が俊足を活かし、ボレーで逆に返した。

「何つー？」

小早川は、まさか、このショットが打ち返されるはずはない。と、信じ込んでいた。そんな小早川に、打ち返せるだけの余裕はなく、球を見ているだけしかできなかつた。しかし……

「さすが、宮本くんだね。」

不気味な笑顔をする七原は、いつの間にか、ボールに追いついていた。

「ー？」

意表を付いた仁であったが、逆に意表を付かれる形となっていた。七原は、笑顔から真剣な顔になり、正確なショットを、絶妙なコースにたたき込んできたのだ。

後衛にいた僕は、全力で球を追いかけた。僕の足の速さで追いつけそうな球ではなかつた。でも、諦めたくはなかつた。結局、追いつくことができず、ポイントは1 - 0へ。

「くそ……」

凄く悔しかつた。仁が頑張つているのに、何もできないでいる自分が。

端から見れば、ただの練習試合なのかもしれない。でも、この時の僕は、ただの練習試合ではなかつた。

勝ちたい。絶対に勝ちたい。

その気持ちが、徐々に強まっていくのが、自分でも感じることができた。

仁と僕は息が上がつていた。

厳しいコースに次々に打ち込まれ、それを追いかけようと全力で走り、結局ポイントは1 - 0という、嫌な流れが続いた。精神的にも、体力的にも、僕は追い込まれていた。

「楓、すまん。」

仁は、何度も僕に謝ってきた。いいや、謝るのは僕の方なのに。

感情的になりすぎた僕は、サーブや、ボレーなどでのケアレスミスを連発していたのだ。

いくら、仁が上手に球を打ち返しても、感情的になり、ケアレスミスを多く出している僕に狙いを定め、打ち返せば、点は1-Cへと入る確立が高くなる。

そう、判断し、作戦を提案したのも、もちろん七原だらう。

6ゲーム1セットマッチで、先に6ゲーム取った方の勝ちだ。
3-1で、1-Cがリード。

流れは依然として、1-Cが握んでいた。

試合は終盤に差し掛かろうとしていた。

P・2 一心不乱

「やつぱり、七原のやつ、すげえ強え！」

「さすが、シングルス大会で毎回上位に入ってるだけはあるな。」

「このまま七原、小早川チームが勝つんじゃね？」

ギャラリーから漏れる声は、どれも1-Cが勝利するだろう的な言葉だった。

1-Aの同じクラスの人たちも、どちらかといつて、1-Cの強さに驚いている様子だった。

悔しい。勝ちたい相手なのに、勝てない、このもどかしさ。でも、本当に七原・小早川チームは強い。どうやっても、七原の絶妙な読みとテニスセンスに劣ってしまいます。

どうすれば良い……どうしたら勝てる……

僕は、勝利を確信する七原と小早川の方をじっと見ながら、そう考えていた。

ふと、大きな声がした。

「おー、てめぇらーボロボロじゃねえかー！」

僕と仁。それに、1・Cや、練習試合を見に来たギャラリーも、大きな声のする方に視線を向けた。

そこへ、堂々と立っていたのは、秋山翔太であった。

「翔太ー!？」

僕と仁は、声をシンクロさせてしまった。

「1・Cと1・Aの試合……それに、仁と楓が出るって話だったから来てみれば、何だよその様は！」

何も言い返せなかつた。確かに、僕と仁は、七原・小早川に苦戦を強いられている。いや、もう、勝機が見あたらないといつても、過言ではないはずだ。

そんなことを翔太は、見透かしているようだつた。

「で、負けそうになつて、アセアセしてんのか？アホだろ。もしくは、バカだ。」

そこまで、言われる筋合いはあるのか。と、僕は少し頭にきた。

「そんな、ビジョビジョ、試合になんて勝てやしないとか。つべ、おー！離せー！」

翔太を取り押さえに来たのは、翔太と同じ部活に所属している部員たちだった。

翔太が所属している部活は、剣道部。なぜ、剣道部にしたかというと、剣で人を倒すのが夢だったという、これまた、意味不明な理由でなのだが。

それでも、剣道の腕はなかなかのもので。

問題児っていうのは、部活の時でも同じみたいで、剣道の部員達は、申し訳なさそうに、翔太を連行しに来たのだった。翔太は、必死にもがこうとしたが、複数相手じやどつにもならず、強制連行を余儀なくされた。

周囲は、シリアスな雰囲気から、クスクスと笑い声さえ聞こえるような雰囲気になっていた。

「おい、楓。仁。余計なこと考えんな！ ーーなんか、屁でもねえぞ！」

連行の途中、翔太はそう最後に言い放ちこの場から姿を消していくた。

「なんだ、あいつ。バカじゃね？あれで、高校生かつての」

クスクスと笑いながらそんなことを言ったのは、小早川だった。

「いや、バカなんかじゃないさ。」

僕は、反射的に、そう言った。

そう、バカなんかじゃない。テニス部員や僕たちを含め、20人以上いるギャラリーの中で、単調で、なんの捻りもない言葉を大きな声で言う。

端から見れば、なんてバカな奴なんだ。恥ずかしい奴と思うかもしれない。

実際、翔太の口から、僕の名前が出てきたときは、とても恥ずかしかったが。

でも、翔太は、恥ずかしさなんて気にせず、僕たちに、精一杯の喝を入れてくれたのだ。

不器用な、あいつなりに、かけられる言葉を一生懸命探して。

僕は、テニスラケットをぎゅっと強く握りしめた。

「アハハ。ちょい、熱くなりすぎたわ～。いや、反省反省。」

まいつたな～っと、照れ笑いをしながらそう言ったのは、仁であった。

確かに、そうだ。僕も、相手の挑発で感情的になり過ぎてしまった。そのために、仁が味方になつていていたのに、一人でテニスをしてしまつていたのだ。

「七原が、しつかりとボールを返すなら、俺がそれについて行けば良いって事だろ。」

仁は、急に真剣な表情になり、七原のことじつと、睨みつけた。まるで、闘争心が復活したかのように。

「楓。あとは、頼んだ。」

仁の言つてゐる意味を理解したのは、試合が続行され、間もない頃だった。

七原の打ち返すボールに追いつき、返すのは、ほとんど仁であつた。

この一人で、打ち合いをしているかのように。それは、見ていてとても凄い光景だった。

どちらも、ドライブやトップスピンをかけることなく、フラットに丁寧にボールを運んでいた。それは、教科書に載っているストローグのようだった。

決して攻めるショットではなく、相手のコートへ正確に弾を運ぶショットだった。

そして、得点が入るのは、僕か小早川にボールが渡ったときだった。その時、僕は理解した。仁があの時僕に言った“あとは頼んだ”という意味を。

今までの戦法は、運動神経がすば抜けた仁が、決め球を打つ形であったが、今回はその逆。

仁が、僕のカバーに入り、決め球を僕に打たせるものであった。そう、僕が勝負する相手は、小早川に絞られたのだ。

試合は、お互い、譲らない展開を見せつづけた。しかし、カウントは4-2。依然として、1-0がリードしていた。

このままでは、勝機は見いだせない。そう、思つた僕は、ある決断に到つた。

まだ、練習試合でも、もちろん試合の時でも使つたことはない、ある技を。

一度だけ、仁とストローク練習の際、そのショットを使つた時があった。

あの時は、仁に、この弾の威力じや、相手にチャンスボールを「えてしまふから、まだ使わない方が良い。もっと、練習してから。との、話があつたために、今まで使つたことはなかつた。

しかし、ここで使わなきゃいけないと、そう僕は思つたのだ。

練習は、自分なりに相当積んできたつもりだ。壁打ちなどで、何百回やりまくったことか。それでも、これだ！と思えた、感触は今までには一度もない。

僕は、仁の方にスッと視線を向けた。

仁は、凛とした表情で、構えをとっていた。それは、とても心強いもので、見ているだけで、勇気が沸いてくる。

失敗という恐れはなかった。仮に、失敗したとしても、仁は、決して僕のことを責めたりはしないだろ？ 奴はそういう男だ。

仁は、スポーツが本当に好きで。僕が、最初、仁に出会った時も、話す内容といつたら、いつもスポーツの話だった。走ることも、球技も、器械体操なんかも、もちろん格闘技だって、なんでも、無難にこなしてしまうのだ。

勉強は、全くできないし、いつも授業中は寝てばっかりなんだけどね。

でも、仁は、不良っぽい見た目とは正反対に、すげえ心が広いっていうか、良い奴で。

授業での体育の時間、毎回仲間外れにされるのが、クラスに必ず何人かはいる運動音痴の奴だ。それでも、仁は、率先して、自分のチームに入れようとする。もちろん、貶しているわけじゃなく、一緒にチームを組んで、勝つ喜びを分かち合おうって。

もちろん、運動音痴だから、ミスはする。それも、普通の生徒より、

かなり多くミスを連発する。それでも、仁は、相手のことを責めたり、イライラする表情を見せたことは、僕の知る限り、一度もない。逆に、励まし、運動音痴の生徒と共に、スポーツを楽しんでいる様子を、僕は何度も見てきた。

仁にとつては、それらは当たり前のことなのかもしれない。でも、それは、決して誰もが真似できるものではない。仁だからこそ、できることなのだ。

だから、僕は仁を信頼し、この新技を、この場面で出すぞうという決断をとることができた。

精一杯、全力でプレイしている仁のために。恥ずかしさなんて気になせず、僕たちに喝を入れてくれた翔太のために。そして、自分自身のために。

僕は、テニスラケットを、ぎゅっと握ると、一呼吸をした。

小早川からのサーブ。そう、難しいボールではない。少々、力のあるショットではあるが、いつも仁と、練習してきた僕にとっては、このぐらいのスピードボールは容易く返せるものだった。

僕は、トップスピンをかけ、相手のコートへと運ぶ。それに、小早川が、追いつき打ち返す。弾はこちらへ。仁は、小早川から返ってきたボールをボレーで返す。やはり、さすが仁。鋭いボレーをしてみせた。七原は、それを読み、仁のいないとこひへ、ぽんつと、ボールを返した。

今だ！！

僕は、ボールの軌道を確認し、ラケットを、バックストロークに構え、正確に、ボールとの距離を縮めた。

ボールの高さ、落点、スピードの把握。僕はラケットを、やせ斜めに傾ける。

ボールが打点へときた、今が打つタイミングだ。

僕は、素早く、ラケットを前へ切り出した。

「！？」

この感覚。今までにない、感覚だった。

普通にストロークして弾を運ぶ感覚とは違い、ボールが勢いよく回転がかかる感触が僕の右腕から、全身へと伝わってきた。

七原は、仁の鋭いボレーに対応したせいもあり、追いつくことまできず、
ボールは、低弾道で、さらにスピードを増し、小早川の方へと、向かっていった。

小早川は、驚いた表情を見せたが、このぐらこのスピードなら……と

いう表情を見せ、打ち返す構えに入った。

「なっ！？」

小早川は、ボールを返すことほりできなかつた。返すびじるか、大きく空振りをしてみせたのだった。

「んだよ、あの『テタラメ』なボールは。弾が、滑つてきた。」

「スライスか

七原は、楽しそうな表情で、僕の方へ視線を送つた。

「楓、ナイススライス！」

仁は、驚きつつも、そつ、声をかけた。

やつとい、できた。

完璧なまでのスライスを打てたのは、今日が初めてだつた。

もちろん、軟式テニスでも、“スライスもどき”みたいなものは打てたが、やはり、威力そのものが違かつた。

弾道そのものは、普通のショットと大きく変わりず、相手の手元でぐっと変化をする。

打ち返すことに慣れていない奴にとっては、とても打ち戻すべく、ミスを誘いやさしいボールだ。

だが、ちゃんとしたスライスが打てないと、ボールの勢いは死に、むしろ相手にチャンスボールを与えてしまう恐れがある。それが、スライスだ。

小早川は、スライスショットを打ち返すことに慣れていないらしく、そもそもスライスショットを体験したのは今日が初めてと言わんばかりの、表情をしていた。

「試合は、ここからだぜ？」

仁は、おもしろくなつてきたと言わんばかりの表情をしながら、そういう一言、七原と小早川に言つてみせた。

「はあ……はあ……」

僕と仁は、今朝も、部活動の最後の締めくくりである、走り込みの最中だった。

「今日は、やけにきつこな……

僕がそつまつと、仁はクスッと笑った。

「まあな。さすがにプラス5周はきついぜ!」

僕たちの校舎周りを走ると、丁度、1周1kmの計算になる。それを、今日は15周走らなければならぬので、簡易計算すると、15km走らなければならぬことになる。

「仁、ほんと……申し訳ない。」

僕のミスだった。昨日の練習試合。僕が綺麗なスライスを打つたあと、試合はどちらに傾くか分からぬ展開となっていた。しかし、僕が綺麗なスライスを打てたのは、あれが最初で最後だった。他の

ショットは、全て失敗し、相手のチャンスボールとなってしまったのだった。流れは、完全に1-Cへ傾き、そのまま6-3で終了。

そして、今朝、プラス5周という、ちょっとした嘘めにあつていてるのが、僕たち1-Aコンビなのだ。

「なんで、謝るのよ？」

仁は、当たり前かのように、そんなことを口にした。

僕は、少々拍子抜けしてしまった。

これじゃ、僕が、ちょっとした勇気を出して仁に謝った意味がない。

「いやー……うん。僕が、調子にのって、できもしないスライスにチャレンジしちゃってさ。だから……」

「なんつーか

僕が、言いたいことを全部囁つ前に、仁は珍しく、話を横切った。

「俺は、昨日の試合。かなり楽しかったぜ？ 楓は、どうよ？」

「楽しかった。負けて悔しかつたけど。」

僕がそう言つと、仁は、またクスッと笑つた。

「だろ？俺も同じ気持ちだぜ。確かに、負けて悔しかつた。でも、後悔はなんもない。失敗を恐れて、何もチャレンジしないより、全力で戦つて、チャレンジして、最後の最後まで諦めないで。それで駄目でも、あの時、ああしておけばよかつた、なーんて、気持ちにはならないだろ？」

「僕がミスしなきや、勝てたかな……ってのは、後悔じゃないか？」

「楓は、全力じゃなかつたのか？スライスがうまくいかなくとも、ゲームセットになるその時まで、挑戦し続けたのは、最後の最後まで諦めよつとはしなかつたからじゃないのか？」

「 もうひろさん。」

それで良いと言わんばかりの表情で、仁は、走るスピードを少し速めた。

僕は、仁の背中を見ながら、昨日の試合のこと思い出していた。

確かに、僕は、あの綺麗なスライスショットを打つたあと、絶対に最後まで諦めない。まだ、試合はここからだと思つた。

スライスがうまくできなくて、諦めようとはしなかった。試合を終えて、負けた時、なんか熱いものがこみあげてきた。でも、後悔なんて微塵も感じなかつた。むしろ、清々しい気持ちになつたぐらいだ。

試合後の仁は、悔しがっていたものの、確かに、すつきりとした晴れた表情であつた。

「楓」

仁は、後ろにいる僕に、声をかけた。

「ん？…どうした？」

「俺、ああいう、マジになつた楓は久しぶりに見たぜ。」

そんなことを急に言われるもんだから、僕は、どう返事をすれば良いのか困つた。

「い、いや～、どうにかしきつてたのかな。珍しくマジになつたのに、全然うまくいかないし……ほんと、格好悪いよな～」

つい、本音が出てしまつた。

何に対しても本気を出さなくなつていつたのは、いつの頃からだろ

う……

いつも、これぐらいできればいい。これ以上しなくても良いだらうと、自分に境界線を張り続けてきた。境界線を張り、危ない橋を渡らなければ、誰になんと言われることもない。失敗など恐れることもないのだ。

だが、昨日の試合は、明らかに、本気を出している自分がいた。本気を出して、その掛け句、全然スライスショットは決まらない。相手に流れを譲ってしまい、敗因をつくってしまった。なんて格好悪いのだろうと、そう思った。

そんな本音がつい、言葉として出てしまったのだ。

そう一言だけ、仁は言った。

「俺は、好きだぜ？ああいう楓も。」

「お前に言われても、なんか嬉しくねえな」

二人で、大いに笑った。

あと、4周。まだまだ、先は長いが、もっともっと走れそうな気がした。

朝のちょっとした休み時間。クラスでは、昨日のテレビの内容についてだとか、今日の放課後、何しようか。だと、そんな会話でわいわいと少々うるさく、でもどこか安心できる雰囲気だった。

「内藤氏、私も参加して良いのですか！？」

髪の毛が妙にテカテカしていて、ごつつい輪郭。なのに、顔のパツは童顔という、なんともおかしな奴。こいつの名前は、岡田真之介。

悔しいが、僕と同じ年齢だ。

オタク集団の中心人物で、休み時間、真之介の周りには、同クラス他クラス問わず、いつも多数のオタクが群がつて……もとい、集まっていた。

オタクという属性で偏見は持たないが、僕は、あまり多人数で集まるのが嫌いな性格なので、今まで真之介とは、あまり話す機会がなかつた。

むしろ、真之介が、何度も僕や仁、翔太に話しかけてきたことはあつたけど、こちらが、話かけたことはないだろ。

それぐらいの仲なのに、どうして、今回、僕から話しかけたのか。

というのも明日、カレーパーティを翔太の家で開くことになり、カレーパーティに参加するメンバーを増やす係に、僕が選ばれたからだった。

比較的、誘いやしい真之介に声をかけたのだが、少々、僕は後悔をした。

カレーパーティをすることになったのは、仁・僕・翔太の会話からだった。

ある休み時間。僕は仁に、カレーを奢ってくれと、『冗談で言つた事があつた。

すると、翔太がいきなり

「よし、カレーパーティやるぞ！」

と、言い出したのだ。

カレーパーティは、以前にも翔太の家で、行われたことがあった。カレーパーティと言つても、翔太のお婆ちゃんが作るカレーライスを食べる。つてことなんだけど、それが半端なく美味しいのだ。

今回も僕と翔太と仁の、いつものメンバーでやるつもりだった。だが今回は、人数を多くしてみるのも楽しそうだな。ということで、ジャンケンで負けた僕が、人事担当になつたわけである。

真之介は皿をギラギラさせながら、僕に視線を向けていた。

「あ、ああ。良かつたら、どうかな……と思つても。」

「もちろんですとも！内藤氏の誘いとなれば、火の中、水の中、地獄にだつて行つてしまひますぞ！」

「アハ、アハハ」

きっと、真之介は翔太と気が合つたと、ひしひしと感じた。

朝の会が始まった。チャイムが鳴ると同時に担任の磯辺美雪いそべみゆき、通称、いっちーが教室へと入ってきた。

いっちーは、かなり美人先生だ。

ボン、キュツ、ボンの三大要素をクリアし、顔も見とれるほど美し

く、男子生徒には、一番人気の先生といつても、過言ではない。性格はさっぱりしていて、優しくは…ないな。

「みんな、おはよー。」

いっしーが教壇につき、やうやく、おはようございますといつ声が教室全体に響き渡った。

「今日も、元気な声でよろしいー先生は、嬉しき哉」

いっしーは、一通り生徒の様子を見ながら、今日も満足げに、出席をと咐はじめた。

僕は、部活でのラン15周と、真之介とのやりとりで、すでにグロッキー状態となっていた。

出席も取り終わり、いっしーの朝の話が始まる。

「あ、いっしー、今日は政治について語りたいんだ？」

隣の席に座っている「は、そんな」と言いながら、僕に話しかけてきた。

「ふーん」

つか、それがどうじたって話だ。一いちどら、15周走らされて、体力的に限界な挙げ句、真之介のあのギラギラした目で精神崩壊状態だ。

一方、15周走ったとは思えないほど、ピンピンしている仁の姿が隣にはある…

「つか、よく元氣でいられるよな」

皮肉を込められるだけ込めて、僕は「こいつ」と言つた。

「まあな。おかげさまで」

逆に、憎たらしい返事が返ってきた。これ以上、仁と話しても自分がどんどん、やつれていいくと思い、とりあえず、寝ることにした。
「ごめんね、いっちー。今日も、いっちーの伝えたいこと、分からないや。」

僕が、そろそろマジ寝モードに突入しようとした頃、いっちーの話が終わった。

「それで、今日はみんなに、嬉しいお知らせがあるわよ

「なんだなんだ？結婚か？」

翔太の声だ。

教室からは、笑い声が響き渡る。仁も、クスクスと笑っていた。
僕は、依然として寝る体勢を崩さなかった。

「お知らせっていうのは、今日から、1・Aに転校生がくることになりました。」

おおお…という、驚きの声ともとれる、いや、歓声ともとれる声がシンクロしていた。

僕も、転校生と聞いて、少し寝る体勢を崩し、ぐったりした顔を教壇の方へ向けた。

「楓、寝あと付いてるで？」

仁は、ケラケラと、僕の寝顔を見て笑っていた。

「うっせ、生まれつきこういう顔なのー！」

僕は、そう言い返したが、それもそれで嫌な話だ。

「いつちー、転校生ってさ、女の子？」

また、翔太の声だった。

いつちーは、翔太のくだらない言葉に、クスッと笑い、また話を続けた。

「以前は、北海道の高校に通っていたのだそうだけど、親の都合もあって、こっちに来たみたい。詳しい話は彼女から聞いてみて」

いつちーの言葉遣い、“彼女”から意味すること、つまり、転校生は女の子だということが分かった。

「つおお、オナノコだ！！」

翔太は、いきなり席を立ち、ガツツポーズをしてみせた。

「おい、翔太、必死になり過ぎ」

「翔太きもーい」

教室からは笑い声と、罵倒に近い言葉が、翔太を包み込んでいた。翔太は、これが俺の本職だと言わんばかりの、満足した表情をしていた。

「翔太ってやつは、どうも、笑われるのが好きらしいな」

僕がそう「」に言った。

「あいつらしいっていうか、なんていうか。ああじゃなきゃ翔太じゃないだろ」

仁は、冗談とも本音ともとれる言葉を言った。が、確かに考えてみれば、あいつらしい。

この1-Aのムードメーカーといつたら、一番先に名前が出てくるのが、秋山翔太である。

それは、1-Aのほとんどの生徒がそう思うに違いないだろう。なんか馬鹿な奴だな。おかしい奴だと思われながらも、翔太は、ムードメーカーという存在としてみんなに認知されている。それも、1年も経っていないのに。

僕は、ふと翔太のことを羨ましく思うことがある。
人目を気にせず、生きていくって、簡単なようで、凄く難しい事だ。

こうしたら、誰かに嫌われるんじゃないか。何か悪いことでも言われるんじゃないか。そんな感情を、人はもつてているのだと思う。差がつくのは、そのことに気づいているか、気づいていないかってこと。

自分には到底できないこと、みんながためらうこと、翔太は、朝飯前かのようにやつてしまつ。それは、人目を気にせず、自分らしく生きられる強さを持つた、翔太だからこそできることなのだ。

「んじゃ、早速転校生に入つてもらおつかな」

いつちーはそう言い、ドアを開け、廊下にいるであろう、転校生に入つてとの合図を出した。

その転校生は、スッと教室に入つてきた。

転校生が入ると、一斉に歓喜の声が響き渡つた。それも、今まで聞いてきた歓喜の声より大きく、甲高いものだった。
周囲では、可愛いとか美人とかそんな声が響き渡つていた。

「おい、楓。すげえ転校生が入つてきたな。」

考え事をしていた僕を、現世へ引き戻してくれたのは、仁のこの一言であった。

「ん？」

状況がよく掴めない。

仁は、淡泊なリアクションをとった僕を見ながら、呆れた表情をした。

「ん？じゃねえよ。ほらよく見てみろよ。正真正銘の美少女転校生だぜ？」

左の席にいる仁の方から、前方の方へ、視線を向けた。
そこには、いっしーと、噂の転校生の姿があった。

背は165cmといったところか。髪は長めで、サラサラしている感じだ。髪色は少々茶色であるが、地毛であろう。体型的には、いつちーと比較しちゃ可哀想であったが、太ってはなく、それでいて痩せすぎでもない。顔は小さく、目元も、鼻元も、口元も……いつちーが美人であるとしたら、この転校生は可愛い系と言つた方が適切な感じがした。

そのことよりも、僕はどうか違和感があつた。それもかなり重大な。

「どうした？」

何か、考え事をする僕を見た仁は、そう声をかけた。

「いや、なんか引っかかるんだ……」

「もしかして、一目惚れか？把握した。協力するぜ！」

仁は、ニヤッと笑いながらそんなことを言っていたので、僕は慌てて否定した。

ハイテンションで舞い上がる翔太をスルーし、いっちは、自己紹介をするようにと、その転校生に声をかけた。

転校生は、少々恥ずかしそうに、クラス全体を見渡し、一呼吸をつき、喋り始めた。

「皆さん、はじめまして！今日から、この学校、この教室でお世話になります。山下カノンです。よろしく……」

「カノン……！」

僕は、そう大きな声を出しながら、席から立った。

本能であつたのだろう。自分が大きな声で転校生の名前を言つたのも、急に席から立つたのも。

今、いち一の隣にいる山下カノンという女性が誰なのか、自分の中で引っかかっていたもの、違和感というものが一瞬にしてなくなつた時、僕は本能で、そうしてしまったのだ。

クラスのみんなは、急に席から立ち、大きな声を出した僕の方に視線を向けていた。

恥ずかしさはない。僕は、確認するかのように、山下カノンの方に、視線を向けていた。

「え……」

山下カノンも、驚いた様子で僕の方を見た。

少し間をあけ、山下カノンは、ふと何かに気づいた表情をした。

「嘘……か、かあくん?！」

やつぱりそうだ。

この転校生は、山下カノン。あの山下カノンに間違いなかつた。

僕が通っていた小学校は、家から徒歩30分ぐらいのところにあった。

30分といふと、小学生にとっては、どれだけ歩いても学校に着かないよつて感じじるぐらい、遠く長い道のりだ。

僕は、いつものように学校に到着し、教室へに入る。

僕の席は、日の当たる、左端。この席は、僕のお気に入りの席で、晴れていると、外から暖かい日の光が包みこんでくる。夏場はちょっと暑いが、それ以外の季節は、眠ってしまうぐらい、本当に気持ちの良い席であった。

席に着くと、僕の机には、決まって落書きがされてあつた。

“男女”
“おかもみみたいな名前”
“あほかえで”

今日は、いつも以上に落書きが多い。

僕は、消しゴムを取り出し、机に書いてある落書きを消し始めた。いつもことなので、慣れてはいるが、こいつ落書きが書かれているのを見ると、誰がこんなことを書いたのか。どんな気持ちでこれを書いたのか。凄く恐かっただし、泣きそうになつた。

僕は、両親を憎んだ。なんで、こんな名前をつけたのだろうかと。当時では、男らしい男の名前とか、女らしい女の名前が、主流であった。なので、当然のごとく、僕みたいなちょっと変わった名前の奴は、いじめの対象となるのだ。
もつと、まともな名前をつけて欲しかつた。

泣きそうになる感情を抑えつつ、僕は、無我夢中で、机に書かれている落書きを消した。

「おはよう、かえでくん」

ふと、力のある声がして、僕は驚いた。
机の落書きを消す作業を一旦中止し、声のする方を見ると、そこには一人の可愛らしい女の子が立っていた。

「かのんちゃん……」

山下カノン。彼女との出会いは、小学校の入学式の時である。僕は、人見知りが激しく、入学式の頃、ずっと下を向いていた。その時、彼女が僕の前に現れたのだ。

「よろしくね！」

「…………よろしく。」

これが、僕とカノンとの、なんだか恥ずかしく、とても懐かしい最初の出会いだった。

カノンは、なぜ僕なんかに話しかけたのか、今にして思えば納得がいく。

彼女は、とても社交的であった。それ故、同じ教室である人と仲良くなるために、こうして、みんなに挨拶をしていたのだ。とても小学生とは思えない行動力である。

それ以来、彼女は、僕に何回も話しかけてくれた。

でも、僕は「あつそり」「へえ」などと、簡単に話を切り上げてし

まう。何せ、極度の人見知りだったからだ。

友達を作りたいとは、僕も思っていたが、いざ人前に出てみると、どうしてもゴモゴモしてしまう。

初対面の人は何を話したらいいのだろうか。どうしたら友達になれるのか、僕は全然分からなかつた。

「かえでくん、おはよう！」

そんな何気ない言葉を毎日、カノンは僕に言つてくれた。呆気ない態度を毎回してしまった僕なんかに、カノンは毎日、挨拶をしてくれたのだった。

カノンと、ちゃんと会話ができるようになったのは、小学校4年の頃。

小学4年……。僕に対するいじめが徐々に増えてきた頃だった。

背は低く、名前は女らしい。性格も、人見知りだから、どうしても他の奴からは、暗い奴に見られてしまう。

そんな僕に、友達と言える人は、誰一人としていなかつた。

はじめの頃は、声をかけられたこともあつたが、もう誰も僕に声をかけてはくれない。もちろん、僕もみんなと仲良くなりたいと思い、精一杯話しかけた。でも、どうしてもゴモゴモしてしまう僕の事を、友達として、一人の仲間として、認めてくれる者はいなかつた。

とても辛かつた。とても恐かつた。

上履きを隠されたこともあった。教科書が全部ゴミ箱に捨てられたこともあった。

でも、僕が一番嫌だったのは、みんなから無視されたことだった。教室にいても、廊下を走っても、校庭に出ても、みんな僕の事なんか、まるで存在していないかのような態度だった。

それが、とてつもなく恐くて、寂しくて、悲しかった。学校に来るたびに、自分が、この世界で存在していないかのような気持ちになった。

僕の存在を、0から100まで拒否されているみたいで……

その頃、クラスでは席替えがあった。

僕の席の隣になる奴は決まって、なんでこいつの隣なんだよ……といった表情や態度をする。

だから、この席替えといつイベントは、僕にとって、本当に嫌いなイベントの一つだった。

席替えは、くじ引きで決める方式だった。

新しい席が決まっていく。新しい席順が、担任の先生によって、黒板に書き出されていった。

友達と遠く離れてしまい、ため息をつく人や、やつとのことで友達と近づくことができ、歓喜の声を出す人もいた。

僕は、この雰囲気が本当に嫌いだった。なぜなら、友達がいなかつたから。

だから、みんなのように、ため息をつくことも、歓喜の声をあげることもできなかつた。それが、本当に悔しかつたし、憎らしかつた。

僕は、ふと自分の席はどこか、黒板の方を見た。

左端だつた。

今回、僕の隣に座る人は誰なのか、何気なく確認をした。
あの不良グループの誰かじやなきや良いな。僕のことを虚めるあいつじやなきや良いな。

そんなことを思いながら、僕はじつと黒板の方に視線を送つた。

そして、ついに僕の隣の席になる人が決まつた。

「よろしくね、かえでくん！」

その人とは、席が決まるのと同時に、僕に話しかけてくれた子。そつ、山下カノンであつた。

席替えをしてからというもの、山下カノンは、挨拶だけじゃなく、何気ないことでも、話しかけてくれた。

それでも、僕は、いつものように呆氣ない態度をするのだった。

山下カノンには、たくさんの友達がいる。僕が雲に隠れた用であるとするなら、彼女は太陽のように、サンサンと明るく、クラスの中 心人物的存在だった。

呆氣ない態度しかできない僕に話しかける時間があるなら、もつとたくさんの友達と仲良く喋れば良いのに。なんで、彼女は僕に話しかけてくれるのだろうか。と、不思議で仕方がなかった。でも、凄く嬉しくもあった。

僕の存在を認めてくれる人がいた。
やつぱり、僕はちゃんと生きているんだ。そつ、思うことができた
から。

「わたしも、けすのてつだうね。」

カノンはそう言って、ランドセルの中から、筆箱を取りだし、消しゴムを見つけ、机に書いてある落書きを消し始めた。

泣きそうになる感情を抑えていた僕は、安心したせいか、カノンが一緒に消してくれるのが嬉しかったのか、理由は分からぬが、目から滝のように涙が出た。

女の子の前で泣きたくはなかった。だから、目から滝のように涙が出てくるのを、必死に拭おうとした。でも、涙は止まらなかつた。ありがと……ありがと……。そう僕は、心の中でカノンに向かつて言い続けた。

「ほーら、オトコノコなんだから、なかないの」

カノンは僕に精一杯の励まし……いや、慰めなのかもしれない。でも、その言葉はとても温かいものだった。

机に書かれた落書きを消し終えると、カノンは少々考え方をし始めた。

僕はその光景がたまらなく不思議で、じつと彼女の方に視線を向けていた。

カノンは不思議がついている僕のこと気に気づくと、アハハッと照れ笑いをした。

「これから、かえでくん。じゃなくて、かあくんってよみぶね

「え……」

「かえでぐるのニックネーム…かあぐるできまつー。」

なんて、ニックネームのセンスだ。

カノンは、僕の方を見ると、ニコッと笑顔を見せた。
その笑顔は、今でも忘れる事はない。純粋で、凄く優しいものだ
った。

「なんだよ、へんなニックネームだな」

僕は、涙を拭きながら、また、呆気ない態度をした。

「わたしのことは、カノンでこよ。そのまがよびすこじょ
？」

この日から、僕とカノンは、少しずつではあるが、ちゃんと会話ら
し会話をすることができるようになつていった。

虧めなんて、もう恐くなくなつた。みんなに無視されるのも、平氣になつた。

なぜなら、カノンがいてくれたから。一人で十分だつた。僕のことを、一人の友達として認めてくれる人。僕の存在を認めてくれる人が一人いれば、僕はどんなにつらいことがあつても、平氣に思えるようになつた。

僕に対する虧めは、なくならなかつた。でも、学校に行くのが毎日楽しみになつていつた。

朝、学校に到着し、教室に入ると、いつもカノンが先にいて。

「かあくん、おはよー。」

と、いつもの元気な笑顔で挨拶をしてくれる。

休み時間では、特別変わつた話じやないが、カノンと一人で楽しく会話をした。

下校の時間になると、カノンはいつも「一緒に帰ろう」と、誘つてきてくれた。

そんな何氣ない事が、僕にとっては、本当に幸せだつた。
こんな日々がずっと続けば良いなと、そう思つていた。

雨が降る月曜日の朝。

いつもなら、先に学校に到着し、自分の席に着いているはずのカノンの姿が、その日はなかった。

学校を休んだことは、カノンは今まで一度もなかつたのに、今日はどうしたのだろうか。風邪でも引いたのかな……と、思ったが、また明日になれば、あの優しく、温かい元気な笑顔をして、学校に来るだろうと、僕はそう思っていた。

その日、僕は、雨が強く降っていたので、親に連絡をとり、車で家に帰つた。

カノンが休んで一日が経つた。

僕が教室に入ると、カノンの姿はなく、教室では、何やらいつもと違う雰囲気があった。

僕は、そんな雰囲気なんてどうでもよかつた。僕が、気になつたのは、カノンがいないということだった。

本当に何かあつたのではないか……活潑で小学生とは思えない行動力のあるカノンのことだ。何か、大きな事件に巻き込まれたんじゃないか。僕は、心配で心配でたまらなかつた。

朝の会のチャイムが鳴り、先生が教室へと入ってきた。それと同時に、カノンも教室へと入ってきた。

僕は、カノンの姿を見たとき、とても安心した。何事もなく、無事にこうして、学校へと来てくれたのだから。

だが、担任の先生から出た言葉は、衝撃的で、耳を疑うようなものだった。

「みんなはもう知っていると思うが、山下カノンは、今日この学校から旅立つことになった。」

クラスは一段と騒がしくなった。

カノンは、いつも元気で明るい表情をしてはいなかつた。

「両親の都合で、引っ越すことになったそうだ。みんな、寂しいと思うが、カノンも寂しいはずだ。今日、精一杯カノンを送り出してあげようじゃないか。」

信じられなかつた。

カノンが今日で、この学校からいなくなる……信じられるはずがなかつた。

一昨日まで、あれだけ、楽しく話していたじゃないか。何事もないような表情で、僕に温かい笑顔を見せてくれたじゃないか。

僕は、この日、一度もカノンと話すことはなかつた。カノンは、それでも僕に話しかけてくれた。でも僕は、カノンと話そうとは決してしなかつた。

「さよなら」も。「また会おう」ってことも。そして、「ありがとうございます」とて言葉も。カノンが、今日学校から去っていくこと。それを、認めてしまつようで、僕は、何もカノンに伝えることができなかつた。

何も伝えることができないまま、カノンは、学校から姿を消した。

僕は、目を開けた。

なんだ、夢か……

なんて、変な夢を見てしまつたのだろうと、僕は暗闇から目覚まし時計を探り、時間を確認した。

「5時過ぎか……」

一度寝する時間ではなさそうだ。

カノンと衝撃的な出会いをしてから、一日が経つた。

あの出来事も、夢であつて欲しいなと思いながら、僕は、寝起きで
氣怠い体に鞭を入れ、すっと起きあがり、水を飲みに自分の部屋を
後にした。

P・5 カレーパーティ略してカレバ！？

今日も、何事もなく学校が終了し、僕たちは学校を後にした。

翔太の家に遊びに行くのは、これで何回目だろ？

翔太の家系はちょっと変わっていて、母は小さい頃に亡くなつた。精神の病で、自殺をしたのだという。

父は長期の出張で、家にはほとんど帰つてこない。その代わり、祖母が翔太の面倒をみていたのだった。

もちろん、翔太はお婆ちゃんっ子だった。

翔太にお婆ちゃんの悪口を言つた途端、とてつもなく不機嫌になるのを、僕と仁は今までに何回も見てきた。

今日は、待ちに待つたカレーパーティの日。僕はこの日を本当に楽しみにしていた。なぜなら、翔太のお婆ちゃんが作るカレーは、そこの店にあるカレーよりも、半端なく美味しいからだ。言つながら

“食べてみて、初めて分かる、この美味さ”

つて、感じだ。……なんか……CMのキャッチフレーズみたいだねつ！

僕は、日課と言つていいほど、学食（学校食堂）ではカレーを食べるのだが、この日のために、僕はここ数日間、学食でカレーを食べることをやめた。それぐらい、このカレーパーティは、僕にとって待ち遠しいものであった。

だが、予想外の事態が起きたのだ。問題は、カレーパーティの参加者だった。

僕と翔太と仁。それに真之介。ここまででは、昨日の計画通りだった。だが、当日になって、もう一人メンバーが加わったのだ。

そう、そのメンバーっていうのが、山下カノンなわけで……。

カレーパーティの人事係は僕のはずであった。もちろん、カノンのことを誘おうとは思わなかつた。なんか、気まずいし……。

だが、真之介が「ここは、歓迎会としゃれこみましよう！」なんて、カノンのことを誘うもんだから、急遽、カレーパーティにカノンが参加することになったわけだ。

何がしゃれこむだつて？お前のアゴをしゃこませてやるうか！！

僕は、怒りに近い感情を抱きつつも、翔太の家へと向かつた。

「さて、山下殿の歓迎会アーノド、交流会の始まりですぞー。」

真之介は、翔太の家に着くと同時に、テンションが最高潮に達していた。

「うひしゃー！…氣合に入ってきたぜー！…！」

続いて、翔太がそう言いながら真之介と共に、はしゃぎ始める。

翔太のお婆ちゃんが、玄関で出迎えてくれた。とても優しい笑顔で、どこか懐かしい印象を受けた。

翔太は、みんなのことを部屋に案内すると、ばっちゃんの手伝いをすると、僕たちのいる部屋からササーっと出て行ってしまった。

「なるほどー。山下殿は、音楽関係の部活に入ったのですか。」

真之介は、目をギラギラさせながら、カノンの方を向いていた。

真之介という男は、他人のことになると、それはもづく熱くなる性格だった。

自分のことを話すより、みんなのことをもつともつと知りたいと、そう思う男なのだ。

そこが、とてもウザイところなのだが、友達が山ほどいる理由の一つも、それだと言えるだろう。

「んー、部活とはまた違つただけじね。私、昔からピアノやってたから。」

カノンは、少々照れながら、話していた。

カノンがピアノをやつていたなんて、僕は全然知らなかつた。いや、僕がカノンと知り合つたのは小学生の頃だ。その頃は、まだピアノなんてやっていなかつただけだよな。

僕は、そんなくだらない事を思いながら、カノンと真之介のやりとりを見ていた。

「ところで、山下殿は、内藤氏と、お知り合いだったのですか？」

真之介が、突然そんなことを言い出した。

僕は、びっくりして、飲んでいたお茶を勢いよく吹き出してしまった。

「おい、楓一俺にかけんなよ。あーあ、びちやびちやじゃねえか。」

仁のズボンは、僕の吹き出したお茶によって、ずぶ濡れになってしまった。

「「めん、仁一悪氣はあった。今も反省していない。」

「ひづめー！」

僕と仁一がそんなことをやっていると、真之介が、そのやつとつを横目に、カノンに話を振っていた。

「幼なじみとか……ですか？」

「んー……」

カノンは、ひょっと考え込む仕草をとった。

「てか、小学校んときにね。お世話になつた関係です。」

カノンが、何か言つ前に、僕は真之介にそつ言つた。

「お世話ですか？」

「まあ……、うん。色々あつてさ。」

だから嫌だつたんだ。

僕の小学生の頃の話を、なぜ今さらしなければならない。

あんな、悪夢のよつな6年間の話を、なぜ今こじでしなければならぬいんだ。

僕が虐めを受けてて、それをかばってくれたのが、山下カノンです。

なんて、なぜ、この場で言えることができる？

もし、仮にそんなことを言つたとしても、どうせ、場の空気が悪くなるに決まつているし、同情なんてされたら、まっぴらがめんだ。

僕は、真之介に、これ以上の事を言つつもりは断じてなかつた。

カノンが、もし僕の小学生の時の話を始めるものなら、僕は、絶対に止めるつもりだった。

だが、カノンは一言も僕の昔のことについて、話そつとはしなかつた。それが唯一、僕の救いであった。

「カレー、できただ〜！」

そう言いながら、僕たちのいる部屋に元気よく入ってきたのが、翔太だった。

テーブルに、カレーライスが人数分置かれていく。
とても食欲のそそる、良い匂いだった。匂いを嗅いだだけでも、唾液が止まらない。

「ん〜。良い香りだね。見た目も匂いも……ですが、翔太のお婆ちゃんだ！」

仁はそう言しながら、カレーを食べる準備にとりかかっていた。

「いいや、ばっちゃんど、俺の手作りカレーだーちゃんど、味わえよー。」

カレーが人数分置かれ、水、スプーンと、福神漬け…
食べる用意は整った。

「いただきまーす！！」

僕も、そう言うと、スプーンでご飯を崩し、カレーに馴染ませ、口
の中に運んだ。

「ちよ……」

とりあえず、熱かった。

口から出しそうになるのを我慢して、水と一緒に流し込む。

「楓、慌てすぎだぜ。」

仁は、僕の一連の動作を見ていたらしく、アハハと笑いながら、水
をコップに入れてくれた。

「僕は、猫舌なだけです〜！」

そんなことを言いながら、僕は再度、スプーンでご飯を崩し、カレーに馴染ませながら口の中へ入れた。今度は、少し冷ましてから、口の中へ慎重に入れていく。

「美味しい！！！」

僕は自然に美味しいと、瓶に出した。リアクション王になりたいわけじゃない。自然と声に出してしまつほど、本当に美味しかったのだ。

辛すぎず、それでいて、甘過ぎてもいい。

ただ辛いだけじゃない。なにかこう……旨味成分というものなのか、コクというのか。よく分からなかつたが、すごくまろやかで、それでいて、ピリッとした辛さがもつ、何とも言えなかつた。

野菜もたっぷり入っているのに、それら全てが美味しく感じられた。そして、なんといっても、豚肉の存在がこのカレーの美味さを何倍も引き出してくれている。

牛肉が入っているカレーがよく見られるが、あれは全然カレーのことを分かつてはいない。牛肉だと、食感が硬く、美味しさが半減してしまう。

だが、豚肉だと、とろけるような食感へと変貌を遂げるのだ。さらに、豚肉を細かく切つてしまつよりも、ぶつ切りにして入れた方が、断然美味しい。

それを、このカレーは分かつてらっしゃる。

完敗だった。もう、僕の完敗でした。

「このカレー、本当に美味しいね！」

カノンも、満足している様子だった。

どうだ、見たか！なんて、自分がつくったわけじゃないのに、勝ち誇った感情になりつつも、僕は誰と話すこともなく、黙々とカレーを食べ続けた。

祝福の時は、どうしていつもすぐに過ぎてしまつのだらうか。

お腹いっぱいまで食べた。もちろん、1こ飯粒一粒も残さずに。お代わりだって、軽く3杯はしだらう。

みんなの様子を見ると、お腹いっぱいだという表情の中にも、美味しいものをたらふく食べたという満足感を見て取ることができた。

「いやあ、ほんと美味しかったですぞ。また、カレーパーティやりましよう!!」

「おう、いつでも来い。また、用意してやるよー。」

翔太は、みんなの満足している顔を見ながら、とても嬉しそうな表情をしていた。

カレーを食べ終わつた後も、1時間ほど僕たちは、何気ない会話で楽しんだ。

真之介が、バイトの面接で10連敗していることとか、翔太の武勇伝とか。仁は最近、陸上に入らないかというスカウトが、あつたとかないとか。

カノンは、部活に入つて、すでに何人かの仲間ができたとか。

みんなの話を聞くうちに、僕は、なんだか一人置いていかれているみたいな感覺に襲われた。

こうやって近くで喋つているのに、みんな遠いところにいる。そんな感覺だった。

カレー・パーティも終わり、僕たちは、それぞれの家へ帰るために、翔太に別れの挨拶を言い、翔太の家を後にした。

翔太と、翔太のお婆ちゃんは、僕たちの姿が見えなくなるまで、ずっと手を振っていた。

帰宅の途中、一通のメールがきた。

僕の携帯にメールがくるというのも、そう滅多にあるものじゃないので、僕は誰からだうと、ズボンの奥底にあつた携帯を取り出し、内容を確認した。

送信者は……内藤美子。メルマガではないらしい。母からのメールだった。

-楓の、明日の朝のパンと飲み物、買つの忘れちゃったから、帰るついでに買ってきてちょうだい。お金は、後払いで -

んなアホな！

「俺も付き合つてやるつか？」

「仁は、やつ言つてくれたが、僕は丁重にお断りをした。私的事情なのに、仁に付き合わせちや、いぐらなんでも悪いと思つたからだ。」

「そつか。んじやあ、俺たひま、先帰るわ」

「ああ。気遣つてくれて、ありがとな。」

「内藤氏。話の続き・あとで、たつぱり聞かせていただきますからね～！」

「真之介がバイトの面接に受かつたら考え方とく。」

僕は仁と真之介に、別れの挨拶をした。

「今度は、かあくんからの誘い、待つてるからね！」

カノンが、元気な声でそう僕に言つてきた。

心を見透かされているようで、僕は少々恥ずかしい気持ちになつた。

「りょーかい。考えとくわ」

僕は軽く笑いながら、そうカノンに言つた。

カノンもそれを聞き、アハハと笑いながら、またね。と、手を振つた。

僕は、手を軽くあげ、その場を後にした。

僕はコンビニで、自分の朝食を買つて、家に帰り、ベッドに横になつた。

カレー・パー・ティ。略してカレパ。

友達数人で、カレーを食べ、なんて事ない会話をしただけ。これがカレー・パー・ティとして成り立つているのかどうかは、分からぬ。だが、これだけは言える。

今日は、いつも以上に疲れたが、いつも以上に楽しかつた。つてこと。

カノンの、突然の参加が決まり、どうなるかと思ったが、今にしてみれば、それはそれで良かつたと、多少なりとも思うことができる。

ちょっとしか喋られなかつたけど、久しぶりにカノンと喋ることができるたし。

それに、みんなのことも、今までより、少しだけ分かつた気がする。

「カレバか……また、やりてえかも」

僕は、天井を見ながら、今日あつたことを思い出していた。そして、知らないうちに、深い眠りへと入つていった。

もつすべ、高校一年が終わるとしている。

カレバがあつた日以来、僕たちは、今までと変わらない、普段の生活をおくっていた。

カノンが、この学校に来てから、すでに3ヶ月が経とうとしていた。それなのに、僕とカノンは、あの日以来、言葉を交わすことはなかった。

時間というものは冷徹なもので、知らぬ間に刻々と流れしていく。

「時間よ止まれ」と念じても、決して時間は止まつてはくれない。

今も、一秒一秒と時間は過ぎているのだ。

僕は、ふと、こう思うことがある。

僕の人生は、未来はどうなっていくのだろうかと。期待や希望に満

ちた感情ではなく、不安で恐くて……

今にも逃げ出してしまう這麼なるべひー、本当に、どうなつてしまひのかと。

そんな不安を抱きつつも、僕たちの高校生活一年目が終わりを迎えた。

高校一年生になつても、僕たちの生活は相変わらずな日々だつた。

僕たちの高校は、クラス替えというイベントがない。例えば、1-Aの生徒は皆、2-Aとなり、3-Aとなる。

“他クラスとの交流を大事にする”というより、“同じクラスの生徒と、三年間を通して親睦を深める”というのが、この高校のモットーであるのだ。

「もっと、たくさん友達を作りたいのに、この制度じゃあんまりだ」という声もあるが、僕は逆に、この制度で良かったと思っている。一年経つたびに、新しく友達関係を築けるほどの余力はないからだ。

僕の生活は、一年生の頃と比べても、変わったところはなかつたが、周りを見渡すと、皆、少しずつではあるが、変わり始めていた。

仁は、テニス部を辞め、短距離ランナーとして本格的に陸上部へうつった。僕と同じ部活じゃないことに、今でも悔いでいるみたいだが。

僕も、仁がテニス部を辞めると聞いたときは、とてもショックだつたが、精一杯応援すると仁に言つたし、僕もテニス部で一生懸命練習して、必ずやあの練習試合のリベンジを果たすことを誓つた。

翔太は、プロの料理人になりたいと思ったのか、最近、料理の本を学校に持ってきて、休み時間などを利用して、読むことが多くなった。

あのカレパ以来、お婆ちゃんに料理を教わり、今では、ほとんどの家庭料理がつくれるとか、つくれないとか。

今度、翔太の家に遊びにいったとき、早速何かつくつてもらおう。

真之介は……依然、バイトの面接の連敗記録更新中であった。バイトの面接で、なぜそんなに落とされてしまうのか、オタクグループで話をしていたのを聞いたことがあった。
他人のことになると、熱くなる性格の真之介。実は、バイトの面接中もその性格上、面接者が質問しているのにも関わらず、逆に質問をしてしまうというのだ。

気づいてみると

「相手のことを知るっていうのは良いことだけど、まず、相手が質問をしてくることに気づく」

と、毎回言われて、その都度、バイトの面接に落ちるのだとこう。そりや、落とされるわけだ。それでも真之介は

「ゼーつたい、受かつてみせますぞー！」

なーんて調子で、諦めては全然いないようだった。

むしろ、落ちれば落ちるほど、やる気が出てきている様子だった。あの雑草のような“じぶとせ”には、誰も勝てやしないだろう。

そして、山下カノン。

カノンは、すでにクラスの中にとけ込んでいた。空手部の吉沢愛莉と、同じ音楽部に所属している山本桜やまもとさくらと、グループを作っていた。もちろん、友達はそれ以外にもたくさんできていた。

転校生って、最初の頃は、珍しいといつのもあり、いつもよりも人が多く寄ってくるものだ。

だが、時間が経つにつれて、その“珍しい”といつものに慣れ、落ち着きを取り戻す。

だが、カノンの場合は、全くそんなことはなかつた。いや、むしろ、最初の頃よりも、カノンの周りには人が多く集まるようになつた。

授業の時でも、休み時間や昼飯の時でも。放課後の時だつて、カノンの周囲にはたくさんの友達が集まつていた。

さすがは、カノンとしか言えなかつた。

カノンは、ガキの頃から、小学生とは思えない行動力があつて、社交的で。誰とでもすぐに仲良くなることができた。それも、当たり前かのように簡単にやってみせるのだ。

カノンの表情はいつも純粋で、元氣で、温かいもの。

仁と似ているところが、カノンはある。

それは、“他人を偏見しない”ということだ。
虐められつ子だろうが、不良っぽい人だろうが、カノンにとつて外

見とは、どうでも良いことなのかもしれない。

だから、僕もあの時、カノンに出会えて、本当に良かつたと思える
ことができたのだろう。

カレパの時、カノンと一言話しただけ。

それ以来、僕とカノンが話すことはなかつた。僕から話しかけるこ
ともなく、カノンからも話しかけてくることは、一度もなかつた。
もちろん、カノンが話しかけてくれるのを待つていたわけではない。
僕から、何度も喋りかけようとした時はある。

だが、カノンは、いつもたくさんの友達に囲まれていた。そんなカ
ノンに、喋りかけられる隙は見あたらなかつた。

そうしているうちに、僕たちは高校二年生となつていたのだ。

月曜日の朝。

目が覚め、時計を確認すると、時間は7時を過ぎていた。

学校からはそんなに遠くないので、7時30分ぐらいに家を出れば間に合つ。

いつもなら6時には起きてこないとこりのに、今日は、7時過ぎまで眠つていたようだ。

僕は少々夢の余韻に浸り、その後、学校に行く準備を始めた。

まずは、カーテンを開けた。

天気は、雨雲が空を一面覆つていた。7時過ぎまで眠つてしまつた理由がその時分かつた。

いつもなら、日の光で目覚めるのだが、今日は太陽が出ておりず、体がまだ起きる時間じゃないと判断したのだろう。

次に着替えをし、洗面所へと向かつた。
顔を洗い、鏡で自分の髪の毛を見た。寝癖はあつたが、許容範囲内だな。

そして、朝食を食べに、階段を下り、台所へ向かつた。

僕の朝食はいつも、コンビニのパンと、苺牛乳だつた。
この朝食でないと、どうも一日を元気に過ごすことができない。
今日のパンは、メロンパンであつた。昨日食べたばかりの、メロンパン。

ちょっと気持ちばブルーであつたが、苺牛乳さえあれば大丈夫。

時刻はすでに7時40分だつた。ちょっと、夢の余韻に浸りすぎたのが原因だらう。

雨雲が少々不安だったが、このぐらいなら大丈夫だろうと、折りたたみ傘は持たず、鞄だけを持ち、僕は急いで学校へと向かったのだった。

今日も、何事もなく一日は過ぎた。

放課後。いつもなら、この時間帯、部活でテニスウェアに着替え、部室へと行くのだが、今日は雨で自主練習になつた。

基本的にテニス部は、雨が降っていたり、風が強い時は、自主練習に切り替わる。

自主練習とはいっても、筋トレや走り込みをするわけではなく、事実上の帰宅ということになる。

僕は鞄に教科書を入れ、帰る準備に取りかかった。

高校一年生の時だつたら、仁と一緒に帰っていたが、仁はもう陸上部につづり、一緒に帰ることはできなくなつた。

陸上部も同じ外のスポーツではあるが、天気が悪くなると、学校に建てられている筋トレルームみたいなところで、下半身強化を行つらしへ。

仁は、スポーツに対して本当に眞面目で、晴れている日も、雨の日も、体調があまり優れないときも、決して部活を休んだりはしなかつた。

一人で帰るのは、ちょっと寂しいな……と感じながら、帰る準備を終わらせ、下駄箱へと向かつた。

靴を履き、外に出た。

外は思った以上に強い雨だつた。

「やつちまつた……」

迂闊だつた。

折りたたみ傘を持つてこなかつたことに気づいたのは、この時だつた。

この日の朝。空は確かに雨雲が覆つていた。
だが、このぐらいだつたら大丈夫だと、僕は折りたたみ傘を持たず
に、学校に来てしまつたのだ。

学校から、家までの距離は、徒步20分のところ。それでも、この
雨の強さじや、風邪を引いてしまう。

どうしたものかと、考え、思い浮かんだのが、図書室で雨宿り作戦
だつた。

図書室に行くのは、決まって夏と冬だ。

僕らの学校は、教室に冷暖房はない。

だが、唯一、図書室だけには冷暖房が完備されており、夏では涼しく、冬では暖かい。そんな快適な場所を図書室は提供してくれる。僕と翔太と仁は、冬と夏だけ、決まって図書室に行くのだった。だから、この5月。図書室に行くなんて、考えもしなかった。

だが、仕方ない。雨が少し弱くなるのを見計らって、帰るとするか。

僕は、そういう決断に至ったのだった。

図書室は別校舎に設けられているが、歩いて1分ぐらいで到着する場所にあつた。

僕は、鞄を傘の代わりにしながら、図書室へ向かつた。

図書室に着いた。僕の服は、思った以上に濡れていた。

僕は、鞄に着いた雨水をハンカチで拭き、図書室の中へ入る。

図書室は、さすが別校舎として建てられているだけあって、とても広い。

一階だけじゃなく、二階、三階まであるのだ。

一階は、主に勉強に使われる参考書や、数ある小説が連なっている。

二階は、資料など、多くの古本などが置かれている。

三階は、PCルームとなっていて、誰でも好きな時間にネットを見たり、調べものをしたりすることができるようになっている。

僕は、一階で待機することにした。

とつあえず、雨が少しでも落ち着いてくれればそれで良かつたからだ。

今日は、雨のせいもあって、人の出入りがいつもよりも多く、図書室の雰囲気は、どちらかというと賑やかな感じだった。

図書室に入つて何もないものもあれなので、僕は小説を適当に選び、席に着こうと、空いている席はないか辺りを見回した。すると、偶然にも、山下カノンの姿があつた。

カノンは一人、真剣になつて、ノートに何かを書いていた。

僕は、まさかカノンが、図書室にいるとは思わなかつたので、不意をつかれた形となつた。

僕の視線のせいなのか、カノンはすぐに、僕の存在に気づいた。

「あれ、かあくん？」

「お、おひ。」

カノンの向かい側の席に座つた。なんか、ぎこちない。

「なになに？ かあくんは、人生について興味があるの？」

「んなわけねえだろ。」

カノンがそんなことを急に言うもんだから、僕は瞬時に、的確なツツコミを入れ、自分が持ってきた小説を開けようと表紙を見た。

-人生について本気出して考える本 -

……いや、何かの間違いだろ。

僕は、もう一度、自分が持ってきた本の表紙を見た。

-人生について本気出して考える本 -

なんだ、このタイトルは。

まるで僕が、人生について本気を出して、考えようとしているみたいじゃないか。

「これはあれだ。その……宿題で出されたの。」

「そんな宿題出されたっけ?」

カノンは笑いながら、僕にそう言った。

そうだった。カノンは、僕と同じクラス。そんな理由が、通じるわけがなかつた。いや、それどころか、そんな理由をしてしまつた自分が、とても情けなく感じた。

「カノンは、なぜ図書室に？」

「え？」

カノンが一人、真剣に書いていたものは何だつたのか、視線をカノンのノートの方に向ける。
そこには、よく見ても分からぬ複雑な数式が書いてあつた。
カノンは、照れ笑いをしながら、ノートを閉じた。

「『めん。勉強の邪魔しちやつたみたいで。』

「ぜーんつせん。そんなことないよー。」

カノンは笑つてそう言つていたが、本当に申し訳ないことをしたと思つた。

音楽部に入り、ピアノの練習などで、勉強の時間がなかなか取れな

い。と、友達と話していたことを僕は偶然聞いてしまったことがある。

勉強の時間がなかなか取れない分、カノンは、勉強の時間をつくつては、コソコソと勉強をし、頑張っていたのだった。
一方、僕はただ雨宿りをしにきただけ。それなのに、カノンの貴重な勉強の時間を邪魔してしまったのだ。

カノンは、シャーペンを置くと、ぐっと背伸びをした。

「カレーパーティ楽しかったね！」

カノンは、急にそんなことを言った。
僕は、カノンのその一言で、気持ちが凄く安らいだ。

「あはは。そうだね。」

「かあくんったら、冷まらないでカレー食べるから、むせてるんだもん。」

カノンも、あのハプニングを見ていたのか。

「あ、あれは、ちょっと油断しただけだつて。」

「かなりの油断と見た！」

クスクスと、僕とカノンは笑いながら、カレパの話で盛り上がった。

雨といふこともあり、図書室全体が賑やかな雰囲気だったのに、話していくも、別にうるさいと思われることはなかつた。

カレパの話が終わると、僕たちは、何を話せば良いのか、お互いが分からぬ状況となつていた。

それもそうだ。カレパ以来、僕とカノンの間に、会話という会話はなかつたのだから。

そんな雰囲気がとても嫌で、僕は、自分の持ってきた本を見る素振りをした。

もちろん、中身を見るなんてことはしなかつた。ただ、ただ、沈黙しているこの空間から脱したかったのだ。

この沈黙を破ったのはカノンだった。

「久しぶりだよね。こうやって、一人だけで話すのって」

「そうだね。何年ぶりだろ？」「

「小学4年生の時だつたから……うーんと……6年ぶりだー。」

「わざそんなに経つてるとか」

「早いよね～。」

本当に早いよ……。カノンと別れてから、すでに6年経ったのだ。
カノンと一緒に過ごした小学校の思い出が、忘れず残っているところ

「私、夢を見たの」

「夢？」

「そう。最近見た夢なんだけどね～」

カノンは、まるで子供のよつて無邪氣な笑顔をしながら、話を続けた。

「私ね。席替えで、かあくんの隣の席になつたの。」

「へえ～」

僕は、カノンが無邪気に喋るその様子を見ているだけで、とても癒された。

純粹で、温かい。とても心が落ち着く。今も昔も変わらないカノンが、そこにはいた。

「そしたら、かあくん。また呆気ない態度するんだもん。」

「それはまた、困ったかあくんです」と

二人で笑つた。

何がおもしろかつたのかは分からない。でも、二人で笑い合つた。その光景は懐かしく、とても楽しい、ひとときであった。

雨が大分弱まってきた。

カノンは、鞄にノートと参考書、筆箱を入れ、帰る準備にとりかかっていた。

「ねえ、かあくん。」

「ん？」

カノンは、帰る準備が終わると、席から立ちあがり、図書室の窓から外を見た。

「あの日も……」こんな天気の月曜日だったね…」

「あの日?」

僕が、カノンにそう訊ねると、カノンは僕の方を向いて、うんうんと、頷いた。

「かあくんは、あの頃に戻れるとしたら……戻りたい?」

「え?」

カノンの質問に、どう返事をすれば良いのか分からなかつた。僕が黙つていると、カノンは再び話し始めた。

「あの頃に……。できるなら、あの頃に私は戻りたいな。」

僕は、なぜだか分からぬが、ドキッと心をつかれたような感覚になつた。

「あの頃に戻つて……」

わずかな沈黙。

カノンは、一瞬表情を変えた。

「……………じゃあ、私、そろそろ帰るね」

カノンは言葉に詰まつた一瞬だけ、表情を変えたような気がした。でも、すぐにいつもの笑顔に戻ると、僕に手を振り、図書室から姿を消したのだった。

カノンが言つていたこと……。カノンが僕に伝えたかつたこと。考えれば考えるほど分からなくなつた。

ただ、僕の心拍数は間違いなく早くなつていた。

だが、この気持ちもまた、考えれば考えるほど分からぬものだつた。

カノンがいなくなつた図書室で、僕は、窓から見える外に目を向け

た。

雨は、まだ止むことはなかつた。

P・7 それぞれの夏休み

気づくとすでに7月も中旬。

本格的な夏の暑さが、僕たちを襲い始めていた。

だが、あと数日で、待ちに待つた夏休みが訪れる。それまでの辛抱だ。

夏休みは、7月中旬から8月いっぱいまで。およそ1ヶ月半の長期休暇である。

夏休みが終わると、高校一年生である僕たちは、修学旅行といつイベントに突入する。

「つてことで、くじ引きで班決めはすることになりました」

いっしーは、そう言いつと、くじ引きの準備をし始めた。

今日は、修学旅行の班決めを行う日。もちろん、班を決めるにあたつて、色々な案が出されたが、結局、いっしーの独断で決まる形となつた。さすが、いっしー……

「くじ引きかよ……」

僕は、一人、愚痴つていた。

そもそも、くじ引きって、ちゃんとした決め方じゃない気がする。友達で班を組むようにすれば、みんな納得するに決まっている。

友達がいないやつのことを考えて……とは言つが、むしろ、虜められた経験がある僕から言わせてもらえば、大きなお世話だ。

くじ引きをしたところで、結局、虜められっ子が班に入つたとき、「えええ」というリアクションをする奴は、必ずいるのだから。だったら、友達だけで組んでもらつた方が、どれほど助かることか。

「内藤氏。一緒に班が良いですね！私は、そう願つておりますぞ！」

僕の隣の席の真之介が、いつものテンションで話しかけてきた。

高校一年になつてすぐ、席替えがあつた。

僕は、一番ど真ん中の席になつた。ある意味ハズレと言つべきだろうか……。

毎回僕の隣の席は仁だったのだが、運もそろそろとは続かず、仁は真ん中の後ろの席になつた。その代わりに、真之介が僕の隣の席になつたのだった。

「うん、だが断る」

僕は、裏表のない満面の笑みで真之介に答えた。

「ひ、ひどいじゃなくて、内藤氏！」

「てか、内藤氏……じゃなくて、“かえで”で良いって」

真之介っていうのは、どうしていつも、「～殿」とか「～氏」と付けたがるのだろうか。それが、一つのアドバンテージとでもいうのか。

僕はため息を一つし、班が決まるのをじつと待っていた。

班はだいたい1班につき4人から5人程度で決まる。

男女関係なく、くじ引きで決定するので、男だけのグループにもなれば、女だけのグループにもなる。

また、男が一人で他全員女ってケースももちろん考えられる。それこそ僕にとっては死のグループと呼べるだろう。僕は、それだけにはならないように願っていた。

班分けがされ始めた。いつちーが、チヨークを持ち、黒板に書き始める。

教室は、歓喜の声や、ため息をつく者など、様々な感情が入り混ざつていた。

僕は、食い入るように、黒板を見た。

- 第3班 内藤楓、内山信輝、吉沢愛莉、根本遙 -

「マジかよ……」

なんて、微妙なメンバーだ。というのも、喋ったことのある奴が、誰一人としていなかつた。

「あうあう……内藤氏とは、離れてしましましたか……ションボリです。」

真之介が残念そうに、そんなことを言った。

「つか、真之介は誰となつたんだ？」

僕がそう言ひつと、とんつと、肩を後ろから叩かれた。

「俺たちー！」

僕は後ろを振り向くと、仁と翔太の姿がそこにはあった。

「え……、俺たちって？」

僕がそう聞き返すと、仁と翔太は目を合わせクスッと笑った。

「いつものメンバ」

「ちょ……マジかよ……」

僕はその事実を否定しようと、黒板を再び見た。

これは、まさかの展開だった。

翔太も仁も、それにカノンだつて、同じ班なのか……この現実から僕は逃げたくなった。

「私もショックです。内藤氏と一緒に班ではないなんて。」

僕と一緒にショックを隠しきれないのでいたのは、真之介だった。

「なんだ、真之介。僕に対する嫌みか？」

「そんなことは決してありませぬ！私は内藤氏と……」

僕は、真之介の言葉をそれ以上聞くつもりはなかつた。
本当にショックで、真之介の会話についていく余力はなかつたからだ。

別に、僕の班のメンバーに不満があるわけではなかつた。
ただ、誰とも喋つたことがないメンバーだけに、今後の展開が全然読めない。

それに対し、1班は、楽しい修学旅行が保証されているも同然だつた。

「そんな卑屈になんなつて。班つつても、抜けてそつち遊びに行くから」

「感謝しろよな～」

仁と翔太は、慰めながら、そう言つてくれた。
その言葉が、僕の唯一の救いだった。ありがとう……やつぱり、持
つべきものは友なんだね……

…

「私も、もちろん遊びに行きますぞー。」

「うん、だが断る」

夏休みの事前指導も無事に終わり、僕たちは夏休みに入った。

夏休みに入つても、僕は学校に登校していた。といつのも、部活の練習があるからだ。

夏は、部活の練習にもつてこいだ。なぜなら、風や雨など、天候に左右されることが限りなく少ないからだ。

夏休みの部活は自由参加だったので、出なくても良いことになつて

いる。だが、部活に行かないと、特にやることもない。

それならば、テニスの練習をしに学校に行つた方が、暇潰し程度にはなるだろう。

僕は、そう考えたのだった。

もちろん、仁や翔太も、あと数ヶ月後に行われる大会のために、部活練習に励んでいた。

部活が終わる時間が一緒の時は、仁たちと一緒にゲーセンに行ったり、ファミレスで食事をし、部活での愚痴話をすることもあった。そんな毎日が僕は楽しかったし、とても充実しているなど感じることができた。

だが、夏休みに入つてからといつもの、カノンの姿を見ることはなかつた。

カノンは今何をしているのだろうか。僕は、その想いが日に日に増していく。

「じゃあ、今日も練習試合やるぞ~」

テニス部顧問の小林先生だ。

夏休みに入つてから、練習試合を多くするよになつた気がする。

やはり、大会がだんだん迫ってきたからだろう。

僕は、同じクラスの田端洋平たばたひやへいと、ダブルスを組んだ。

田端洋平。最近、テニス部に入部したばかりの奴なのだが、結構、動ける。

仁と比べると、少々劣るが、それでも素晴らしい運動神経の持ち主だった。

性格も、なかなかの奴で、ちょっと真面目なところが多い気がするが、それでも、頼りになる奴ではあった。

仁が、テニス部をやめてからは、僕は、この田端とダブルスを組むよつになつた。

僕と田端は、準備体操を入念に行いながら、他の生徒のダブルスの試合を見ていた。

いつものように、七原・小早川ペアは余裕の勝利を飾つていた。

そろそろ、僕らの出番か

僕たちは準備体操をキリの良いところで終わりにすると、テニスコートへと向かつた。

相手は、2・Bの安田・上島チーム。

七原・小早川チームより強くはないが、なかなかの強さだ。油断はできない。

僕は、コートに入ると、相手チームを見つめ、集中力を高めた。

僕は、目を開けた。

「うわっ！」

「うわっ！」

僕の目の前にいたのは、巨大な大男……ではなく、小林先生だった。

「内藤）。人がせっかく、保健室まで連れてきていたのに、田を開けた途端“うわー”は、ねえだろ？」

小林先生は、少々立腹のようだった。

「すみません。つい、成り行きで……」

「どんな成り行きだ。」

僕は気づいて、保健室のベッドで寝ていた。

といつあえず、ベッドから起きあがると上体を起こしてみると。

「いひつ……」

頭部に激痛が走った。

「おーおー、無理するなー。派手に転んだんだから、もうひょい寝とけー！」

小林先生は笑いながら言った。

まるで、僕の怪我をあざ笑うかのよう』。

転んだ……？

僕は、記憶が一部欠如しているようだった。
先生の話によると、ボールに追いつこうと必死に走ったところ、コート上に転がつていたボールに足をとられ、転倒したのだという。そのまま、背中から倒れた僕は、頭を強打し、意識を失い、現在の状態……というわけだった。

「内藤、足は大丈夫か？」

「え？」

僕は、足を動かしてみる。少々痛かったが、捻挫とかにはなっていないようだった。

「おかげさまで、無事でした」

僕がそういうと、小林先生は安心した表情を見せた。

「これからは気を付けるんだぞ。足を怪我したら、テニスなんてできやしないんだからな？」

「はい、気を付けまーす

僕がそう言つと、小林先生は、満足そうによじよじと頷いた。

「じゃあ、明日も練習頑張るんだぞー。」

小林先生は、そう言い残し、保健室を後にした。

僕は、氷で頭を冷やしながら、頭痛が治るまで、もう少し寝ていることにした。

夏の猛暑と、蝉の鳴き声で、僕は日を覚ました。

保健室のベッドから外を見ると、空は夕陽でオレンジ色に染まっていた。

僕は、体を起こす。頭痛はしなかった。

保健室にある時計を見ると、時刻はすでに5時をまわっていた。

「こつけね。寝過ぎた

少しだけ休んでいいと寝たつもりが、2時間べらざしてしまったみたいだ。

こんなところで、グダグダしていられないと想い、僕は保健室を出た。

「？」

保健室を出ると、かすかに楽器の音が聞こえた。

「！」の音は……ピアノ？

カノンかもしれない。

僕は、ふとそう思った。

そう思つたら、いてもたつてもいられなくなり、音のする方へと向かつた。

そして、辿り着いた先は……

“音楽室”

この学校にも音楽室があつたんだと、この時初めて知つた。

といつのも、授業では音楽といつ科目は選択授業なのである。
僕は、選択科目のうちの“書道”をとつていたので、音楽室に入つたことが今まで一度もなかつた。

それに、音楽室は、この校舎の3階にあつたのだ。

一年生は1階に。二年生は2階に。三年生は3階と、教室が配置されているので、無論、音楽室を見ることも今までなかつた。

少し古そうな作りのドアだ。僕はそのドアを開け、中を覗いた。そこにいたのは、ピアノを弾いているカノンの姿だった。

僕は、音楽に関して、ほとんど無知である。

だが、カノンが弾くピアノの音色は、とても良い響きで、力強いものであると感じることができた。

カノンは夏休み、この音楽室で、ずっと練習をしていたのだろうか。

カノンがピアノを弾く姿は、とても綺麗だった。
僕は、その光景をじっと見つめていた。

「君は誰だい？」

ふと、男性の声がしたので、僕は驚いた。

音楽室から、一人の男子生徒が、現れた。

カノンのことしか頭になかったからなのか、男子生徒がいることに、初めて気づいた。

カノンも、その男子生徒の声で、僕の存在に気づき、ピアノを弾くのをやめた。

「かあくん！？」

カノンは、かなり驚いた様子だった。

「ちっす」

僕は、軽く手をあげた。

「君が、楓くんか。山下さんから話は聞いてるよ

その男子生徒は、にこりと微笑んだ。

「こちらの方は……堺俊一先輩。私の練習に付き合ってくれてるの」

カノンがその男子生徒の紹介をした。

さかい しゅんいち
堺俊一。男である僕からみても、とても魅力的な人のように感じた。ただ、格好良いだけじゃない。とても優しそうで、大人びている。堺先輩を見ているだけで、自分がめちゃくちゃガキであるような感覚に陥った。

「はじめまして。楓くん。3-Dの、さかい しゅんいち 堀俊一です。よろしくね」

「あ、どうせ……」

僕と、堺先輩のやりとりを見ていたカノンは、恥ずかしそうな表情を見せた。

「堺先輩、『じめんなさい。かあくん、人見知り激しいから』

「とても良い子そうじやないか」

堺先輩はそう言つと、また笑顔をみせるのだった。
なんか、自分が負けているよつで悔しかつた。

「それにしても、意外だな。音楽室で楓くんに会えるなんて。思つてもみなかつたよ」

「いつも、ここに練習しているんですか？」

僕が、堺先輩に尋ねた。

「そうだね。山下さんは、夏休み、毎日ここに来て、練習をしてい
るみたいだよ」

「しているみたい？」

「ああ、俺は受験で忙しいから、毎日は来られないんだけどね。」

堺先輩がそう言つと、カノンは少々照れ笑いをした。

「私が、無理を言つてお願いしたの」

「全然無理なんかじゃない。逆に、楽しいよ」

「そんなんそんなん。」

カノンは、あの温かく純粹な笑顔を堺先輩に見せていた。

「いやいや、本当や。ヨドさんは、のみこみが凄く早いしね。」

「そんなに誉めたつて、何も出ませんよ?」

そこに、僕の居場所はなかつた。

カノンと堺先輩だけの時間。一人だけの居場所が存在しているかの
ようだつた。

僕は、なぜだか分からぬけど、とても変な気持ちになつた。
悔しかつたのか、悲しかつたのか……何とも言えない、複雑な気持
ちだ。

僕はこの日から、夏休み中、音楽室に行くことは一度もなかった。

夏休みなんて、気づいてみればあつといつ間に終わってしまうものである。

今年もなんだかんだで、夏休みは残すところあと3日。

自分の今年の夏休みを振り返ると、充実していたのかな……一応。部活の練習もほとんど休まず出たし、そのおかげからか、次の大会では、レギュラーとして選抜された。

今まで、大会に出ても、見ているだけだったので、今回、やっと出番が回ってきた。という、感じだ。

話によると、翔太や仁たちも次の大会ではレギュラーとして参加するみたいだ。

翔太や仁に負けないよう、もっともっと練習をしないといけないな。

夏休みの後半は部活一色だった。もちろん、翔太や仁たちとゲームに行ったり、ファミレスで飯を食べたりはした。

でも、それは夏休みじゃなくても、していたことで。夏休み、特別に何かしたかと聞かれると、何もしていないと言つた方が適切であった。

案外、夏休みとか、冬休みとか、長期休暇に入る前は、あれしたいな。これしたいな。と、思うけど、いざ長期休暇が始まると、何もしないまま長期休暇が終わってしまうたりする。もちろん、計画性

がある人は、別だが……。

無論、僕は計画性なんて、全くと言つていいほどない。だから、長期休暇が終わると、「あれしておけばよかつた」と、後悔することがよくあるのだ。

「これ借りたいんですけど」

僕は、ある一冊の本を片手に、図書室の受付のおばちゃんにさしつけた。

おばちゃんは、その本を見ると少々困った表情を見せた。

「これね～。貸し出しちゃないのよ。」

「え……してないんですか？」

おばちゃんは、言葉を選ばかのように少々考える様子を見せ、再び話し始めた。

「この本、何回も紛失しちゃってね。当分の間、貸し出しそなうとしたのよ

「何回も紛失って……」

「『めんなさいね』。図書室で読むなら構わないんだけどね。」

おばちゃんは、愛嬌のある笑顔をした。

僕はアハハ…と、愛嬌のない笑顔をし、その場から離れた。

それにもしても、この本って、どんなだけ人気の本なんだよ……
僕は、その本を見つめた。

-人生について本氣出して考える本 -

ここで勘違いをしてもらつては困る。
僕は、人生について本氣を出して考えようとは思っていない。
じゃあ、なんのためにこの本を借りようと思ったのか。
理由は単純明快であった。暇つぶしだ。ただ、それだけのことだつた。

部活の練習が、今日は休みだつた。

顧問の小林先生が夏風邪を引いたのだという。

夏休み最後の最後に、してくれる男だ。

僕は、今日も部活があるのだとばかり思つて、普通に学校に来たのだが、同じクラスであり、チームメイトでもある田端から今日の練習はなくなつた、ということを聞かされた。

今さら家に帰つて何かすることもなかつたし、せつかく学校に來たので、とりあえず、本でも借りて読むか……ということになつたのだった。

「何がそんなに人気なのか、見てやるひじyan」

僕はその本を読もうと、席の空いている場所はないか辺りを見回した。

今日は、人の出入りが少なく、どこの席でも大丈夫そうだ。
さすがに、夏休み残り3日。こんなところで、時間を潰したいと思う奴はそうそういないだろう。

席に座り、早速、人気大爆発中（だと予想）のこの本を読んでみることにした。

難しい漢字が多いな。

僕は、この時だけ、国語の授業をもう少し真面目に受けておくべきだったと後悔をした。

読み始めてから1時間が経つた。

“人生に悩んでいる人達に送る、超秘術がここに！”
…ほうほう。どんな超秘術があるのか、この僕に見せてくれ。

僕は気づくと、眞面目にその本を読み進めていた。

「よお～。文学生！」

急に力強い声がした。

僕は、真剣になつて本を読んでいたので、少々驚き、声のする方を向いた。

そこに立っていたのは、ショートカットで活潑そうな女子生徒だった。

「あ、吉沢さん」

「隣、席空ってる？」

「どうぞどうぞ」

吉沢さんは、僕の隣の席に座ると、自分の鞄から、一冊の本を取り出した。

吉沢愛莉。

外見も性格も男勝りで、女性であると感じさせない。サバサバとした性格ではあるが、絆とか友情とか、そういうものを凄く大切にしている。

だから、彼女の周りには、いつも多くの人が集まる。吉沢さんは、1年すでに空手部の部長に。そして2年生になると、生徒会長に任命されるほど、みんなに信頼されていた。

「あれ？ 部活はどうしたの？」

「それがね。今日は休みなんだ～」

吉沢さんは、嬉しそうに言った。

「なるほどね～。僕も、今日は休みでね。いつして、文学生となつているのですよ。」

「アハハ。全然似合わねえー」

「うせ

吉沢さんと、一人きりで話すのなんて、今日が初めてだろ？
だが、初めてとは思えないぐらい、違和感もなく、自然に会話がで
きていた。

夏の暑さと蝉のうるささの話を何分かすると、吉沢さんは、自分が
持ってきた小説を読み始めた。

ブックカバーを付けており、何を読んでいるか確認することはでき
なかつたが、邪魔をしてはいけない。

そう思った僕は、最高傑作のこの本を読むことにした。

本を読み始めてどれだけの時間が経つたのだろうか。
時計を確認すると、12時を過ぎる頃だった。

この図書室に来て、3時間も経っていることに、僕は驚きを隠せな
かつた。

本を読むと時間を忘れる。とは、よく耳にするが、確かに忘れてし
まうな。

「夏休み、早かつたよね～」

吉沢さんが、本を閉じ、僕に話しかけてきた。
少々驚いたが、さすが僕。そんなことに、動じるはずがない。

「確かに、凄く早かつたね」

「楓くんは、夏休み、何か予定とかあったの？」

「んー、特になかつたな。あつたとしても、部活の練習がほとんど
だつたよ」

「私も私も！ほーんと、なんで夏休みにも部活があるんだー？」「
感じだよね。」

「アハハ。だよね。」

「やることないから部活行つてました……なーんじことせ、言えなか
つた。」

「あと3日で夏休みも終わり……。そしたら、すぐ、修学旅行だね。

吉沢さんは、楽しそうな表情を浮かべた。

「やつにえば、吉沢さんて、修学旅行の班。3班だったよね？」

「そうそう。」

「そつか。じゃあ、修学旅行のときは、僕のボディガードお願ひし

ますね「

「逆だら、普通。女の子を守るのが、君たち、男の子の役目でしょうが！」

吉沢さんは、あり得ないという仕草をした。

「あれ？ 吉沢さんって、女の子だつたっけか？」

「むつか～！ れつきとした女ですよー！」

楽しかった。

今日、初めて話したとは思えないぐらい、本当に楽しい。

「修学旅行の班のメンバー……喋つたことのない人たちだから、なんだか楽しみだな……」

意外だった。吉沢さんにも、喋つたことのない人たちがいるのか。

「不安とかないのかい？」

「もちろんー早く、班の人たちと喋つてみたいなー。」

僕の質問に、吉沢さんは、笑顔でそう答えた。

僕とは正反対の考え方をもつていた。

僕は、班のメンバーが決まったとき、微妙だと思った。いや、それどころか、嫌だな……と、思つたぐらいだ。だが、吉沢さんは、違かつた。

喋つたことのない人の集まりだからこそ、楽しみなのだといつ。そんな、吉沢さんを目の前にして、僕は自分の心の狭さに自己嫌悪に陥るぐらい恥ずかしい気持ちになつた。

「はっや。いつの間に、1時なんかに……」

吉沢さんがそう言ったので、僕は読んでいた本を閉じ、時間を確認した。

1時30分か……

「じゃあ、私はそろそろ帰るとするよ

吉沢さんは、小説を鞄の中に入りました。

「そっか。もうちょっと濡れれば良一の」「

「寂しいのかい？文学生へ」

「寂しいよ～」

僕がキレのあるボケをしてみせる。

「キモヅー。」

「言わせておいてなんだよ。」

「いめごめな。」

吉沢さんはアハハっと笑い、鞄を肩にかけ、座っていた席から立った。

「うん。なんか、良かつたよ。」

「ん？」

「いやー、楓ぐこと今日会つて、話せたり。凄く良かったー。」

吉沢さんは、ニコッと笑顔をしてみせた。

「へいへいへい、良かつたよ。凄く楽しかったし。」

「修学旅行、お互に楽しもうね。風邪なんて引いて、休むんじゃねえぞ！」

「おう、やつちもなー。」

吉沢さんは、軽く手を振り、図書室から去った。

残された図書室で、僕は再び本を読み始めた。
キリの良いところまで読み終えると、本を書棚に戻し、図書室を後にした。

とうとう、明日が修学旅行の日だ。

新しくできた遊園地に行くらしい。名前は確か“ファンタジーランド”といったか……なんともメルヘンチックなんでしょうの1泊2日の旅。

電車に乗り継いで行ける所らしいのだが、僕は電車を使ったことがあまりないので、どうなることやら……

僕は自分の部屋で、修学旅行の準備をしていた。
タオルと、着替えと、パンフレットと……

パンフレットをパラパラとめくる。

そこには、明日何時に集合だとか、何時に消灯だとか、そんなことが書かれていた。

「消灯10時かよ！なんていう早さだ。」

ページをめくる。

次のページには、班毎にメンバーの名前が書かれてあった。

- 第1班 秋山翔太 富本仁 岡田真之介 山下カノン 山本桜 -

今見ても、このメンバーで修学旅行とは、なんて羨ましい。
そして、僕たち3班。

内藤楓、内山信輝、根本遙、そして、吉沢愛莉……

僕は、この班が決まったとき、ハズレくじを引いたなど、少なからず思つた。

だが、2日前、吉沢愛莉という女性に会い、話をして、それは大きく変わった。

吉沢さんがいれば、きっと楽しい修学旅行になるだろ。

パンフレットを閉じ、鞄の中に入れた。

明日は5時起きだ。

僕は、明日の準備を終わりにしたあと、早々と眠りについた。

修学旅行の当日。行きの電車の中、僕は内山の隣の席で、熱いカード話に耳を傾けていた。

「そ、そ、それでこのカードの出番なわけですよ。へへへ。あ、あ、相手の攻撃をう、受け流すことが、で、で、できるんですう！」

内山信輝。通称、デブウェイザーだ。

岡田真之介グループ所属。担当はカード。

見た目から太っていて、牛乳瓶の底のようなメガネがチャームポイント……なわけあるか！

普段は、暗く、ほとんど会話をしない奴なのだが、カードの話題になると、異常にテンションあげ、マシンガントークを開発する。

「ア、アハハ、なるほどね。」

「そ、そ、それとですね！」「このカードの、こ、こ、効果も凄いんですよつよつよ。」

「慌てなくて良いから、ちゃんと喋ってくれ。」

「わ、わかり、ま、ま、ました」

突然、内山はたくさんのカードが入ったケースを、鞄の中から取りだした。

何十枚単位ではない。この量だと何百枚単位だ。

「こ、このカード、レ、レベルの割りには、か、か、かなり使える
んですよ！」

パラパラとカードをめくつていぐ内山。そして、迷いもなく、目的
のカードを見つけた。

なんてスピードだ。何百枚あるカードの中から、目的のたった一枚
のカードを、たった数十秒の間で見つけるなんて…
そんな特技があるなら、それを勉学とか、別な方に使つたら、もの
凄いことになるだろうな…と、ひしひしと感じた。

「ちょっと、静かにしろよなー。うちらの班だけだぞ、こんなうつ
さいの。」

前の席からひょこっと顔を出し、そう言つたのが、吉沢愛莉だった。

「ちよ、僕もかよ

「何言つてんですかあー、な、内藤くんだけ、た、楽しそうに
してたじゅ……」

「じゃないからー、断じてしないぞ」

内山は、なんのことを言こやがる。
まるで、僕と内山が仲良く、カーデのことをについて熱く語っていた
みたいではないか。

「おおおお、内山モー！それに、内藤氏も、ここに席だったのですか
ー。おはよーいわこまちー！」

急に、真之介が現れた。

「おはよーい」

「お、おは、おはよーい」

「で、真之介、急にどうしたんだ？」

僕ら3班と真之介たち1班の車両は別であるのに、どうしてこいつまで来たのだろうか。

内山や僕に会いに……いや、その可能性は低い。

なぜかといふと、班」とに席が指定されるのだが、他の班がどの車両に乗つているのかは、知られていないからだ。

「いや～お恥ずかしことに、トイレを探していたら、IJJまで来てしまったのですよ。」

真之介は、照れ笑いをしながら、そう答えた。

「“カオーリーを探せ”じゃあるまいし、簡単に見つけられるだろ」「

「それでも、内藤氏に会えて、逆にラッキーですかねー。」

真之介は、僕に向かつてピースをしてみせた。

この指一本を匕首にかしてやりたい。僕はそう思つたが、今はやめておこう。

「おお、内山氏！そのカードは、超ウルトラアカードじゃないですかあ……！」

真之介は、内山が持つていたカードに気づくと、田の色が変化した。

「IJの輝き、IJの強さ、素晴らしいですう……！」

「へへへ。さ、昨日、カード買つたら、ぐ、ぐ偶然出てきたんだ。」

「羨ましいです…実際に羨ましい…。」

僕は、話について行くことができなかつた。いや、むしろ、ついて行きたいとは思わなかつた。

なんだ、このオーラは。なんで、こんなにギラギラしている。車内は冷房がついて、快適な温度のはずなのに、なぜ、この空間だけ熱い。

「ちよっと、カードのことは分かつたから、いい加減にしなさいよ
ねー」

吉沢さんは、少々強い口調でそう言つてきた。

さあない。そんなに熱く語つてゐるから、怒られるんだ。ありがとひ、吉沢さん。君は僕の救世主だ。

「やうですね。吉沢殿申し訳ありません。以後、気をつけますです。
内山氏、内藤氏も、もう少し、ボリュームを下げる喋りましょう。

おい、待て……

「なんで、そこに僕の名が入る?」

「何をおっしゃつているんですか、内藤氏。今まで、楽しく喋つていたではないですか～」

「だから、喋つてねえつて。一言も喋つてねえぞ！」

なんて言いがかりだ。

だが、いぐり否定をしても、このチームオタク…もとい、チーム真之介のパワーには氣負いしてしまつ。實に腹立たしい。

これが、あと1時間も続くのか……かなりきついな……

「さて、実際にカードゲーム対戦としされこみましょ～！」

「な、内藤くんには、ま、負けないぞ～」

なんか、やる気だ。

「いや、遠慮しておくれよ」

「またまた～。遠慮しなくて良いのですぞ～。」

真之介はそう言つと、ゼンからともなくカードを取り出し、僕に手渡してきた。

僕、もう、涙目です。

“ファンタジーランド”

昼頃には着くと、いつちーは言つていたが、それよりも若干早めに着いた。

僕は、長時間電車に乗っていたことと、長時間のカードゲーム対戦をやらされた結果、体調が悪くなっていた。

駅から出て、背伸びをする。とても、気持ちが良い天氣だ。
天氣予報通り、今日は雲一つなく晴れていた。

「すげえ！ なんて規模だ」

「あのキャラクター何？ きやーわーいー」

他クラスの生徒も、修学旅行だからなのか、いつも以上にテンションが高めであった。

「どうあえず、いつものとこ集合ひじょ。行こう。」

吉沢さんは落ち着いている様子だった。さすが、生徒会長といったところか。

いつちーの所にAクラス全員が集結した。

テンションが最高潮の翔太や真之介。それを楽しく見ている、仁也

カノンの姿があった。

「ちゃんと、説明聞きなよー。あとで、説明してって言つても、説明しないからね」

1班の様子を見ていた僕に、そう言つてきたのは、吉沢さんであつ

た。

「任せろって。携帯電話だつて、説明書なしで操作できるし、問題ないね！」

「アハハ。それとこれとは、違つだろ」

いつちーの話は、いつも以上に長かつた。

それもそうだ。こんなに広い所で遊ぶのだ。何らかの事件が起きることはある、言つまでもなく予想される。

少しでも事件が起きないようにするためにも、話が長くなるのは仕方のないことだ。

「つてことで、みんな、くねぐれも個人行動は避けるように。必ず班で行動するんだぞ？」

ですよね。

こんな広い場所で、個人行動なんてしたら、すぐに迷子になってしまつ。

仁や翔太たちは、班を抜けて来てあげると言つていたが、実際のところ、難しいだろう。

いつちーの長い説明が終わり、ファンタジーランドの中へ入る。

凄かった。ネズミーランドと回り……いや、もつともく感じた。

僕は、ファンタジーランドのパンフレットを見た。
予想通り、パンフレットには全体MAPが記載されていた。
このファンタジーランドところのは、いくつかのエリアがあるらしい。

一つ目のエリアは“ファンタスティックゾーン”
主に、ショットコーナー やお化け屋敷など、アトラクションが豊富なところみたいだ。

二つ目のエリアは“ショップ ザ ファンタジア”
名前の通り、大規模なショッピングエリアとなっている。

三つ目のエリアは“ファンタジー ゲームランド”
ここは、色々な対戦ゲームなどがあるらしい。真之介や内山が好きそうなどころんだな。

四つ目のエリアは“ファン フード”
飯を食べるとこころがかなり多いエリアだ。ここで、今日の昼飯は食べても良いな。

僕たちが最初に向かったのは、“ファンタスティックゾーン”であった。

内山は“ファンタジー ゲームランド”に行きたかったみたいだが、多数決で“ファンタスティックゾーン”に行くことになったのだ。“ファンタスティックゾーン”は入り口を真っ直ぐ進み、ゲートを抜けた先にあった。

これまた、とても広い。

絶叫マシーンや、お化け屋敷。それに、なんの乗り物か分からぬものまで、数多くのアトラクションが目にうつった。

「あれ乗ろうぜー！」

“ウルトラゾーン”

吉沢さんが指さした先にあったものは、もちろん絶叫マシーンであった。

絶叫マシーンの中でもかなり手の込んでいそうなものである。連續ループや様々な角度のカーブなど。絶叫マシーンが嫌いな人にとっては、まず乗つてはいけないものだらう。

「お、良いね。内山と、根本さんは大丈夫かい？」

「そ、そりですね～、あ、あまり、す、す、好きじゃないんですが

……」

「根本さんは？」

僕は、内山の話を最後まで聞かず、根本遙に、乗れそうかどうか訊ねた。

「問題ありません」

なんとも淡泊な返答だった。

根本遙。

とにかく感情を表に出さないタイプである。とこより、感情があるのかすら疑問だが……。

部活は、翔太の話によると、剣道部に入っているみたいだ。
なかなかの美人ではあるが、感情を出さない分、存在感がどうしても薄い。

それ以外の情報は、申し訳ないがもっていない。何せ、話したこと
が一度もないからだ。

僕は、やつぱり、吉沢さんがこの班にいてくれて良かったと思つた。

「じゃあ、早速行こうぜーーー！」

吉沢さんに牽引されるような形で、僕たちは“ウルトラゾーン”と言われる、化け物のようなアトラクションのある方へ向かつた。その乗り物があるところに到着すると、看板が立てられてあつた。

“現在、この乗り物の待ち時間は20分です”

20分なら許容範囲だろ？

混雑時のネズミーランドに行つたことがあるのだが、その時、乗り物の待ち時間は、最低でも60分待ち。

人気のアトラクションでは、120分待ちとか180分待ちとか、異常な数値をたき出していたのを今でも覚えている。

正直、1つのアトラクションに乗つただけで、1日が終わるとか、あり得ません。

ファンタジーランドも、9月の上旬といふこともあり、なかなかの混雑具合だ。

それで、20分待ちなんていふのは、かわいいもんだ。

僕たちは、話すわけでもなく、当たり前かのよつこ、列に並んだ。だいたい20分経つと、僕たちの順番がまわってきた。

マシーンに乗る。

内山と、吉沢さんは一番最前列に乗り、僕と根本さんはその後ろの席に座った。

僕たちは係員の指示通り、ベルトを締めた。

絶叫マシーンだけあって、ちょっとした緊張感がこみ上げてくる。

「ひょっと、うひゅやん、ベルト締められないの?」

吉沢さんは、笑いを堪えて、内山のベルトを締める手伝いをしていた。

「い、痛い、痛いです~」

「痩せるか、今我慢するか、どちらかしなさい。」

正論です。

「根本さん、ベルトをつくれない?」

僕は、隣の席に座つている根本さんに尋ねた。

「問題あつません」

「や、そか。アハハ」

いやー、実に淡泊な返事で何よりだ。

マシンが動き出す。

僕も緊張感からなのか、ドキドキが止まらない。

どこまでも続く坂を上り終えると、マシンはスピードを上げ急降下をし始める。

「ふわわわーああああああ

急降下した途端、内山の叫び声がした。

なんて声しやがる……

だが、僕も他人の事に目をやっている場合ではなかつた。

この絶叫マシーンの絶叫さは半端ない。

コースクリュー や傾斜のあるカーブもそうだが、とにかく、スピードが今まで乗ってきた絶叫マシーンよりも断然速い。

これこそが、“ウルトラゾーン”と言わんばかりの、手洗い歓迎を受けた。

どれぐらいの時間が経ったのだろう。

やつと、“ウルトラゾーン”から解放された。

マシンから降りた僕たちは、近くにあつたベンチに座り、休息をとることにした。

「みんな、大丈夫だつたか？」

僕は、乱れた髪を直しながら訊ねた。

「余裕余裕！」

吉沢さんは、笑顔でピースをする余裕さえ見せた。

「問題ないです」

お決まりの言葉ですね。

「ハア……ハア……」

「うつちゃん、大丈夫？ベルトきつかったの？」

吉沢さんは、内山に声をかけた。

内山の表情は、死んでいる魚のような表情をしていた。

絶叫マシーン廻りをしようと話していたが、内山の体調も考え、僕たちは休憩がてら、お化け屋敷に入ることにした。

「ザ 吸血鬼」

タイトルからして、このお化け屋敷のテーマは吸血鬼。
その建物の中に入ると、暗闇が僕たちを覆った。中は、少し肌寒く、
それが恐怖心を煽っているのだろう。

お化け屋敷つて、カッフルで入ると、女性が怖がって、男性にくつ

つくといいうイメージがある。

だが、僕たちの班では、まつたくと言つていいほど、そんなことはなかつた。

いつもと変わらない顔をし、むしろ、ちょっと物足りない顔をしながら暗闇を歩く吉沢さん。

どんなことが起きようと、表情一つ変えない根本さん。

「ひえ～！～！」

で、僕の腕をぎゅっと握んで離さない内山。

「おい、内山。 H A · N A · S E - !」

「ちょ、ちょ、これは、恐いって、れ、れ、レベルじゃ、な、な、ないですよー！」

これは想定外だつた。

内山のおかげで、僕の服は少しずつ伸びていくのが分かつた。

「ひっちゃん、恐がりだな～」

クスッと笑いながら、前を歩く吉沢さん。

それに、僕たちは続いた。

小刻みに体を震わせていた内山を除いて、僕たちは何事もなかつた
かのように、お化け屋敷を出た。

「楓くんの、服！めちゃくちゃ伸びてるんですけどー。」

吉沢さんは、僕の方を見ながらケラケラと笑っていた。

僕の服は、完全に伸びきっていた。

結構、お気に入りの服だったので、内山に弁償させたかったが、さ
すが僕。紳士な気持ちで、内山を許すことにした。

「な、内藤くん。」「ごめんね。」

「気にはんなつてー服なんて買えば、いいことだしさ」

な？僕つてば、凄くいい奴だろ？

「そ、そりだよね、ま、ま、また、買えぱいいよね」

内山はニコッとした。

なぜだか、僕はムカつときた。

それは、内山の呆気ない返事だったのか、ニコッとした表情だったのかは、分からぬが、とにかく、飛び膝蹴りをしたくなつた。

9月の上旬と「つい」ともあり、まだ夕暮れ時という感じではなかつたが、時刻は午後3時過ぎ。

修学旅行も後半戦に入っていた。

1泊2日の旅ではあるが、次の日の午前中には帰る予定なので、事実上、遊べるのは今日だけだ。

「よ、楓！」

ファンタジーランドのマップを見ながら、次はどこへ行こうかと考えていると、急に僕を呼ぶ声がした。

僕たちは声のする方へと目を向けた。

「おお、仁！」

ニコッと笑いながら、僕の方へ近寄ってきたのが、仁だった。

その後ろから、翔太や真之介、山本さん。そして、カノンの姿が確認できる。

1班のメンバーだ。

仁の話によると、1班のメンバーも、今までファンタスティックランドで遊んでいたらしい。

それで、たまたま、僕たちの班を見つけ、声をかけたのだといつ。なんといつ、偶然だ。

「今から、真之介のリクエストで、ファンタジーゲームランドに行くんだけど…どうする？」

仁が、3班の全員に伝わるよつ、大きな声で訊ねた。

「私は良いよ！結構、アトラクション乗ったしね。うつむちゃんと、遙は？」

「あ、はい。だ、だい、大丈夫です。はい。」

「問題ないです」

吉沢さんは、二人の返事を聞くと、元気よく仁に言った。

「んじや、早速行こうぜー！」

“ファンタジーゲームランド”

それは、ファンタスティックランドとは、全く別の世界が広がっていた。

ファンタジーゲームランドは、一つの建物の中になり、カードゲームやクイズゲーム、格闘ゲームなど、様々なアーケードゲームがあった。

例えるなら、ゲームセンターをもの凄く広く作った感じだ。

とりあえず何からやろうか、1班のメンバーと一緒に、ファンタジーゲームランド内を歩いていると、まさかのボーリング場を見つけた。

「マジかよ……」

いくら大規模なテーマパークだからといって、ボーリング場があるとは思わなかつた。いや、誰も思わないだろ？。

僕が、唖然としていると、翔太と真之介がテンションを上げはじめた。

「いじや、やるしかねえだろ！」

「ですな、ですなー！ボーリング大会としゃれこみましょーー！」

翔太と真之介のテンションが、こうなつたら手が付けられないことぐらい、ここにいる誰もが分かつていたのだろう。

結局、僕たちはボーリングすることになったのだった。

僕たちは、ボーリングの受付を済ませると、早速、投げる順番を決めた。

最初に投げるのは、もちろんこの男。秋山翔太だ。

「見てろよーーこの、天才ボーラー秋山様が、ストライクを出してやるぜー！」

ストライク宣言とは、さすがの度胸だ。

僕は、翔太の投げる様をじっくり見てやるうと、近くにあるイスに座つた。

「かあくん、ひさしひ！」

急にカノンの声が聞こえた。僕はびくっとしながら、隣を見る。そこに座っていたのは、間違いない。カノンだった。

「よ、よう。」

驚いた。まさか、僕の隣のイスに座っていたのがカノンだったとは……
僕とカノンは、あの夏休み、音楽室で会った日以来、一度も会話をすることはなかつた。

音楽室に行けば、カノンと話せたのかもしれない。でも、僕は、決して音楽室に行こうとはしなかつた。なぜなら……

「あー、もう……指滑つた」

凄く悔しがる翔太。

スコアを見ると、ガーターのマークが出ていた。

「はは。翔太、ストライク宣言出しておいて、それはねえだろ。」

「次がありますぞー！秋山氏ー！」

周りは、翔太のナイスガーターに大爆笑だつた。

だが、僕とカノンの間には、どこか気まずいものがあった。正直、カノンとどう接して良いのか分からなかつた。

「おーい、楓。お前の番だぞー」

仁の声で僕は、自分に順番が回ってきたことに気づいた。

ボーリングなんて、中学生以来やつたことがなかつたな……

僕は、座っていた席から離れ、一度大きく屈伸運動をした。そして、ボールを持ち、思いっきり真ん中を狙つて投げた。ピンは勢いよく倒れ、なんと全てのピンが倒れた。

やつた！ストライクだ。

周りは、今日初ストライクだったこともあり、大盛り上がりを見せていた。

僕は、自分が座っていた場所に戻る。

「かあくん、凄い凄い！」

カノンは、僕の方を見ながら言った。

「ま、まあな。」

結局、僕が出したストライクは、一度きりだったが、まづまづのスコアだったので、良しとしよう。

その後も、ボーリング大会は予想以上の盛り上がりを見せた。翔太は、連続ガーター勝負を真之介と内山とでしていた。勝負になつているのかすら疑問だったが、本人達が楽しんでいるなら、それもそれで良いだろう。

さて、本勝負は、吉沢さんとの一騎打ち。

吉沢さんは、小さい頃からボーリングをやっていたことだけはあり、素晴らしいフォームでストライクをどんどんとつっていく。

一方、ボーリングをしたのが今日で初めてという仁。最初の頃は、どう投げて良いのか分からず、ガーターを出していたが、さすが、すば抜けた運動神経をもつ男。すぐに、ストライクの取り方が分かつたみたいだつた。

「宮本くんも、吉沢さんもボーリング上手いな！」

カノンは、楽しそうに一人の一騎打ちを見ていた。

楽しそうに仁と吉沢さんのことを見ていたカノンを、僕はじつと見つめていた。

カノンは堺先輩のことを、どう思っているんだ？……

あの夏休み。音楽室で、カノンと堺先輩が楽しく話していた光景が浮かんでくる。

僕の居場所は、そこにはなかった。

あそこにあつたのは、堺先輩とカノンの居場所だけ……カノンが、なんだか遠い所へ行ってしまう。そんな気がしてならなかつた。

「よっしゃー！私の勝ちだな！」

「さすがに、最初の連続ガーターが響いたな。こりや完敗だ」

ボーリング大会は、スコア250をたたき出した吉沢さんの勝利で終わった。

仁は、悔しがりながらも、とても満足した表情を見せていた。

ファンタジーゲームランドから出ると、陽が沈みかけていた。時間を見ると、6時過ぎ。

いつの間に、こんなに時間が経っていたのだろう。

僕たちは、ファンタジーランドの出口へと向かい、歩き出した。

「それでも、楽しかったなーボーリング」

翔太は、満足そうな表情で言った。

「つか、翔太。最終的には、ガーター連続記録で勝負してただろ？」

「あれは、その……、あれだ！真之介とうちーに、合わせただけ。

「

仁の鋭いツツ「ハハ」、テンパリながら答える翔太。

「それはあんまりですぞ？秋山氏。」

「や、そつだ、そつだ。お、俺たちより、た、楽しんでた、じゃな
いか～」

「や、そつだけ？あは、あはは……」

その光景を見ていた、僕たちもまた、自然に笑みを浮かべていた。

お城のようなアトラクションが見えた途端、真之介は急に立ち止ま
った。

「ん？ ビハした、真之介？」

真之介は、にこりと笑い、鞄からデジカメを取り出した。

「修学旅行の記念に、一枚、写真でも撮りましょうよー。」

「良いね。撮ろひつぜー。」

僕は、気づくとそんなことを口にしていた。

確かに、修学旅行の記念に一枚、集合写真を撮るのも良いな。

偶然、1班と出会い、一緒に行動して。ボーリングという、いつでもできる遊びをしたのだが、とても楽しかった。

こんな楽しい修学旅行が、もう終わろうとしている。

僕は、一人一人の表情を見た。

早起きをしたからなのか、眠そうにしている人もいれば、お腹が空いた～という仕草をとる人もいる。

カードを必死に見ている奴もいれば、ボーリングの余韻に浸っている奴もいる。

それでも、みんな本当に満足している表情を見せていた。

だからこそ、まだ終わってほしくなかった。

もつともつとも、みんなと遊んでいたい。みんなと笑い、楽しみたい。

「じゃあ、20秒タイマーかけますから、良い表情を頼みましたよ！」

真之介は、そういうと、タイマーをセットし始めた。みんな、カメラを前に、髪の毛を直したり、立ち位置を確認したりしていた。

僕は、一番端の位置を確保した。

中央だと、カメラ写りが悪くなる可能性があるからな。

「楓）。カノンちゃんの隣じゃなくて良いのか？」

そう、僕の耳元で小声で言つてきたのは仁だった。

「なんで、僕がカノンの隣に……」

「ま、楓が良いつて言つなら、別に良いんだけどな。」

仁は、そう言つと、僕の隣の位置に立ち、髪の毛を直し始めた。

僕はカノンの方を見る。

カノンは、楽しそうに山本さんや吉沢さんと話していた。

カノンの隣……か。

正直、カノンの隣に行きたいとは少なからず思つている。でも、気まずい。

僕は、夏休みの出来事以来、カノンに対して、どう接して良いのか分からぬのだ。

それに、カノンの隣になんて、今さら行けるはずが……

「カノンちゃん」

急に仁「がカノンを呼んだ。

「え？」

カノンは、吉沢さん達と会話をすするのをやめると、仁の方を向いた。

「楓が、カノンちゃんの隣に行きたいんだってさ。ちょっと、来てくれない？」

カノンは、僕の方を見ながら、笑顔を見せ、小走りで僕の隣に来た。

「それならそっと耳へ囁いてくれれば良いのに～

「べ、別に頼んでなんかねえって。」

「ひらひら。せっかく、楓のために来てくれたカノンちゃんに、失礼でしょうが」

仁が、僕の頭をぺしッと叩く。

「けつ」

「よーし、俺が一番前な！」

翔太は急にカメラの前に立ち、片足を上げ、ピースをする。

「お、タイマーがかかつたみたいですね。」

真之介も、カメラの前に立ち、翔太と同じように片足を上げ、ピースをした。

「おい、一人が邪魔で俺たち『写つてないんじゃないか？』

「大丈夫大丈夫！仁たちの分まで、ちゃんと『写つておいてやるよ！』つて、うわ！」

片足でピースをしたまま、後ろを振り返ったのが不運だった。翔太はバランスを崩し、大きく転倒した。
それに続き、真之介も転倒をしたのだった。

パシャー！！

フラッシュとともに、カメラのシャッター音が鳴り響く。

「えええええ！」

真之介と翔太は啞然としていた。

「だから、言わんこっちゃない」

みんなは、翔太と真之介のやりとりを見て笑っていた。

僕もカノンも、その光景を見ながら笑った。なんの違和感も、気まずさもなく、普通に笑っていた。

カノンの笑顔はとても可愛かった。

修学旅行で撮った集合写真は、これが最初で最後の一枚だった。

たつた一枚の写真。たつた一枚の写真だけど、この写真を見るたびに、僕は思い出すんだ。

内山や真之介と、行きの電車でカードゲームをしたこと。吉沢さん達と、いろんなアトラクションに乗って、声が枯れるぐら絶叫をしたこと。

1班と合流し、ボーリングをしたこと。

そして、写真を撮るとき、カノンは何のためらいもなく、僕の隣に来てくれたこと。

修学旅行は、あつという間に終わってしまったけど、この思い出は、僕の心の中で、これからずっと残っていくだろう。

「楓）。学校遅刻するわよーー。」

下の階から、母さんの声が聞こえた。

「分かったよーー！もう行くーー！」

僕は、修学旅行で撮った写真を、机の引き出しに、そっとしまって、鞄を持ち、自分の部屋を後にした。

翔太が学校を休んでから、丁度一週間が経つた。

僕と仁は、翔太が休んで一日目や二日目ぐらいまでは、風邪でも引いたんじゃないか。脳天気な翔太のことだから、何かちょっとしたトラブルでも起こしたのではないかと、笑い話のネタにしていた。

だが、三日、四日と日が経つても、翔太が学校に来ることはなかつた。

僕たちは、少々心配になり、メールを送った。だが、翔太からメールの返事が来ることは一度もなかつた。

2時間目の休み時間。

僕たちがいる教室は、翔太がいないからなのか、いつもよりも静かな雰囲気に感じられた。

これほど翔太という人物は、2-Aのマークメーカー的存在として、大きく活躍していたのかと、この時ばかりは、ひしひしと感じるところとなつた。

「翔太の奴。どうしちまったんだ？」

僕がいる席に仁は来ると、心配そうな表情をしながら、僕に尋ねた。

「んー、どうしたんだろうね。メールの返事も来ないし」

僕も、なぜ翔太が学校を休んでいるのか、検討もつかなかつた。

翔太は、ちょっとやそつとの病気では、学校を休む奴ではない。僕たちが高校一年の時、翔太は風邪を引いて熱があるのにも関わらず、学校を休むことなく登校してみせた。

「風邪で学校を休むなんて、風邪に負けたみたいで嫌だ」と話していたぐらいだ。

だが、そんな翔太も、一度だけ学校を休んだことがあつた。それは、お婆ちゃんが風邪を引いて、熱を出したときだつた。

自分のことはお構いしなのに、お婆ちゃんのことになると、なぜか熱くなる翔太。

だから、今回もお婆ちゃんが風邪を引いて休んだのではないか。と、僕と仁との間で予想したのだが、それについて、一週間経つた今でも、翔太は学校を休んでいる。これは、不自然であつた。

もちろん、この日も翔太は学校に来ることはなかつた。

水曜日の朝。翔太が学校を休んで8日目になった。

「翔太の奴。どうしたんだろうな？」

「何か、大きな事件に巻き込まれたんじゃないの？」

翔太の異常な欠席の多さに、僕や仁たちだけじゃなく、2・A全体が、翔太を心配するようになっていた。
体育祭が、来週あるというのに、肝心のムードメーカーがないとなると、2・Aのテンションも上がらないだろう。

- 翔太どうした？みんな待ってるぜ！ -

- 病気になつたか？見舞い行つてやるから、連絡ぐらいよこせよな -

僕と仁は、翔太にしつこいと思われるぐらいの、メールを送った。
だが、翔太からメールが送られてくることは一度もなかつた。

心配だった。最初は、すぐ学校に来るだろ？と思っていたのに、もう8日も経っている。

僕や仁だけじゃない。真之介や吉沢さん、カノンだって、翔太が学校を休んでからというもの、相当心配している様子だった。

朝の会のチャイムが鳴った。

僕たちは自分たちの席に戻り、担任のいっちゃんが来るのを待つた。チャイムが鳴り終わってから何分か経ったあと、いっちゃんが教室へと入ってきた。

「内藤氏。磯辺先生の様子が、おかしいですよね？」

隣の席の真之介が、首を傾げながら僕に尋ねた。
確かに、いっちゃんの表情はいつもの機嫌の良さそうな表情ではなく、暗く険しい表情だった。

誰か、悪いことでもしたのだろう。

ふと、いち一のあとに続いて、教室へ入ってきた人がいた。

「翔太！」

僕と仁は、ほぼ同じタイミングで席を立ち、同じセリフを言った。
翔太と、8日ぶりの再会だった。

「……」

「翔……太……？」

だが、今日の翔太は、いつもの翔太ではなかつた。

いつもなら、テンション全快で教室に入つてくる翔太が、今日はやけに大人しい。

それに、病気になつた人みたいに、体は痩せ、やつれている様子だつた。

「宮本、内藤。とりあえず、座りなさい」

「はい……」

僕と仁は、いつちーの指示通り席に座った。

なんだ、この違和感は……どこかで見た光景と似ている気がする……

「どうしたのでしょうか、秋山氏……元気がないみたいですね」

真之介も、随分と心配した様子で、翔太のことを見ていた。
いや、僕や仁、真之介だけじゃなかつた。

2・Aにいる誰もが、翔太を心配そうな目で見ていたのだ。

翔太は、下を向き、暗い表情だった。

「みんなも、分かっていると思うけど……翔太は、ここ一週間ほど
学校を休んでいたわよね？」

確かに休んでいた。それがどうしたというのだ。いったい、何があ
つたんだ……

僕たちは、食い入るように、いつちーの話を聞いていた。

「それがね……」

いつちーは、一息呼吸を入れたあと、再び喋り始めた。

「翔太のお婆ちゃんが、先週、亡くなつたの」

！？

まさか……嘘だろ？！

あの、元気そうだつた翔太のお婆ちゃんが死んだ？！

僕は、その事実を認めることができなかつた。

翔太の方を見ると、翔太は黙り、ただただ、下を向いていた。

教室は一時騒然となつた。

それもそうだ。翔太のご家族が亡くなつたと聞いたのだから。衝撃を受けて当然。このリアクションは想定されることだ。

いつちーが、消火活動に入り、なんとか教室は静けさを取り戻した。

「翔太の友達は分かつてゐると思うけど、翔太はお婆ちゃんと二人

きつで暮らしていたの。」

そうだ。翔太は、お婆ちゃんと一人で暮らしていた。
翔太の母は、翔太が小さい頃、精神の病で自殺をし、父は、度重なる出張で家を出たままだった。

翔太の面倒を見ていたのは、お婆ちゃん。ただ一人だった。

「お婆ちゃんが亡くなつて、ここで生活するのが困難になつたらしいわ。」

僕は、いつちーの言つてゐる意味がよく分からなかつた。
結論から言ひと、どういうことなのだろう。..
すると、僕の心を見透かしたように、いつちーは話を続けた。

「だからね。体育祭が終わつたら、翔太はお父さんと一緒に住むために、この学校をやめることにしたのよ。」

やめる！？翔太が、学校を？

これもまた、認めたくない衝撃的な話だつた。

再び、教室が騒がしくなる。

「ほんとかよ、翔太！……」

そんな中、仁の声が、教室全体に響き渡った。
僕もその声に驚き、後ろを振り返る。

仁は、席から再び立ち、じつと翔太の方を見ていた。

「おい、本当なのかよ。」

「富本。ちょっと、落ち着きなさい。」

「これが落ち着いて聞ける話かつて！おい、翔太！」

仁は、今までにないぐらい、感情的になっていた。

感情的になっていたのは、仁だけじゃなかつた。僕も、もちろんシヨツクを隠しきれないのでいた。

手や足は震え、言葉に詰まる感覚だ。

なぜだ。どうして、やめるなんて事になつていて。それも体育祭後にやめるなんて、一週間とちょっとしかないじゃないか。

「……本当に。」

「何だつて？」

仁がもう一度、翔太に聞き返す。

僕も、前を向き、翔太の方に目を向けた。

「磯辺先生が言っていたことは、全部本当だよ」

翔太から出た言葉は、耳を疑うようなものであった。

クラスは一時間目の授業が終わつた今も、騒然としていた。

バン！ と、机を叩くような音。

休み時間だというのに、僕たちの教室はその音で、シン……と静まりかえつていた。

僕も、何が起きたのか辺りを見回すと、仁が翔太の机を叩き、翔太

に問いつめている光景があった。

「どうこいつことだよ、翔太」

「どうひつて、わざき話した通りさ」

翔太は、何を言っているんだという表情を仁に見せていた。
どう見ても、いつもの翔太ではなかつた。

「そうじやねえよ。なんで、俺たちに何も言わなかつたんだよ」

「……」

翔太は再び黙り、下を向いた。

「おい、人の話聞いてんのかよ！」

仁は翔太の胸ぐらを掴んだ。

教室からは、悲鳴ともとれる声が聞こえる。

「やめなよ、仁。やりすぎだよ？」

さすが、生徒会長の吉沢さんだ。

翔太と仁の「もめ事に気づくと、すつと仲裁に入ってきた。

「ちょっと、黙ってくれ。これは、俺たちの問題だ」

部外者は近寄るな。そう、言つていいようだった。

圧倒的な威圧感だ。

さすがの吉沢さんも、これ以上何も言えないみたいだつた。
真之介やカノンも、仁と翔太の様子を黙つて見ていた。いや、黙つて見ていることしかできなかつたのかもしれない。

「翔太が心配で、メールだつて何回も何回も送つたりしたんだ。俺だけじゃない。楓だつて、お前のことが心配で……」
「……にが分かるんだよ……」

翔太は仁の顔を睨みつけるような目で見ると、再び大きな声で言った。

「お前に、何が分かるんだ。って言つてんだよー。」

「……」

「ばつちゃんはな、俺の大事な人だつたんだよ。この世で一番大事な人だつたんだよ！大事な人が急に消えちまつたんだ！」

翔太は、体を小刻みに震わせ、それでも仁を睨みつけるように見た。

「分かるか？それが、どんな気持ちか、仁に分かるかよ！」

「分からんさ！だけど……だけど俺たち……親友だろ？なのに、なんで何も言わないで……」

「親友だ？」

翔太は、仁の話を横切り、鼻で笑つた。

「笑わせんなよ……何が親友だよ。何が友情だよ。結局、友情なんて、使うか使われるかの関係しかないん……」

もの凄い音がした。

仁が、翔太を殴つたのだ。

翔太は、勢いよく転倒し、その勢いで近くにあつた机もいくつか倒された。

教室からは、またしても悲鳴のような声が聞こえ、騒然となつていた。

僕は、啞然とその光景を見ていたが、仁が翔太を殴った時、ふと我に戻り、仁を止めに入った。

「見損なつたぞ！お前つてそんな奴だつたのかよ！」

仁は、僕の腕を払つと、教室から出て行つた。

翔太は、仁に思いつきり殴られたからなのか、倒れたまま動かなかつた。

吉沢さんも、仁と翔太のやりとりに見入つてしまつたらしく、今さらながら翔太の方へと駆け寄ってきた。

「ごめん、吉沢さん。翔太のこと頼むわ。」

僕は吉沢さんに翔太のことを任せると、仁を追いに教室を出た。

こんなに感情的になつた仁を見たのは初めてだつた。

見た目は不良っぽいが、根は凄く良い奴で。

自分の悪口を言われても平氣でいられるくせに、僕や翔太の悪口を言つている奴には無氣になる仁。

僕や翔太だけじゃない。偏見せず、誰に対しても優しく接する」とのできる仁が、翔太を殴つたのだ。

僕は、仁を探した。

授業なんてどうでも良かった。とにかく、仁に会わなきゃ。そり、思つたのだ。

だが、2時間目の授業を潰して探しても、仁の姿はどうにもなかつた。

仁と会えたのは、放課後だつた。

僕は、職員室に呼び出された。なこやり、今日のもめ事の当事者として、事情を聞くことだつた。

僕が職員室に入ると、仁の姿があつた。仁は、いつもに酷く説教をされているみたいだつた。

仁は、僕の存在に気づくと、照れ笑いをしてみせた。

仁の様子を見たとき、僕は、なんだか安心した。いつもの仁に戻つていたから。

感情的で、人を威嚇するような状態ではないのだと、確認できたからなのかもしれない。

なんとか説教と事情聴取が終わり、僕たちは職員室を後にした。

「『』めんな、楓」

照れ笑いをしながら、仁は僕に謝つた。

「なあに……謝る事なんてないさ」

放課後ということもあり、廊下を歩いても、人とすれ違つことはほとんどなかつた。

僕たちは、鞄を取りに自分たちの教室へと向かつた。

「なあ、楓……」

「ん、どうした?」

「ちょっと、付き合ひてくれないか?」

急に匕ひうしたのだろうか……

だが、迷つこともなく、僕は仁に返事をした。

「良いぜ」

僕たちは、自分たちの教室に戻り、鞄を取ると、学校の屋上へと向かつた。

屋上に到着し、扉を開けると、スーッと心地よい風が僕たちを出迎えてくれた。

空は夕陽でオレンジ色となつていて、なんだか幻想的である。

「んー、やつぱり屋上は気持ちいいな！」

仁は背伸びをしながら、気持ちよさをめぐらしだした。

「だな。今から、ぐつと寒くなるんだろうな。」

「また、夢のなことき。」

仁は僕の発言にふふっと笑つた。

そして、空を見ながら、大きく深呼吸をし、屋上から学校全体を見渡した。

「俺たちがさ……」

「ん?」

僕は、仁の隣の位置で、仁と同じく学校全体を見渡した。結構高いんだな…」

「俺たちが出会って、友達になつてから、まだ2年しか経つてないんだよな」

「まだ、それしか経つてないのか…」

「でも、俺はこの高校に来て、絆の深さつて年数なんかじゃないんだ。つて、思えたんだ。本当に友と呼べる存在に出会えたと思えたから……」

仁は少し間を置き、再び話し始めた。

「でも、俺だけだったのかな……」

「え?」

「俺だけが、楓や翔太のこと、親友だと思つてたのかな……つてさ」

そんなことないって、言いたかった。

でも、翔太が見せたあの態度が僕の頭を過ぎると、僕は仁に何も言うことができなくなつた。

「なんか俺、凄くダサいよな。一人で親友ぶつてたのかって。」

仁は笑っていたが、その横顔はどこか寂しく、悲しい表情であるかのようだった。

「僕は……親友だと思ってるよ。今でも、仁や翔太のこと。」

僕が今言えることは、これだけだった。

「親友を殴つちました……俺は……最低だよ」

仁は、自分の拳を見つめていた。

この時、仁の本当の気持ちが分かつたような気がした。

仁は、決して翔太に対して、怒つてなどなく、僕と同じ気持ちだったのだ。

親友だと思っていた翔太の態度が寂しかつただけ。

翔太のお婆ちゃんが亡くなつたことも、学校をやめることも。無論、僕たちにできることは何もなかつたのかもしれない。でも、一言言

つて欲しかった。それが、本当に残念だった。

翔太は言った。“友情なんて、使うか使われるかの関係だろう”と。
僕たちは、それだけの関係だったのか。
一緒に飯を食いに行ったり、ゲーセンで遊んだり、なんてことない
会話で楽しんだり。時には喧嘩し、時には笑い合った。
それ全てが、偽りだつたのだろうか。

日が沈むのを僕たちは、ただいつまでも見続けていた。

この日から、僕と翔太と仁の関係には、大きな亀裂が入った。
休み時間に喋ることも、一緒に帰ることも。一緒に遊ぶことだって
しなくなつた。

無情にも、翔太との別れは、刻々と近づいていた。

P · i 1 龜裂(後書き)

次回更新予定日：2月13日
第一話分掲載予定

僕と仁と翔太の関係は、亀裂が入り、元に戻ることはなかった。翔太の別れの日だけが刻々と近づく……数日も経たないうちに、翔太は僕たちの学校から姿を消すのだ。

今日も一人片隅、翔太は誰と喋るわけでもなく、教室から見える空をじっと眺めていた。

僕は複雑な気持ちだった。

翔太が学校をやめるのが、どうやつても変わらない事実だとするなら、笑顔で送り出してあげたかった。
だが、そう思つたびに、翔太が言つていたことが僕の頭を過ぎるのだ。

“ 友情なんて使うか使われるかの関係だ ”

と。

僕は、この言葉を聞いたとき、本当にショックだった。使うとか、使われるとか。一度も考えたことはなかつたし、翔太がそんなこと

を口にするなんて思つてもいなかつたからだ。

だが、事実。翔太は、あの時そう言つた。親友だと思つていた関係が、跡形もなく、見事に崩れた瞬間だった。

こんなに絆とは、もろいものなのだろうか……

今日は体育祭の日だ。

体育祭。僕たちの高校では、特別なルールがあつた。
体育祭に参加可能な学年は2学年のみ。

クラス対抗戦で、色々な競技で順位を付け、得点を競い合つ。
得点は1位が10点。2位が5点。3位が3点。4位が1点となつ
ている。

最後、残つた2クラスが、ドッジボールをし、真の1位を決めると
いうものだ。

もちろん、事前に自分の出る種目は決めておく。ちなみに、僕が出
る種目は、男子400mリレーと綱引きだ。

仁は走り幅跳び、高飛び、長距離走、リレーなど、様々な種目を受け持つことになった。

目指すは優勝だ。

優勝すれば、商品券1万円が、優勝したクラスの生徒全員に配られるという豪華企画だ。

僕と仁は、優勝するべく、この日のために体調を万全に仕上げてきた。僕たちに敵などなかつた。

体育祭当日。天候は雲一つない、見事なまでの晴天であった。

開会式が終わり、ようやく体育祭が開幕した。

体育祭の前半戦。どのクラスも一步も譲らない展開を見せていた。だが、体育祭が中盤になる頃には断然Cクラスがトップの座に立っていた。

さすがは、Cクラスだ。根性のねじ曲がった奴も多いが、運動神経の良い奴も豊富に揃っているだけはある。

次いでAクラス。Dクラス。Bクラスと並んだ。

1位と2位との差は、およそ50ptまで離されていた。

だが、とりあえず2位になれば、最後の決勝戦には出られる。

男子では、仁が、ズバ抜けた運動神経で、他クラスを圧倒したが、僕たちのクラスで運動神経が良いのは、仁と田端洋平だけだった。他はとすると、真之介や内山など、オタク揃いであるため、なんとも戦力的には低くなってしまう。

女子では、空手部部長の吉沢さんや、剣道部の根本さんが活躍を見せた。

また、カノンも音楽部でスポーツが不得意とのことだったが、それでも一生懸命頑張っていた。

「カノンおつかれ」

僕は、障害物走から帰ってきたカノンに、事前に買つておいたジュースを手渡した。

「かあくん、ありがとうー！」

カノンは疲労していた様子だったが、嬉しそうな表情を僕に見せてくれた。

次の種目は400mリレーだ。

それが終われば、一旦休憩が入り、そこから上位2クラスが決まる。そして、決勝戦へ。

僕たちは、現在2位ではあるものの、このリレーでビリになれば、2位から3位、4位へと転落する可能性もあり、油断はできない状況だった。

Aクラスの400mリレーの走者は、僕と仁と田端。それに、今日腹痛で欠席した陸上部員の代理で真之介が急遽参加することになった。

これは、酷い結果になりそうだ。

僕は、嫌な予感を抱えながら、ストレッチを入念に行い、リレーの準備をした。

そして、リレーは始まった。

第一走者は僕だ。

スタートの合図とともに、僕は全力で走った。Cクラスの生徒が僕を追い抜いていく。

なんとか、引き離されないよう100mを全力で走り、真之介へとバトンを渡した。

頼むぞ！ 真之介！

真之介はバトンを受け取ると、腕をぐるぐる回しながら走つていった。なんて、格好悪い走り方だ。

予想通り、真之介はCクラスに距離を離されるだけではなく、BクラスDクラスの生徒にも抜かされていた。

ボロボロになりながらも、真之介は田端へとバトンを渡した。

田端は無表情で、走り始めた。

早い。

田端は予想以上に足が速かつた。
ダントツでビリだったのだが、田端の俊足で、400mリレー現在3位のDクラスとの差をこれでもかというぐらい縮めたのだった。

それでも、一人も抜かすことなく、仁へとバトンを繋いだ。

さあ、残るは仁だけだ。

仁は、田端からバトンを受け取ると、面を一度舐め、ニヤッと笑い、全力で走った。

僕は目を疑った。

仁は、信じられないスピードでロクラスに追いつき、軽く追い越してた。

「さすが仁ー！」

「このまま、Bクラス、Cクラスも抜いちやえーーー！」

「頑張れー、仁ー！」

Aクラスの生徒から仁は歓声を浴びていた。
だが、仁は表情を変えず、このリレーを楽しんでいるかのよう、元気で走っていた。

結局、Cクラスを抜かすことはできなかつたものの、2位を維持することができた。

「さすが仁だな」

「いやいや、田端や楓の頑張りがあつたからだぜ」

仁はさうこうと、一ノコラと笑い、タオルで汗を拭いた。

休憩時間になり、放送が流れる。

・皆さん、体育祭ご苦労様です。今から、20分間の休憩時間です -

20分か……食堂で飯を食べるにはちょっと短いなと、仁たちと話していると、再び放送が流れた。

-今から、オタクダンサーズによる、アニソンパレードを開始します -

オタク……ダンサーズ?
アニソン……パレード?

僕は何か嫌な予感がした。その予感は、すぐに的中することとなつた。

体育祭の行われている校庭の中央には、いつの間にか特設ステージが設けられ、そこに現れたのは、何人ものむつさい男達だった。その中にいたのが、内山と真之介だった。

「いきますぞー！ふお————！」

真之介のかけ声と共に、様々なアニメソングが流れ、むつさい男達は揃つて踊り始めた。

なんてこつた。

てか、真之介の奴。いつの間にステージなんかに……

悪夢のような舞は休憩時間の20分間、ずっと続いた。

僕のリアクションとは裏腹に、周囲のオーディエンスは、大爆笑。テンションもヒートアップしていた。

休憩も終わり、上位2クラスが発表された。

1位はもちろんCクラス。2位は、リレーで頑張った甲斐もあり、僕たちAクラスであった。

上位2クラスが決まると、すぐに、決勝戦の準備が始まった。

ドッジボールのルールも少し変わっていて、外野はない。サドンデスマッチで、ボールを当てられた者は、そこで姿を消していくことになる。

頭にヒットした場合はノーカウント。

どちらか先に、選手がいなくなつた時点でゲーム終了。残っていたクラスの優勝となる。

以前は、女子生徒も参加させていたのだが、保護者からのクレームが相次いだため、今年からは男子生徒だけのガチンコバトルとなつた。

決勝戦の準備が終わるまでに、僕たちは作戦を立てていた。とりあえず、ボールがこちらにきたら、仁にボールを回す。相手から来たボールは取ろうとせず、とにかく避けること。

僕はふと翔太の存在に気づく。

翔太は一人、コートの片隅で、ボーッと、試合が始まるのを待っていた。

翔太
……

Bクラス、Dクラスはすでにギャラリーとして、決勝戦を見ていた。当然のこと、BクラスもDクラスも、Aクラスの応援をしていた。わき上がる歓声の中、ついに決勝戦が始まった。
さすがにCクラスは強豪で、次々にAクラスの男子を撃破していく。それに対し、Cクラスの男子はほとんど無傷状態だった。

「のままでは、負けてしまつ。仁はさう思ったのか、ボールを避けるのをやめると、全てのボールを取りにいった。

「よお、お前、西本」って言つんだっけな

仁は、Cクラスの生徒に話しかけられた。
確か奴は、根崎と言つたか。柔道部にいる根崎だ。

「そりだが、なんか文句あんのかよ」

「いや。ただ、運動神経がめちゃくちゃ良いらしいじゃねえか。

「んー……まあ、『君より』は、あるかもね。」

ふふっと仁は笑つてみせた。

「一生、その態度ができることがないからやるよ。」

根崎は、仁に向かつて思いつきりボールを投げつけた。

柔道部に入っていると言うこともあり、根崎の投げたボールは、力のある早いボールだつた。とても、僕には取れそうにない球だ。しかし、いとも簡単にボールを取つてしまう「仁」。

「で、なんだっけ？」

仁は、鼻で笑いながらそう言って見せた。

格好良かつた。

自分の運動神経を自慢するわけでもない。人を見下すことも決してしない。

それでいて、運動神経が抜群だなんて、格好いいにもほどがあった。

根崎は、胸くそが悪かつたのか、仁たち、Aクラスを罵倒し始めた。Cクラスのお決まりのパターンだ。

「俺はまだ、本気を出してねえだけだ。俺の本気ボールを食らつたら、お前ら……死ぬぜ？」

「…………うあーっ！」

急に翔太の叫ぶ声がした。

僕たちは、驚き、翔太の方を向いた。

翔太は小刻みに震えながら、しゃがみ込んでいた。

どうしたというのだ。

根崎が罵倒しただけで、なぜ、こんなに怯えているんだ。いつもの事じやないか。

僕は考えた。鈍感な頭をフル回転させ、考える。

そうか……

僕は気がついた。

翔太が急に怯えた理由がなんなのか。

確か、根崎が仁に向かつて罵倒したとき「死ぬ」と言った。

それが原因だと、僕は直感的に思つた。

“死”なんて言葉、普段の会話の中ですら、最近では使う人が多い。「殺すぞ」とか「死ね」とか。そんなことを当たり前のようになつ。そういう奴に限つて、“死”というものを、間近で経験したことはない。

翔太は、大切だった人を失つた。それも、この世で一番大切な人をだ。だから、翔太にとって“死”とは、言葉ですら恐怖のなものでもないのだ。

翔太は一人コートにうずくまるど、ガタガタと体を震わせていた。それを見ていた根崎は、見下すように翔太を見た。

「はは！だつせ！」いつ、怯えてるじやん」

ひとさし指にボールを乗せ、そのボールを回転させながら、笑みを浮かばせ、翔太を見る根崎。

根崎だけじゃない。Cクラスの全員が、翔太を見て笑つていた。

ただ罵倒しただけなのに、怯え、コートにうずくまつてゐる。なんて弱虫な奴だ。なんて臆病な奴だ。

そう言つてゐるかのようだつた。

「…………はあ…………はあ…………」

翔太は、あまりの恐怖に意識が飛ぶ寸前だった。

Aクラスの生徒達、それにDクラスやBクラスも、翔太のことを心配そうに見守っていた。

それでも、Cクラスは翔太のことを見て、笑っていた。

僕は、仁の方を見る。

仁は、下を向き、必死に感情を抑えている様子だった。

本当ならば、仁はCクラスの奴にがつんと一言、言い返しているだろつ。

だが、今の仁は、下を向き感情を抑え、翔太のことを底おうとはしない。僕は、その理由がなんとなく分かった。

そう、仁もまた、“友情なんて使うか使われるかの関係”という言葉が頭を過ぎっているのだろう。

もう、親友なんかじゃない。もう、友達なんかじゃない。仁は自分が自分に言い聞かせて、感情を押し殺しているのだ。

本当にそれで良いのかよ。仁。

僕たちの絆って、そんなにもろく、儂いものなのかよ……

違う……絶対に違う！

翔太は、2・Aのムードメーカー的存在で。いつも僕たちに笑顔を見せ、ハイテンションで、元気を与えてくれた。共に笑つたことも、共に泣いたことも、喧嘩したことだって僕は覚えている。

お婆ちゃんのことが大好きで、翔太の家に遊びに行くと、いつもお婆ちゃんの話を楽しそうに話していた。

そんな翔太が……僕たちを“使う使われる関係だ”と、そう思うはずがない。

翔太は、一人で何もかも背負つてこいつとしているんだ。

僕は、一人震える翔太を見ながら、ぐっと拳を握った。

次回更新予定期日：2月14日

翔太は、コートにうずくまつたまま、小刻みに体を震わせていた。

翔太。僕は何をすればいい……何をしたら翔太の苦しみを解き放つことができる……

僕は、翔太のことを見ながら、拳をぎゅっと握っていた。

“死”という恐怖が、どれほどのものなのか、僕には予想がつかなかつた。

この世で一番大切な人が死んでしまう悲しさ、寂しさ。それは、実際に経験した人にしか分からないものだ。

僕は、そんな経験をしたことがない。だから、翔太の背負つてゐる悲しみや恐怖が、どれだけのものなのか、全く分からなかつたのだ。何もしてやれない自分を憎んだ。

仲間が悲しみ、傷ついているというのに、僕は何もしてやれない。

ただ、見ているだけしかできないのか……

「Aクラスには、こんな負け犬しかないんだな」

根崎は翔太の方を見ながら、クスクスと笑う。

「……お前……今なんて言ったよ」

根崎の発言に、僕は自分で、何かがぶつんと切れるのが分かってた。

「Aクラスには負け犬が多いんだなって、言つたんだよ！」

根崎は、翔太に向かつてボールを思いつきり投げつけた。
鋭い球が翔太に向かつてくる。

僕が取れるボールではなかつた。威力も早さも、見ただけで怯えてしまつぐらい、凄いものだつた。

仁は、このボールを簡単に取つてみせたが、僕にはそんな技量はない。

だが、翔太がこのままやられるのを黙つて見過ごすなんて、できなかつた。

知らず知らずのうち、僕は翔太を庇っていた。

どんっと、後頭部に激痛が走る。

僕の後頭部に根崎の懇親の球が直撃したのだ。
僕は、大きく転倒した。

「おい、大丈夫かよ！」

「かあくん！！」

周りからは、悲鳴ともれる声が聞こえた。その中に、カノンの声
があった。

「りや、変なとこ見せられないな……」

「うう……」

だが、僕の頭はグラグラし、激しい吐き気に襲われる。立とうとしても、生まれたての子鹿のように、立つことができない。

「か、かえで……」

心配そうに近寄る翔太。

僕は、翔太の腕を全力で振り払った。激しい吐き気と、頭のグラグラをぐつと我慢する。我慢できるものではなかつたが、意地でも我慢した。

「よお、びびり。怪我はなかつたかよ？」

「……」

僕が翔太にできるひとこと……それは、精一杯の挑発だった。いつものように、「俺はびびってなんかねえ！」って言い返してくれ。

いつものように、「やつてやるよー！」って言ってくれよ。

だが、翔太は黙つたままだつた。

僕は、翔太の顔を見ようと、体を必死に起こす。

「つづー！」

痛みが予想以上に酷い。顔なんて上げられる余裕はなかった。徐々に、意識も薄れ始めていくのが自分でも分かる。

それでも、翔太に言いたいことがあった。どんなに、自分の意識が遠くなつても、翔太に言わなきやいけない。今、言わなきや絶対後悔する。

僕はそう思ったのだ。

「翔太の……婆ちゃんは……」

「？」

「……翔太の婆ちゃんは、今のお前を見てどう思つよー。」

大きな声を出すと、後頭部に激しい痛みが走った。

だが、僕は薄れゆく意識の中で、翔太に言った。今、自分が出せる一番大きな声で言った。

「翔太の婆ちゃんは、あの元氣で明るい翔太が大好きだつたんじゃ
ねえのかよ！どんだけ辛いことがあつても、笑顔で乗り切つてみせ
る翔太が大好きだつたんじやねえのかよ！そん……な……」

目の前が真っ暗になつた……

僕は、目を覚ました。

「……は？」

見慣れた風景……。見慣れた天井……。

そう、僕は保健室のベッドの上にいた。
僕は、起きあがろうとした。

「いてつ

後頭部に激痛が走る。

そうだ。僕は、根崎の懇親のボールを受けて意識を失ったのか……
僕は、なんてダサい奴なんだ……

「楓」

声のする方を向くと、そこには翔太の姿があった。
どこか、ぎこちなそうな翔太。

「翔太……あ、試合は！？」

あの後、試合はどうなったのだろうか。
Cクラスとの決着……根崎との決着は……

「勝つたよ……」

「そつか～、良かった……」

良かった……勝つたんだ……。

僕は、翔太から勝利の報告を聞くと、とても安心することができた。

きっと、仁や田端が頑張ってくれたんだろうな……
僕は安心すると、力を抜き、ベッドに横になった。

「楓……」

翔太が再び僕の名前を呼んだ。

「ん？」

「……」めん

翔太はそういうと、深く頭を下げた。

「なーに……謝るなよ」

「俺のせいで、こんなことになっちゃって……それに！」

「分かってる……」

翔太は、久しぶりに感情的になっていた。
久しぶりに見た翔太の姿だった。

翔太は、近くにあつた椅子に座り、下を向いた。

「ばつちゃんさ……」

下を向きながら、翔太は話し始めた。

「脳梗塞だつたんだ。急に倒れて……」

「……そつか」

「俺が、病院に行つた時には、もう……死んでた」

「……」

翔太の体が、小刻みに震え出すのが、目に見えて分かつた。その仕草は、とても悲しく、とても辛いものだつた……

「認めたくなかったんだ……仁や楓に、“ばっちゃん死んだ”って言つたら、ばっちゃんの死、認めちゃうみたいで……」

翔太は泣いていた。

隠すこともなく、翔太の目からは涙が溢れていた。

「そつか……」

辛かつたのだろう。悲しかつたのだろう……

お婆ちゃんの死を認めたくない。

だから、みんなに言えなかつた。言つてしまえば、全てを受け入れることになる。

翔太には、それが辛かつたのだろう……

僕は、なぜだか、翔太の気持ちが痛いほどよく分かつた。

僕は、翔太にかけられる言葉を探していた。
こういうときにつけて、言葉というものは出てこないものだ。

「でも、乗り越えなくちゃいけないんだよな。」

「そりなのかな……」

「え？」

僕の返事に、翔太は驚く様子を見せた。

「別に無理して乗り越える必要はないんじゃないかな……悲しいものは悲しいわ。」

「……」

翔太は再び黙ってしまった。

僕の思いもよらぬ言葉に困惑している様子だった。

「僕も……実は……小学生の頃、嘘めにあつてたんだ

僕が小学生の頃、嘘めにあつていた話なんて、誰にもしたことがなかつた。

だから、ちょっと恥ずかしかつた。

でも……、翔太には、全部言おつ。

「楓が…… 虐めに？」

翔太は信じられないという表情を見せた。

「ああ、極度の人見知りでね。名前も当時じゃ変わつて。虐めの対象となっちゃうんだよね。そういう人ってさ」

「……」

「友達が、僕にはいなかつたんだ……机に落書きされたことも、教科書が全部捨てられていたことも、学校の人全員に、無視されたこともあつた。」

「そんな……」

翔太は、自分のように真剣に、僕の話に耳を傾けていた。

そんな翔太を見ていると、恥ずかしい気持ちなんて、いつの間にか吹き飛んでいた。

ちゃんと、翔太に言えそつな気がした。

「辛かつた……悲しかつた……僕の存在を、全て否定されているみたいでさ」

「……」

「でもね、ある日、僕にも友達ができたんだ」

「それは良かったじゃんか！」

自分のことのように、嬉しそうな表情を見せる翔太。

「ああ、とても嬉しくてね。今まで一人で背負つてきた悲しみとか寂しさが、軽くなつた気がしたんだ」

「うん……」

僕は、天井を見た。

保健室の窓からこぼれる、夕陽の光で、保健室の天井もオレンジ色に染まつていた。

「……少しでも良いからさ……背負わせてくれよ……」

「え……？」

翔太は、何かを確認するかのように、僕の方を、じつと見つめた。

「翔太には、僕や仁。いや、もつとたくさんの仲間がいるんだから

……

「……」

そう……少しでも良い。翔太の悲しみが、苦しみが少しでも良いから分かりたい。

そして、共にまた歩んでいこう。

翔太は決して、一人なんかじゃないんだ。

僕は、保健室の窓から外を見た。

体育祭はすでに終わり、後かたづけが始まっているようだった。

「楓……」

「ん?」

僕は、翔太の方を向く。

「……りがとう」

翔太の声が小さかったこともあり、僕には翔太がなんて言ったのか聞き取ることができなかつた。

「え？」

「……もつ言わない」

「聞こえなかつたから、もつかい！」

「いいや、ぜつて一言わないし！」

気づくと、僕と翔太は笑い合っていた。
あの頃のように、自然に笑うことができた。

良かつた。本当に良かつた。

後頭部の痛みは、一晩治まらなかつたけど、それでも、良かつた。
これで、翔太を笑顔で見送ることができる。

駅のホームで、翔太と僕たちは、電車が来るのを待っていた。

平日の昼間だからなのか、ホームは閑散としており、人の気配はありませんでした。僕たちにとつては好都合だった。

焦らず、ゆっくりと翔太のことを見送ることができるのであるからだ。

「それにしても、今日でお別れとは……残念ですよ……」

真之介が寂しそうな目で翔太を見る。

「へへ。すぐ戻つてくれるさ。就職して落ち着いたら、すぐ戻る。」

翔太の言葉は一つ一つが力強く、自信に満ちあふれていた。

「こつでも……連絡しろよな。……待ってるぜ」

「仁は、どこかぎこちなさそうに、翔太に言った。

「仁……。」

翔太は、どこか寂しそうな表情で、仁のことを見た。そんな翔太を見て、仁はクスッと笑った。

「……なーに、みつともない顔してんだよ！別れのシーンじゃあるまいし！」

仁がそう言つと、翔太は、再びいつもの笑顔に戻つた。

「別れのシーンだつての！」

良かつた。仁と翔太の間にできた亀裂も、今は跡形もなくなつてい
た。

僕たちは……あの頃の仲に戻れたんだよね……

電車が来た。ドアが開き、翔太は電車に乗る。

「あ、翔太！」

「ん？」

吉沢さんが、鞄から一枚の写真を取り出し、翔太に渡した。

「『めん、『めん。修学旅行の時の写真……翔太に渡してなかつた。』」

「写真……？」

翔太は写真を受け取ると、クスッと笑ってみせた。

「俺、写ってねえじやん。」

「何を言つてゐるのですか、秋山氏！足が、ちゃんと写つてますぞー！」

「で、この手だけ写つてゐるのが、岡田くんだよね」

カノンが笑いながら言つ。

「ああ、そうだったな！あの時、俺と真之介だけ転んだんだっけか。

」

「やうですぞ！思い出の一枚です！」

「あはは！」

僕たちは笑い合つた。

久しぶりだな……みんなといつして、笑い合つのも。

「カノンちゃん。」

「え？」

「楓のこと……頼みました。」

翔太はそつ言つと、カノンに深々と頭を下げた。

「おい、翔太！冗談もほどほどに……」

「楓」

翔太が真剣に僕の方を見た。

「な、なんだよ。」

「チャンスを逃すなよ。楓だったら……大丈夫だって、信じてるから。」

「んだよ、それ……」

汽笛が鳴らされた。
発車の合図だ。

翔太は、みんなの顔をゆっくりと確認していくかのように見る。

翔太……見えるか？

翔太には、こんなにたくさんの友達がいるんだ。
僕や仁、カノンに、吉沢さん、山本さんに根本さん、内山に真之介
……ここには来られなかつたけど、翔太には、もっともっとたくさ

んの友達がいるんだぞ。

悲しいときは悲しくなればいい。辛いときは辛いって言つても良いんだ。

でも、一人で抱え込まないで。
僕たちがいる。遠く離れてしまつけど、僕たちはいつまでも翔太の友達だから……

翔太は笑顔を見せながら涙を流していた。

「じゃあな」

ドアが閉まり、止まっていた電車が動き出す。

「翔太！」

僕は、動き出す電車を追つように、走った。

加速していく電車は、みるみる翔太と僕たちの距離を離していく。

「翔太……翔太……」

翔太との思い出がフラッシュバックする。

翔太との出会いは、ゲーセンだったな。不良で絡まれていたのを仁が助けて……

それ以来、僕たちは一緒に遊んだ。楽しく会話し、一緒に帰った。お互いの部活で一緒に過ごす時間が減ったけど、時間を作つては、笑い、泣き、時には喧嘩した。

懐かしい日々……

電車は、さらに加速する。もう、翔太の乗った車両は見えなくなつた。

僕はそれでも、電車を追い、走つた。全力で走り続けた。

「…………りがとう…………翔太…………」

決して追いつけるとは思わなかつた。
でも、それでも僕は走つた。

「ありがとう…………」

ありがとう……翔太。

翔太に出会えて、僕は本当に良かった。

“さよなら”じゃないさ。また、いつか会える。
あの頃のように戻り、スマイルで愚痴り合おう。ゲーセンにだって、
行こや。

共に笑い、共に泣き、一緒に楽しもうじゃないか。

無情にも、どんどん小さくなる電車を、駅のホームの片隅で、僕は
いつまでも見届けていた。

P・13 その涙を拭いて（後書き）

次回更新予定期：2月19日

「かえでーー！」

下の階で母さんの声で、僕は田を見ました。体を起して、田覚まし時計を見る。

-AM8:34-

「マジかよ……」

今日は田曜日で、学校が休み。

土曜日は部活練習があるので、完全に休めるのはこの田曜日だけ。だから、小さな朝早くに起られた僕の気持ちは最高レベルで悪かった。

なんでこんな休日に……と、愚痴りながら、布団からひっくつ出ると、自分の部屋を出て、一階に下りた。

「困ったのよ～。せとせと、テレビがつかない」

一階のリビングに行くと、母さんはテレビのコサインを持ちながら、困った表情を見せていた。

「壊れちゃったんじゃないのかしら……」

「ちゅうど、こソイコン貸して」

母さんからパソコンを受け取ると、早速テレビに向かって電源ボタンを押してみる。
反応なし。

「やははつ、トレビ壊れちゃったのかしら……」

母さんがそんなことを言つてこぬ間に、僕はテレビに付いてある電

源ボタンを押した。

・今日の天気は、晴れの予報です。さて、全国の週間予……

「お、ついにじゃん」

恐らく、リモコンの電池切れだろ？。

「あらあら。リモコンが壊れちゃったのかしら」

母さんは、再び困った表情をした。

僕の母さんは、機械に対して非常に弱い。

例えば、録画にしきり録音にしきり、ビーツやつてやるのかが分からず、いつも父さんに任せている。

パソコンに至っては、電源の消し方……シャットダウンの仕方が分からず、コンセントから引き抜こうとする有様だ。

「多分、リモコンの電池切れだと想ひます。」

「あらそつなの?」

なんとも淡泊な返事だな。

僕は、リモコンから電池を取り出した。単三電池2本で動いてるみたいだな。

「母ちゃん。新しい電池は?」

「えーと……お父さんを任せこながり……どうあるのかじり……」
「……」

「ただけ父ちゃん任せだ……」

父さんは、日曜日も働いているので今はいない。

僕も電池がどこにあるかなんて、全く検討もつかなかったので、父さんが帰つて来ないと、これ以上どうにもならなかつた。

「じゃあ、父さんが帰つてくれるまで、我慢するしかないね

僕は母さんとリモコンを返し、自分の部屋に戻りしきつた。

「楓。ちよつと、電気屋まで行って、買つてきてくれないかしら？」

今なんと……

「ちよつと、リモコンがないと不便なのが。だから、お願ひ！」

母さんは、こつもこつだ。

料理や洗濯など、家事はしつかりやるのに、こつこつ部分は人に任せようとする悪い癖がある。

「いや、今日は学校が休みだから、もつちよつと寝ていたいんだだけだ。」「

僕は、面倒くさがりな表情をして、母さんに言った。

「ひ、酷いわ！楓をそんな子に育てた覚えはない……」

「はいはい。行ってきますよ

僕がそつと、母さんは満足そうな顔をしながら言った。

「やう？ 行つてらっしゃい

なんて親だ。

僕は出かける準備をし、家を後にした。

僕の家から電気屋は、そう遠くはない。

自転車で10分かかるかどうか。それぐらい、近いところにある。住宅街を抜けると、線路がある。踏切がないので、陸橋を渡り、ずっと真っ直ぐ、ひたすら真っ直ぐ進んだ先に電気屋がある。

名前は“スマイリー電気”略してスマ電である。

凄くローカルな電気屋であるが、品物は豊富で、他の電気屋と比べても値段設定がとても低く設定してあるので、何か家電製品を買うときはいつもこの店を利用しているのだ。

家から外に出ると、既に日は昇っていた。

4月という事もあり、それほど寒くはなく、なかなか気持ちがよかつた。

「つたぐ、めんどくさいなー……」

僕は車庫から自転車を取り出し、スマ電へと向かった。途中、野良犬に襲われ、もの凄いスピードを出したこともあり、予定よりも早く陸橋へ到着した。

腕時計を見ると、まだ9時を過ぎた頃だった。

「1Jの時間じゃ、店開いてないっての。」

僕は、自転車から降り、陸橋を登った。

頂上までつくと、一度、電車が陸橋の下を通過するところだった。

僕は、電車が通り過ぎるのを橋の上から、じっと眺めた。

僕は、電車を見るたびに思い出してしまった。

翔太は今頃何をやっているのだろうか。ちゃんと、生活しているんだろうか。

そして、僕たちのことを持てはいないだろうかと。

翔太とは、メールのやりとりをしたことは、今までほとんどない。メールをしなくても、学校や翔太の家に遊びに行けば、飽きるほど話せたからだ。

だが、今は違う。

翔太は、もう遠いところへ行ってしまった。いつ、帰ってくるかも分からない。

だから、メールをしようと思ったことは何度もあったが、実際にメールを送ったことは一度もなかつた。

新規メール作成ボタンを押し、本文を作りひつと思つても、そこでいつも止まってしまうのだ。

翔太に、なんてメールをしたら良いのか、分からなかつた。あの頃は、そんなことも考えず当たり前かのように話していたのに……

ふと、現世に戻り、腕時計を確認する。

- 11 : 24 -

なんてこいつだ。

気づいたときには、およそ2時間が経過していた。

こんなところで、思いに老けている場合ではなかつた。

一刻も早く家に帰らないと、母さんにまたなんて言われるか分からぬいからな。

僕は、陸橋を降つると、再び自転車に乗り、スマ電へと直行した。

-スマイリー電気-

田舎町にしては、なんともでかい建物だ。

僕は、自転車をスマ電の駐車場の端に止めると、店の中へと入った。店内も、本当に広く、どこに何があるやら一目では分からぬ。しかも、日曜日だということもあり、店内は多くの客で溢れかえり、うるさいぐらい賑やかだった。

とりあえず、電池コーナーに行けば良いんだよな。

僕は、小物が売つていそうな所へ小走りで向かった。

「とにかく、人が多いな……」

人混みをかき分け、電池売り場を探す。
だが、なかなか電池が売っているところが見つからない。

「電池どこだよ……」

つか、なんで僕が電池のために、こんなに必死になつてゐるのかが、とても馬鹿らしかつた。

そもそも、僕はリビングのテレビなんて使つたことがない。それに、日曜日という1週間に1度しかない貴重な休日をこんなことにために半分使うのか。アホかと。馬鹿かと。

だんだん、ストレスが貯まつてきた頃、誰かとぶつかつてしまつた。ぶつからないように、気を付けていたつもりだつたが、ちょっと集中力をきらしてしまつたようだ……

「すみません。大丈夫ですか？」

僕は、ぶつかつてしまつた人の方を向き、すぐに謝つた。

その人は、驚いた表情をしていたが、僕には誰だか分からなかつた。

こんな可愛い女性と知り合いだつただろうつか……

「ええと……どいかで、お会いしましたっけ？」

僕がそういつたと、その女の子はクスッと笑った。

「かあくん、私のこと忘れちゃったの？」

かあ……くん……？

そう、僕のことを呼ぶ人は、この世で一人しかいなかつた。

「つて、カノン！？」

「気づくの遅すぎー！」

学校では制服着用が義務づけられているので、カノンの私服を見たのは小学生の時以来、久しぶりだつた。
さらにカノンは、髪の毛を束ね、ポニーテールにしていたので、カノンだと気づかなかつたみたいだ。

いつものカノンも可愛いが、今日のカノンは、より可愛かつた。

「『』めん。寝起きでやれ……」

なんて理由だ。我ながら思った。

「ところで、カノンは何しにスマ電へ？」

僕がカノンに訊ねると、カノンは恥ずかしそうな表情をした。

「ちょっと……ね。」

カノンは僕から視線を逸らす。

「なんだよ。ちょっとって。」

僕は、カノンが向いた方を見た。

そこには、様々な携帯電話が並んでいた。

「ん？ 携帯……？」

カノンは、僕の方を向き、恥ずかしそうに、うんうと頷いた。

話によると、カノンは携帯電話を買いに、スマ電へ来たみたいだつた。

今まで、携帯電話を買ったことがなかつたらし。

とても意外だつた。社交性があり、行動力が人一倍にあるカノンが、携帯電話を使つたことがないなんて。

なぜ、今になつて携帯を買うことになつたのかといつと、部活などで連絡を取り合う際、携帯電話があれば、外出中に連絡がきても、すぐに分かることができるからだという。

部活も最近、忙しさが増し、それに伴つて連絡も増えただろうから、当然のことだらう。

携帯電話の購入のアドバイスをしてくれたのが堺先輩だといつのは、ここだけの話さ。

「そつか。じゃあ、僕も一緒に見てあげようじやないか

「え、一緒に見てくれるの？助かるー」

「任せなさい。きっと、カノンにぴったりの携帯を見つけてあげようじゃないの？」

僕は、どこか自慢気になっていた。

といつても、携帯を選ぶとなると、数分で決まるものではない。会社だつて、BUNNYCOMBO。それにHARD BANKなどあるし。

値段によつては、使える機能が様々であるし、色や形も様々である。僕は、独断と偏見で、カノンに似合ひそうな携帯を見つけ、カノンに見せた。

「なんか、色が派手じゃない？」

そうきたか。

活発な性格だから、そのイメージで少し派手目な色の携帯を選んだのだが、違つていたようだ。

「んー、カノンは何かこだわりとかある？」

「こだわり？」

「うん。例えば、機能が豊富な携帯が欲しいとか。色とか形とかさ。

「

カノンは、様々な携帯電話を見ながら少し間をあけ、喋った。

「シンプルな柄で、メールと電話ができれば……」

「了解。それさえ分かれば、選びやすい」

僕は、カノンのリクエスト通りのものを探した。
要望さえ分かれば、選ぶのなんて容易いものだ。

「これなんてどうよ?」

僕がカノンに見せたのは、COCOMOのスマート携帯。
色は白一色で、なんともシンプルなデザインである。

「良いかも!」

「ほら、しかもこの携帯、すげえよ。新機能ついてるんだってさ。」

「へえ~。どんな機能なんだろ?」

凄いとは言つたものの、確かに何の機能が新しく導入されてゐるのか、さっぱりだ。

「んん……と、とりあえず、新しい機能さー。」

「そのまんまじゃんー！」

携帯電話と一緒に探していくだけなのに、とても楽しい時間だった。この時は、僕の母さんが天使に見えた。母さんが電気屋へ行けと言わなかつたから、こつじてカノンと一緒にいることはなかつただろう。

「じゃあ、これにしようかな」

カノンは、僕が勧めた携帯を手に取ると、手続きをしに、カウンターヘと向かつた。

僕はその間に、携帯電話が並んでこるすぐ近くのストラップ売り場へ向かつた。

そこには、様々なストラップが置いてあつた。

「んー、どれにしよう？」

こう、たくさんストラップが置いてあると、どれを買つて良いのか迷ってしまう。

でも、これはカノンに聞くことはできない。ちょっと、びっくりさせたいからな。

僕は、悩んだ挙げ句、購入を決めたストラップを手に取り、レジへと並んだ。

僕とカノンは用事を済ませると、スマ電を後にした。腕時計を見ると、午後2時過ぎだつた。

携帯電話を選ぶのにこんなに時間がかかっていたとは、思いもよらなかつた。

「かあくん、本当にありがとうございました、携帯買えたよ~」

カノンは嬉しそうな表情だつた。

「いやいや、お役に立てて嬉しいよ」

僕は、駐車場の端にとめておいた自転車を取り、カノンと並んで、陸橋のある方へと歩いた。

カノンも自転車でスマ電に来たみたいで、一人で自転車を押して歩

いた。

「そりいえば、カノンは、携帯の使い方わかる?」

「使い方?」

「うん、メールの送信の仕方とか……メアドの設定とか」

「えっと……」

カノンは急に立ち止まり、携帯電話の説明書を取り出し、読み始めた。

「うーんと……5ページか……」

「つで、カノン。ちゃんと教えてあげるから、説明書こんな感じで
読まないの!」

「あ、あはは。ごめん」

カノンは恥ずかしそうに苦笑いをした。
なんとも、初々しかった。

僕も、最初携帯電話を手にしたとき、何がなんだか分からず、あた

ふたしてたな。

そんなことを思いながら、僕はカノンに、携帯電話の使い方をできるだけ分かりやすく、丁寧に教えた。

「じゃあ、ひやんとメール送れるか、試してみる?」

「やうだねーでも、どうやって?」

「僕の携帯……」

ふと、僕は言葉に詰まった。

なぜか、急に恥ずかしい気持ちになつたのだ。

「かあくん、どうしたの?」

不思議そうに、僕のことを見るカノン。

「あ、いや、なんでもない。」

なんでもないわけがなかつた。
僕の鼓動は、早くなつていた。

「ほ、僕の……携帯に送つてみて。メアド……教えるから……」

凄くぎこちない言い方をしてしまつた。

カノンは僕を見ながら、笑みを浮かべ、うんうんと頷いてくれた。

なんだか、凄く嬉しかつた。

別に、告白をしたわけじゃないし、何か凄いことをしたわけでもない。

第一、カノンは僕の友達だ。

友達にメールアドレスを聞くのなんて、朝飯前なはずだ。
でも、相手がカノンになると、どうして緊張してしまうんだろう。
どうして、メールアドレスを交換して、こんなに嬉しいと思つんだ
ら……不思議で仕方がなかつた。

カノンにメールアドレスの登録の仕方を教えながら歩いていると、
陸橋に到着した。

頂上に行くと、また電車が通過するといひだつた。

カノンは立ち止まり、電車が通過するのをじつと見つめていた。僕
も、カノンと同じように電車を見つめる。

「秋山くん。今頃じうしてるのかな……」

カノンは、通過していく電車を見つめながら、呟くよつと囁いた。

「翔太のことだ。元気にしてるわ。」

電車はもの凄いスピードで陸橋の下を通過していく。

「時々ね、こうして電車を見てみると、秋山くんのことを思って出すの」

「へ、へえ～。」

「私、秋山くんとあまり話したことなかつたけど、凄く立派だと思ふう

「……立派？」

「うん……お婆ちゃんの死を受け入れて、前を見て進んでいけるなんて、凄く立派だよ」

まるで、自分がそんなことができませんって言つてこぬよつと聞こえた。

でも、カノンはしつかり前を見て生きているじゃないか。
僕とは違う、後ろを振り向かず、どんなに辛いことや悲しいことが
あっても、前を見て進むことがカノンにだってできているじゃない
か。

電車は、もう陸橋を通過してしまっていた。

最近の学校の話をしながら、僕たちは陸橋を降りた。

「じゃあ私、早速家に帰つて、メール送るねー。」

カノンは、笑顔を見せた。

「あ、カノン」

「ん? なに?」

「……いや……なんでもない。」

「さつきから、かあくん、おかしいぞ~」

カノンは、僕のぎこちない様子を見て、笑っていた。

僕はカノンに、『そのまま一緒に帰る』と言ったかった。
だが、なぜか口にだして、声に出していくことができなかつた。

「今日は、本当にありがとう。」

カノンはやうべひとつ、自転車に乗つた。

「カノンー。」

「？」

カノンは僕の方を振り向く。

僕は、ポケットから、電気屋で買つたストラップを取り出ると、カノンに渡した。

「え、これ……私に？」

「ほら……うん……その携帯シンプル過ぎるだろ。だから……いや、ついでだよ、ついで。」

「ありがとう、かあくんー可愛い熊さんだね」

カノンは熊のキャラクターストラップを手に、嬉しそうな表情を見せていた。

もつとカノンと一緒にいたい。もつともつとカノンと話してみたい。僕は、カノンの嬉しい表情を見ながらそう思った。

でも、もうカノンと二人きりになることは、恐くないだろう。カノンと二人きりになれたのは、偶然。そんな偶然が続くとは思えない。

カノンは部活や受験で今よりもっと忙しくなり、二人きりになるどころか、話すことだって難しくなるかもしれない。

そんなのは嫌だった。

カノンの笑顔がもつと見たかった。これで終わりだなんて、嫌だつた。

「カノン……」

カノンは、笑顔で僕の方を向いた。

「今度は……」

「……？」

「今度は、一緒に、どこか美味しい飯でも食べに行こう。」

ついに、言ってしまった。

僕の心臓は、とてもない早さで動いていた。

ドクドクっと、音を立てて動いているかのようだった。

カノンは、驚く様子をしたが、すぐに、ニコッと笑った。

「うん、良いよー。」

カノンから、その言葉を聞けただけで、僕はこの上ない幸福感に満たされた。

また、カノンと遊ぶことができる。一緒に過ごすことができるんだ。

今さらだが、僕はやつと、自分の気持ちが分かつた。

僕はカノンのことが……

テレビのリモコンの電池を買い忘れたことに気づいたのは、家に帰つてからだった。

P・14 君といつまでも……（後書き）

次回更新予定期：2月22日

高校三年生になると、クラスでは受験モード一色になっていた。塾の模擬テストの結果について話す者や、カリカリと音を立てて勉強をする者もいる。

もちろん、就職を目指す者も、面接の本を読んだり、就職雑誌を読んだりしていた。

必死になっているクラスメイトを横目に、僕は何一つやううとはしなかった。

何かをしなければならない。

そうは思っても、何をしたら良いべきなのか、分からなかつたのだ。

僕には夢や希望がないのかかもしれない。

就職して働きたいとも思わないし、大学へ行つて、何かを学びたいとも思っていない。

むしろ願うとするなら、このまま高校生活を続けていきたい……

でも、時間は冷徹なもので、1分また1分と過ぎていくのだ。

僕と仁と翔太の三人で遊んでいた時は、翔太の家でいつも遊んでいたのだが、翔太がいない今は、仁の家で遊ぶことが多くなつた。今日も、放課後の部活練習がないのを良い事に、僕は仁の家にお邪魔していた。

「楓もなかなかやるじゃないの！」

自分のベッドに座りながら、興味津々に僕の話に耳を傾ける仁。

「そんなことないって。……ただ、遊びに行くだけだよ」

「遊びなんてもんじゃない。それは『データ』って言つんだ」

仁は、いやつとしながら僕の方を見た。

「ちが……」

僕のズボンのポケットから着信音が鳴り響く。
マナーモードにするの忘れてた……

「お、尊をすれば向んでやります。つてやつか？」

仁がそいつているのを横田に、僕は携帯を取り出し、内容を確認する。

送信者は……“山下カノン”

本文を見る。

「じゃあ、今度の日曜日の11時、陸橋のところで待ち合わせね。」

返信ボタンを押し、本文を作成する。

「了解。遅れるなよ。」

送信つと。

「楓。顔がにやけてるだ？。」

「え、嘘？！」

気づかなかつた。

真剣にメールをしていたつもりだつたのに……

「まあ、そんな楓も、俺は好きだぜ？」

「だから、仁に好かれても嬉しくないつて」

僕が、軽快なシッコリをすると、仁はクスッと笑つた。

「でも、言つてくれて嬉しかつた。ありがとなー！」

仁にだけは、ちゃんと言つておきたかった。

協力してくれるとか、見返りがほしいとか、そんなことを期待して
言つたのではなく、一番信頼できる友にだけは、言つておきたいと、
そう思つたからだ。

仁は、僕の話を最後まで真剣に聞いてくれた。それだけで、僕は仁
に話して良かつたと思つことができた。

「俺も、できる限り協力する」

もの凄い真剣な顔で、そう僕に言つた。

「いや、気持ちがありがたいけど、仁に協力をお願いするほどものじやない？」

何を言つて居るんだとばかりの仕草を「止めた。

「楓がカノンちゃんに幸せになる」ことが、俺の幸せでもあるんだ。そうだろ？」「

そつだらへつて聞かれても……違つだろ？。

「あ、あはは。じゃあ何かあつたら頬むわ」

僕がそつ言つと、仁は自分の胸をぽんつと吊つて、どこか自信のある表情を見せた。

「任せなさい。」

その言葉は、なんとも頼もしく、なんとも恐ろしいものだった。

カノンと約束をした日は、お互いの部活がない日曜日。

その日は、丁度、この町で有名なイベント、“春祭り”というものが行われる。

桜の散る景色がとても綺麗だ。それに、数多くの露店が連なつており、そこに一日中いても飽きない。

春祭りは、桜の満開が過ぎた頃、年に一度だけ行われ、毎年、多くの客で賑わう。

僕は去年、仁と翔太とで春祭りに参加したのだが、カノンが一度も行つたことがなかつたため、即決したのだった。

カノンと二人きりで遊ぶなんて、夢のようだった。

高校にカノンが来てからというもの、一人きりで遊んだことはないと言つても良い。

でも、今回は一人だけで遊べる。

それを考えただけで、僕は本当に幸せだつた。

カノンと約束した日まで、あと2日。

僕は、通学の途中、偶然にもカノンの姿を見つけ、声をかけた。今日は、お互い朝の部活がなかったため、同じ時間帯に登校したみたいだった。

カノンも一人で登校していたので、カノンと一緒に歩きながら学校へと向かった。

「春祭り楽しみだな～」

「人がたくさんいて、迷子になるかもね」

「かあくんじやあるまいし、迷子になんかならないもんねー！」

カノンは、僕の方を向くとアッカンベーとしてみせた。

「けつ。どうせ、方向音痴ですよ～」

何気ない、普通の会話だった。

でも、カノンと話しているだけで僕は心が癒された。

カノンの表情や態度一つ一つが、僕に元気を与えてくれる。

でも、僕からカノンに与えてあげられるものなんて、あるのだろうか……

僕は、何事も中途半端にしてしまっている。

受験や就職のことなんて、これっぽっちも考えていないし、本気でやりたいことがあるわけでもない。

そんな中途半端な僕が、カノンにしてあげられることは何だらうか

……

僕は、カノンの元気な笑顔を見ながら、そう考えていた。

「かあくん、どうしたの？」

僕のおかしい態度に気づいたカノンは、僕の顔をのぞき込むようにして、訊ねた。

「い、いや。何でもないって。」

急にカノンの顔が近づいてきたので、僕は少々緊張してしまった。

「変な、かあくん。」

カノンはくすつと笑った。

「山下さん！」

ふと、男の声が、僕たちの背後からした。

僕たちが、声のする方を向くと、そこにいたのは、堺先輩だった。

「堺先輩！？」

カノンは、驚いた様子だった。

堺先輩は、僕たちの通っている高校を卒業し、大学へ入学した。

堺先輩の通う大学は、僕たちの学校に近い場所にあり、英語科や工

業科、音楽科など、様々な学科がある。

もちろん、頭が良くなければ入れない大学だ。

堺先輩は、その大学の音楽科へと入学したというのを、以前にカノンから聞かされたことがあった。

「先週から探してたんだ。良かつたよ、見つかって」

あははつと笑いながら、堺先輩は深呼吸を一度し、呼吸を落ち着かせていた。

「堺先輩、急にどうしたんですか？」

「ああ、実はね……」

堺先輩は、自分が持っていた鞄から、ある紙を取り出し、カノンに手渡した。

カノンは、紙を受け取り、それを見る。僕も、内容が気になり、カノンと一緒にその紙を見た。

-第57回 音楽コンテスト-

「これは……？」

カノンが、堺先輩に尋ねる。
堺先輩は、うんつと頷いた。

「山下さん。このコンテストに出てみないかい？」

「え……」

カノンは、とても驚いた表情をした。

それもそうだ。卒業した堺先輩が急に現れ、何かと思えば、音楽コンテストの誘いだつたとは。

誘われたカノンもびっくりしていたみたいだが、聞いていた僕も驚いた。

「俺の大学のサークルで、今度、Jのコンテストを手伝うことになつたんだ。」

「手伝う……？」

「ああ。アシスタンントとしてね。そこで、山下さんのこと話をしたら、是非参加してみないかって。」

「そんな……」

カノンは事実を受け止められないでいる感じだつた。
僕も、カノンになんて声をかけて良いのか分からず、ただ、堺先輩の言つてていることを聞いているだけしかできなかつた。

「それに、このコンテストは、とても有名なコンテストですね。ここで数多くの有名ピアニストが誕生しているんだ。」

「なのに、私が……ですか？」

堺先輩は、そんなことないといつ仕草をした。

「山下さんだったら、大丈夫。どうかな？やつてみる気はあるかい？」

カノンは、再び、堺先輩から受け取った音楽コンテストのパンフレットを見た。

何秒か見た後、カノンは堺先輩の方を向いた。

「……はい！ 私で良ければ！」

カノンは、やつぱり凄い。

僕が、もしカノンだつたら、断つていた。

こんなレベルの高いコンテストに出場するなんて、リスクがあります。

失敗すれば、笑い者。成功して当たり前だ。

それなのに、カノンは、やりたいと言つたのだ。

「そつか！ ありがとう。山下さんだつたら、やつてくれるつて思つたよ！」

堺先輩は自分の事のように、嬉しそうな表情をした。

「じゃあ、コンテストの事とか、課題曲、練習も含めて、今度の日曜日、どうかな？」

「日曜日……」

カノンは、堺先輩がそう言つと、困った表情で僕の方を見た。そう、その日曜日については、カノンと約束した日。春祭りに行く日だった。

「ん? どうしたのかな?」

何も知らない堺先輩は、カノンの様子を見て、不思議そうにしていた。

「いや、あの……」

説明しようとしても、うまく説明できずにいるカノン。

そんなカノンを見ていた僕は、つい思つてもいなかつたことを言つてしまつた。

「やつた方が良い。僕の事は良いからさ。」

「でも……」

カノンらしくない表情だ。

僕は、カノンを後押ししたい。そう思った。

「……応援してるからさ。悔いのないようにならせてやった方が良い。」

僕は、自分にできる最高の作り笑いをカノンにしてみせた。

「…………うん。…………」めん。

カノンは何か言いたそうだったが、それ以上何も言つことはなかった。

なんて、馬鹿なこと言つちやつたのだろうか……そう思つたが、これで良かつたんだ。

カノンは、ピアノが大好きで、去年の夏休みも、友達と遊ぶことなく、音楽室でずっと練習をしていた。

僕がカノンの練習風景を見たのは一度だけだったけど、一生懸命練習していた。

僕がカノンの邪魔をする権利はない。

音楽コンテストに出るために、今よりもっともっと練習しなけれ

ばならない事ぐらい、僕にでも分かる。

ここで、無理に引き止めてしまえば、練習の邪魔をしてしまつ」と

になる。

もう、カノンの邪魔をするのは嫌だった。

そして、何事もなく、日曜日は訪れた。

この日は、見事なまでの晴天だ。

だが、カノンは部活の練習で、春祭りには一緒に行けない……

「だからって、俺の家にかけ込むなよ。」

「まあ……ええやん?」

僕は、何もすることがなかつたので、お決まりのよつこ仁の家に行つた。

僕が、金曜日の事を仁に話すと、仁は呆れたような態度をとつた。

「そこは、引き止めておくべきだろ。」

「でも、カノンの邪魔をすることはできないよ」

「……つたく。しゃあねえな。」

仁はさう言つと、急に着替え始めた。

「どうした?」

「どうしたも、こうしたも……ちょっと出かけへくる

お前つて奴は……。
僕が、カノンと遊べなくて寂しがつているのこ、一人で出かけると
は何事だ。

「じゃあ、僕も行くよ」

仁は首を横に振った。

「楓は、ここでお留守番ー。」

仁はそう言つとこつと笑い、部屋から出て行つた。
追いかけて行きたかったが、そのうち戻つてくるだろつと思つ、何

か時間つぶしになるものはないか探した。

「おお、PS4じゃん！」

仁の家に、最新ゲーム機PS4があることに……

僕は、こう見えてもゲームだ。

今まで、様々なゲームをしてきたが、PS4でゲームをしたことはない。

ソフトを見てみると、意外にもスポーツ系のゲームが一つもなかつた。

あるのは、シューティングやテトリス……

つて、テトリスとかPS4でやらなくてはいけないんだろう……

そんなことを思いつつも、僕はテトリスをプレイしてみた。だが、これがなかなか面白い。

シンプルでありながら、奥が深い。さすがはテトリス……気づくと、1時間ぐらいはプレイしていただろう。

僕がテトリスに熱中していると、僕のズボンのポケットにあつた携帯が鳴った。

僕は、めんどくさいと思ひながらも、ポケットから携帯電話を取り出した。

電話だ。

発信者は「……

「もしもし……」

「楓か？急にすまん！ちょっと俺の部屋使つから、家帰つてくれ……」

「なんだよ、散々待たせておいて、それはねえだろ……」

（むしろ楽しんだが……）

「急に使つことになつたんだ。すまん。今度、飯奢るからさ……」

「……分かつたよ。」

「じや、やうこそ……」

なんとも失礼な電話だ。

ちょっと出かけてくるから留守番しておとと言わされて待つていれば、
今度は帰れと。

なんとも理不尽なことだ。

今度、高級料理でも駆走にならなきや納得がいかんな。

僕は、そんなことを思いながら一人、自分の家へと帰ったのだった。

家に帰つたといひで、やることが何一つなかつた。

1週間に1度の休日だつていうのに、何もすることがない。ゲームもなんか飽きたし、漫画だつて、すでに読み飽きていく。だからといって、受験勉強をする氣にもなれないし、他の友達と遊ぶにしても、真之介と遊んだら、なんだか負けのような気がするし、翔太はもういないし……田端とは、部活仲間であるが、そこまで仲良くはないし……。

カノンは今頃、堺先輩と一緒にピアノの練習、頑張ってるんだろうな……。

僕はそんなことを思いながら、自分のベッドに横になつていた。

僕は携帯のバイブ音で田が覚めた。

気づかぬうちに眠つていたようだつた。

僕は、ベッドから起きあがると、机の上に置いた携帯電話を確認した。

今度はメールだつた。

送信者は……また仁か……

-すまん、楓！ちょっと、先生に呼び出されちゃつてさ。一人で行くのも気まずいから一緒に来てくれ。16時に正門で待つてるから

な -

「拒否権なしかよ……」

僕は携帯を再び机に置くと、自分のベッドに横になつた。
今日は、仁に振り回さればっかりいるような気がしてならなかつた。

仁の家に遊びに行つたのが最後、留守番をせられ、家に帰られ、
挙げ句の果てには付き添い役を任される始末だ。
なんだか、今日は付いてない日だ。

時計を見ると、15時を過ぎていたので、出かける準備をし、学校へと向かつた。

正門に到着すると、そこには仁の姿がなかつた。

僕は時計を確認する。

- 15 · 50 -

少し早かつたが、普通頼んだ奴が少し早めに来るつてのが定石だろ。ここまで、仁のことがむかつたのは初めてだ。
仁が来たら、ちょっときつづく言ってやろう。僕は、そう思った。

何分かして、僕に話しかけてきた人物は意外な人物だつた……

「かあくん？」

僕は、声のする方を向いた。

そこに立っていたのは、カノンだつた。

「カ、カノン！？」

僕は、何がなんだか分からなかつた。

僕のことを呼んだのは仁なのに、なんでカノンがいるのだろうか……

「え……と……、どうしたの？」

とりあえず、状況を確認しないと。

僕は、カノンに訊ねた。

「宮本君が、練習中に来て……」

カノンの話で全てを理解することができた。

仁は、僕とカノンを会わせるために、わざわざカノンに会こに行き、
僕を誘導したわけか。

「仁の奴……」

ふと、僕の携帯が鳴る。

携帯を取り出し、確認すると、仁からのメールだった。

・春祭り、まだ間に合つぜ。行つてこい！

「お前つてやつは……」

僕は、仁に謝りたかった。

仁は僕のために、丸一日潰してくれた。

それなのに、僕は、仁が僕のことを利用していると勘違いしていたのだ。

そんな奴じゃないことぐらい知っているのに……「めん、仁……そ
して、ありがとう……」

「カノン、行こう!」

僕は、カノンの腕を持ち、春祭りが行われている場所へ向かった。

「ちょ、ちょっと、かあくん!?」

カノンは驚いている様子だつたが、僕は気にせず走った。とにかく走つた。

春祭りは17時で終わつてしまつ。学校から春祭りの場所まで、走つても30分はかかる。

間に合うかどうかは分からなかつた。でも、僕は走つた。カノンと一緒に。仁の苦労を無駄にはしたくなかった。そして、高校生最後の春祭りをカノンと一緒に……

どれぐらいの時間、走つたのだろうか……

僕たちは、春祭りの行われている場所に到着した。だが、露店はもうどこも閉まつていた。

時計を確認すると、16：50ジャストだつた。

「あと10分あるのに……」

少しでも良い。カノンと一緒に遊びたかった……

だが、春祭りは、もう終わってしまった。なんだか悔しかった。
せつかく仁が頑張ってくれたのに……せつかく、カノンと二人きり
になれたのに……

僕は、桜の雨にうたれながら、肩を落とした。

ドーン！

大きな音が鳴り響いた。

「かあくん、見て！」

カノンが指さす方を見ると、上空には綺麗な花火が打ち上がっていた。

「花火！？」

4月末だというのに、花火か……

花火が上がるには少し明るい空だつたが、それでもとても綺麗だつた。

僕とカノンは、花火をじっと見ていた。

何を喋るわけでもない、ただじつと花火が打ち上るのを見ていた。

「かあくん

ふと、カノンが僕に話しかけた。

「ん？」

「今日は、ありがと」

僕は、カノンの方を向いた。カノンは、とても優しい笑顔だつた。

「あは、あはは。露店閉まつてて、なんもできなかつたけどね。」

カノンはつうんつと首を横に振った。

「それでも良いの」

「え……？」

花火は今も上空にこれでもかといいうぐら打ち上げられていた。

「かあくんと一緒に、花火が見れただけで、嬉しいから……」

「カノン……」

「あはは。なーんてね！」

カノンはにこつと笑うと、再び上空を見上げた。

僕の心臓は間違いなく早く動き始めた。耳元でドクドクと脈うつ感じが分かる。

僕は、ありつたけの勇気を振り絞り、カノンの手を握った。

カノンの手は僕の手よりも、一回りも二回りも小さかった。

それなのに、カノンの手はとても温かい。

この手を離したくはなかった。

カノンは、一瞬だけ驚いた様子を見せたが、カノンもぎゅっと僕の手を握ってくれた。

「カノン、今度はさ……」

「うん……」

「今度はもっと、一緒にいよっ……」

盛大に打ち上がる花火を、僕たちは手を握り合つたまま、ずっと見続けていた。

二人だけの時間。

僕とカノンだけの時間。

いつもでも、続くと良いな。

P・15 一人の時間（後書き）

次回更新予定日：2月25日

今日は、音楽コンテストが行われる。

春祭り以来、僕とカノンは、あれっきり一緒に遊ぶことはなかった。何度も誘おうと思ったのだが、カノンのことを想うと、決して誘うことなんてできなかつた。

僕にできることは、応援してあげることだけ。見守るだけ……何もしてあげられない自分が、とても情けなかつた。

今日、僕の呼びかけで集まつたメンバーは、仁、吉沢さん、真之介、山本さんだつた。

僕たちは、会場に着くと、受付でお金を払い、指定された席に座り、コンテストが始まるのを待つた。

客席は既に、独特的な緊張感があつた。

こんなところで、カノンも演奏をするのか……

そんなことを考えていると、なぜだかこつちが、緊張してきた。

「内藤氏。山下殿の出番は、まだなのでしょうか？」

ソワソワしながら、僕に尋ねてきたのは真之介だった。

「てか、まだ始まつてないでしょ！」

僕がツッコむ前に、吉沢さんがくすりと笑いながら真之介にツッコミを入れた。

「こいつ……できる。

「カノンは良いな～。こんな所で演奏できて……」

羨ましそうな表情でそう言つたのは、山本さんだった。
確かに、同じ音楽部でありながら、カノンだけ音楽コンテストに参加できるなんて、羨ましいと思うのは当たり前だ。

「私の分まで、カノンには頑張つてもらわないと！」

「カノンは、やってくれるわ」

僕はついそんなことを言つてしまつた。

「いや～、カノンは幸せで羨ましいね」

「内藤氏も、なかなかやりますな！」

山本さんと真之介は、僕の方を見ながら、くすくすと笑っていた。

待て待て。

いつ、僕とカノンがそういう関係だなんて分かつたんだ。

思い当たる人物は、一人しかいなかつた……

僕は、仁の方を向くと、仁は俺じゃないという顔をしてみせた。

じゃあ、誰が……

そんなことをしている間に、コンテストはついに始まった。
音楽コンテストという名だけあって、ピアノだけではなく、サック
スやフルートなど、色々な楽器が登場した。
聞き入ってしまうぐらい、どの演奏者達も、本当に凄い上手だった。

カノンは大丈夫だろ？か。失敗しないだろ？か……

僕はそう思つたが、カノンのことを信じるにしかできなかつた。緊張しないで、練習通りやれば、必ず成功するはずだと。カノンだつたらできると信じた。

そして、ついにカノンの出番が回ってきたのだ。

ステージ場に立つカノン。

カノンは少し緊張した様子で、演奏の準備に取りかかっていた。

「ついに、山下殿の出番ですな！」

真之介は小声でりながら、テンショング最高潮に達していた。山本さんや吉沢さんは、カノンの様子をじっと見つめていた。

「カノンちゃん、ちゃんと演奏できれば良いんだけどね。楽しみだ」

「仁もカノンの事を食い入るように見ていた。

カノンは演奏の準備が終わると、席に着く。手に付いた汗を拭き、楽譜を確認する。

今日のために、カノンは毎日毎日、一生懸命頑張ってきた。受験勉強と両立していかなければならぬので、大変だつただろう。勉強の時間を作つては、コツコツと受験勉強をし、それが終われば、またピアノの練習。

遊ぶ時間なんて、これっぽっちも、カノンにはなかつた。それでもカノンは、一度も弱音を吐かず、頑張つていた。

僕は、一生懸命になつて練習をしているカノンの姿を何度も見てきた。

だからこそ、成功させて欲しかつた。

今までの努力が全て、この場で報われることを願つて……

カノンは、深呼吸を一つすると、演奏を開始した。

僕は、一音一音、丁寧に聞いていく。

凄かつた。

決してお世辞ではない、カノンは信じられないぐらい、素晴らしい演奏をしていた。

丁寧に弾くだけじゃない。音の中に力強いものが、繊細な何かがあった。

あの夏休み……

僕がカノンの演奏を聞いたのは、あの夏休み以来だったが、こんなに上手だつただろうか。

いや、やはりカノンは上達したのだ。

休日も部活の練習。放課後も部活の練習。そうやって、毎日毎日努力をし、着実に力をつけたのだ。

カノンは自信に満ちあふれた顔をしていた。まるで、演奏を楽しんでいるかのように。

カノンの演奏している様子を、僕はじっと見つめていた。

そして、カノンの演奏は無事に終了したのだった。

コンテストの結果、惜しくも優勝を逃したが、見事な3位入賞だつた。

それでも、3位に入賞できるなんて、立派だ。

周りは、凄腕演奏者でいっぱいなのに、その中で3番目に入ったのだから。

僕は、結果が出た後、カノンの元へと向かつた。
すぐにもお祝いの言葉をかけたかった。

お疲れ様。今度は、ゆっくり休んで、一緒に美味しい飯でも食いに行こう。

と、そう声をかけたかった。

最高の労いの言葉をかけてやりたかった。
だが、僕の前に現れた人物は意外な人物だった。

「やあ、楓くん」

笑顔を見せ、僕に声をかけた人物は、堺先輩だった。

「堺……先輩？」

僕は堺先輩に、コンテスト会場から少し外れた、公園へと呼び出された。

コンテスト会場から外へ出ると、日の光が差し込み、心地よい風が流れていった。

僕と堺先輩は、公園へと到着した。

平日ということもあり、公園には人があまりいなかった。

僕たちは、噴水の近くにあるベンチに座った。

「急にどうしたんですか？」

僕は、早く用件を終わりにしたかった。カノンに早く会って、労いの言葉をかけたかった。

慌てた様子の僕を見た堺先輩は、にこっと笑うと、手に持っていた缶コーヒーを僕に手渡した。

「いただきます」

僕は、堺先輩から缶コーヒーを受け取ると、早速喉の渇きを潤した。

「山下さん……」

「え？」

堺先輩は、ベンチから立ち上がり、僕の方を向いた。

「楓くんは、山下さんのこと……どう思つ?」

!?

僕は、飲んでいた「コーヒー」を吹き出してしまった。

「すみません……」

その様子を見ていた堺先輩は、少し笑みを見せたが、急に真剣な表情になつた。

その表情は、少し恐怖さえ感じるものだつた。
たつた一つだ。たつた年齢が一つ上だっていうだけで、ここまで恐怖すら『えられる表情をつくれるなんて……
さすがは、堺先輩といったところか……

「单刀直入に言ひつよ」

僕も、ベンチから立ち上がり、塗れたベンチを拭いた。

そんなに、吹き出したことが悪かつたことなのだろうか……

そんなことを思いつつも、堺先輩の方を向いた。
堺先輩は少し間をあけ、再び話し始めた。

「俺は、山下さんが好きだ」

「えつ……」

堺先輩の思いも寄らぬ発言に、僕は、自分の耳を疑った。
啞然としている僕に、追い打ちをかけるように、堺先輩は話した。

「楓くんには、一言言つておひつと想つてね」

「……」

僕の表情を見ながら、堺先輩はにこりと笑った。

なんだか、その表情がたまらなく嫌だった。

「堺先輩は……」

「ん？」

こんな事を言つて良いのか分からなかつた。

でも、堺先輩の笑顔を見ると、なぜか悔しかつたのだ。

「堺先輩は、カノンの何が分かるんですか？」

そう……

堺先輩とカノンが出会つたのは、たつたの2年間ぐらいだ。
それなのに、どうしてそんなに好きだなんて軽く言える?
カノンと一緒にいた時間は、僕の方が長い。でも、僕は一度も好き
だなんて言葉、口に出したことはない。

でも、堺先輩は、簡単に好きだと言つてみせたのだった。

「何を分かつて、カノンを好きだつて言えるんですか？」

堺先輩は、僕が熱くなっているのとは反対に、いつも通りの冷静な
感情だった。

「確かに、楓くんよりも、山下さんと知り合ったのは最近なのかも
しない」

「じゃあ、どうして……」

「俺は、これから山下さんと一緒に過ごしていきたいんだ。」

「これ……から……？」

堺先輩は優しい笑顔を見せた。

まるで、好きな人を想いながら話しているかのようだ……

「過去なんて、どうでも良い。これから先のことを、好きな人と……
山下さんと、共に歩んでいきたいんだ」

全てを否定されたみたいだった。

僕とカノンの昔の思い出を。今までの思い出を……
でも、僕はそれ以上、堺先輩に何も言えなかつた。

完全に僕の敗北だった。

“好き”って感情の深さは、一緒にいた時間の長さじゃない。どれ
だけ、好きな人を想うことができるのか。
堺先輩は、そのことをすでに知っていたのだ。

僕は、一緒にいた時間の長さにこだわり、大事なことを忘れていた

のだ。

カノンのことなんて想つてなかつたんだ……。僕は、自分が良ければそれで良いと思っていたんだ……

そんな自分がとても恥ずかしく、惨めに思えた。

結局この日は、敗北感だけが残ることになった。

堺先輩が僕に衝撃的な事を話して、一日が経つた。

僕は、いつも通り、学校へと登校した。

もちろん、昨日のことは忘れようとしても忘れられずにいた。仁に、そのことを話したら気にすると言っていたのだが、どうやら気にしていられるところなのだ。

教室に入ると、いつも以上に、教室全体が賑やかだった。僕は、自分の席に着き、鞄を机の横にかける。

「内藤氏、内藤氏！」

朝っぱらから、ハイテンションで僕に話しかける真之介。

「申し訳ないんだが、気分が乗らないから、話はまた後にしてもらえるかな？」

我ながら、なんとも紳士的な応対だ。

それでも、真之介は僕に話しかけてきた。

いい加減うるさかったので、仕方なく耳を傾ける。

「二コースなんですよ！ それも大二コース！」

「分かった分かった。で、何？」

「ほら、山下殿を見てください。」

僕は、真之介の言われたとおり、カノンの席の方に目を向けた。

「…？」

カノンは、髪の毛をぱつぱつ切っていたのだ。
カノンの特徴とも言える長い髪が、今では、肩ぐらいにまで切られていた。

僕は、いてもたってもいられなくなり、自分の席を立ち、カノンがいる場所へと向かった。

カノンは、僕のことに気がついた。

「あ、かあくん、おはよう!」

「おはよう!」

「髪の毛、ぱつぱつ切ったんだー!」

カノンは、どこかいつもと様子が違かった。
いつもよりも落ち着きがないような、いつもよりも違つ雰囲気があった。

今日のカノンは、とにかくおかしかった。

「どう?似合つつかな?」

「……うふ、似合つむずかよ」

「そつか、良かつた」

カノンが、遠い存在になってしまった気がしてならなかつた。この感覚は、いつたい何なのだろうか……。

僕はとりあえず、自分の席に戻り、正気を取り戻そうとしていた。何かの勘違いだ。

昨日、あんなことがあったから、自分がどうにかなっているんだ。僕は、自分にそう言い聞かせ、動搖を隠そうとしていた。

すると、教室に仁が入ってきた。

仁は、僕が席に座っていることに気づくと、少々小走りで、僕の方に来た。

「楓、おはよー！」

「おう、仁。おはよう

仁は僕の方に近寄ると、急に真顔になる。

「楓、一つ報告がある。」

「なんだよ、彼女ができるってか？」

僕の冗談を軽く流した仁は、辺りを一度確認し、僕の耳元で囁くよ
うに言った。

「昨日……堺つてやつが、カノンちゃんに告白したみたいだぞ」

「は？…」

僕は、仁の衝撃的な発言に、思わず大きな声を出してしまった。
クラスのみんなは、僕の方に視線を送る。

「い、いや、なんでもないんで。あは、あはは。」

なんでもないわけがなかった。

堺先輩は、僕と話をした後、カノンに告白をしたらしい。
カノンがどんな返事をしたのかは分からないが、なんという急展開
だ。

僕は、事実を受け止め切れそうになかった。

カノンを再び見ると、カノンは、吉沢さんたちと昨日のことについて話していた。

その表情はやはり、いつものカノンではなかった。

今日の僕は、何事も集中してやることができなかつた。

授業中も清掃の時も、仁達と話していく時ですべし、僕はカノンのことが気になつた。

堺先輩の告白を受けて、カノンはどう返事をしたのだろうか。

堺先輩の想いは、本氣だった。

あの時、堺先輩と話して思つた。堺先輩は、カノンのことを本当に好きなんだ。

その想いは生半可なものじゃなく、真剣だった。

結局、全てにおいて集中することができず、『さくら』と放課後になつていた。

僕は、いつも通り、教室で部活動のための準備ことりかかる。

「……」

今ですから、僕はカノンのことでも頭がこいつぱこだつた。

髪の毛を短く切つたカノン。いつもど、どこか雰囲気の違つカノン

……

あんなに近くにいたカノンが、急に遠いところへ行つてしまつたみたいだつた。

「かあくんー」

「「つまつー。」

急にカノンの声がしたので、僕は驚いた。

カノンは、僕の驚いた様子を見て、くすつと笑った。

「そんなに、驚かなくとも良いのにー。」

「いや、普通にびっくりするのよ……といひで、部活はっ。」

カノンはつとめと頷き、下を向いた。

何かまことにでも言ってしまったんだろ？
僕がそんなことを思つていてると、カノンは再び僕の方を向いた。

「ちょっと……時間良い？」

珍しいカノンの誘いを、断るわけがなかつた。

僕たちは、この高校で一番景色の良い、屋上へと向かつた。

ドアを開けると、気持ちいい風が僕たちを出迎えてくれた。

なんか、同じようなことが前にもあつたような……

僕とカノンは、屋上から夕陽が沈んでいくのを眺めた。空は夕陽色に染まっており、とても幻想的だった。

「昨日は、おつかれさん。」

「え？」

カノンは、僕の方を見た。

カノンに見られると、どうしても緊張してしまつ自分がいた。だが、昨日言いそびれた事を、ちゃんと言わなこと……

「あと……おめでとう」

「あつがとうー。」

カノンは、笑顔で僕にそつと言った。

その笑顔は、優しく、とても癒される、いつものカノンの笑顔だつた。

この笑顔を見たとき、僕はどこか安心した気持ちになった。

僕とカノンは再び、屋上から校庭を眺める。

校庭では、すでに部活練習が始まっていた。

もちろんテニス部員も、準備体操をし、練習の準備を始めていた。僕は、それでも良かつた。練習のことよりも、カノンと一緒にいたかつた。

カノンと二人きりになつて、こうして話をしていたかつた。

「昨日ね……」

カノンは夕陽を見ながら、話し始めた。

「私、堺先輩に告白されたの」

「……」

カノンからその事を聞くと、なぜだか凄く切なくなつた。

やつぱり本当だつたんだと。

僕は、ショックを隠せなかつた。手や足が震え、今にでも泣きだしてしまひそうな感情になつた。

「凄く、嬉かつた。でも……」

「付き合ひつけやえよ」

僕は、カノンの話が終わる前に、心にでもない」とを言つていた。カノンが、堺先輩にどう返事をしたのかが、聞きたくなかったかもしぬれない。

「え……？」

驚いた表情で僕を見るカノン。

「そんなに、堺先輩の事が好きなら付き合ひれば良いんだが。」

「そんな……」

「髪を切つた」とも、いつもより妙にテンションが高いことも、全部、堺先輩に知れられたからだろう?」

「待つて。そんな、違うよ……」

僕は、なぜか感情的だつた。

カノンの言葉が全然聞こえなかつた。全て、僕の予想にしか過ぎないこと。僕が勝手に思つていたことを、カノンに言つていた。

「そりやそつだよな。堺先輩は、格好いいし、勉強もできるし、ピアノも上手だし。そんな男に告白されたら、嬉しいよな。」

カノンは黙つたまま下を向いていた。

素直に言えれば良いじゃないか。

堺先輩が好きだつて。

僕みたいな、どこにでもいるよつた男より、堺先輩のことが好きなんだつて。

「もういい。堺先輩と、どうぞお幸せ……」

パンツつという音と同時に、僕の左頬に痛みが走つた。そう、カノンが僕の左頬に平手打ちをしたのだ。

「つ……何する……」

僕は、カノンの方を向いた瞬間、それ以上何も言ひことができなかつた。

カノンは、泣いていた。

僕は今まで、カノンが泣いた表情を見たことがない。

いつも元気で、明るい笑顔のカノンしか僕は見たことがなかつた。だが、カノンは僕を見て泣いていたのだ。

その表情はとても印象的だつた。

僕を睨みつけるように……それでいて、とても悲しんでいる表情だつた。

「酷いよ……」

「……」

「ここの……酷すぎるよ……」

カノンはそう言い残し、この場を去つた。

僕は、なんて事を言つてしまつたんだ……。

カノンの本当の気持ちを聞くことなく、自分が勝手に思つたことを
カノンに押しつけただけ。

僕はカノンを泣かせてしまった。

カノンが好きだ?……何を馬鹿なことを言つてゐる。

僕にそんな権利はない。

カノンを傷つけてしまつた奴が、カノンを愛することなんて許され
やしないのだ。

僕は、左頬に手を添え、その場に立ち尽くしていた。

カノンはこの日以来、僕のことを“かあくん”とは、呼ばなくなつ
た。

それは、どんなに辛い虐めよりも、どんなに酷い罵倒よりも、され
てほしくないことだった。

P・16　「の想い届きませんか？」（後書き）

次回更新予定期：2月27日

僕とカノンの関係は、今も修復されることはなかつた。むしろ、日が経つにつれ、カノンはだんだん遠い存在となつてしていく。

もう、受験シーズンも後半戦に突入し、それが終われば卒業だ。僕とカノンとの間にできた溝を何とかしたくても、何もできない自分が、腹立しさを感じていた。

歯がゆさに耐えきれず、僕はある日曜日、「仁」の家に行つた。そこで、全てを「仁」に話した。

あの時、カノンにしてしまつたこと。カノンが泣いたこと……

助けが欲しかつたわけではない。ただ、話を聞いて欲しかつたのだ。
「仁」は、僕の話を最後まで聞いてくれた。

僕の話が終わると、「仁」は、少し間をおき、一言僕に言つた。

「楓は、このままでも良いのか？」

良いわけがなかつた。

ただ、どうしたら良いのか分からなかつた。

カノンは、本当に遠い存在となつてしまつている。

そうさせてしまつたのは、他でもない、僕の責任だつた。

勝手に僕が思い込んでいたことを、押しつけた。カノンの本当の気持ちを、聞こうとはしなかつた。

カノンを……信じることができなかつた……

そんな僕に、今さら、何ができるのだろうか。

僕は、仁の問いかけに答えることができなかつた。
そんな僕を仁は見て、ため息を一つした。

「俺は、どんなことがあろうと、楓の味方だ。」

「……」

「だから、楓がそつだつて決めたことなら、反対はしない。ただ……」

僕は、仁の顔を見る。

仁は、いつになく真剣な顔だった。

「後悔はするなよ？それだけは、言つておく。」

耳が痛かった。

仁の言葉は、まるで僕の本心を捉えているかのようだった。

今日、僕たちのクラスでは、席替えがあつた。
今日ほど、神様を憎んだ事は今までにないだろう。

僕の隣の席になつたのは、カノン。

今までの自分なら、嬉しくて嬉しくてたまらなかつただろう。

だが、今はどうだろうか。
僕の隣の席がカノンだということを知つた時、僕は少なからず嫌だと感じた。

それは、あの日のこと思い出してしまう。
そんな気がしたからだ。

だが、いつまでも、こんな関係は嫌だった。

仁が言つていたように、後悔はしたくない。なんとしてでも、カノンとまた一緒に笑い合い、話がしたかった。

「カノン、よろしく！」

僕は、自分が出せる勇気を最大限に振り絞り、隣の席にいるカノンに、話しかけた。

「よろしくね、楓くん！」

カノンは笑顔で、そう返事をした。

僕は、カノンからその言葉を聞いたとき、何も話すことができなくなっていた。

“楓くん”

……そう。カノンは、あの日以来、僕のことを“楓くん”と言つようになつた。

その言葉を聞くたびに、僕はとても辛かつた。

“かあくん”

……僕とカノンの思い出がつまつた言葉だった。

だが、その思い出も、全て崩れ去ってしまったのかもしれない。

僕が、全てを壊してしまった……

隣の席にカノンがいても、僕とカノンの距離は、縮まることはなかった。

日が経つ流れ、話すこと、ましてや挨拶でさえ、することがなくなつた。

そんな日々が、僕は耐えられなくなつた。

授業中も、部活の時も、仁達と休み時間に話している時ですら、カ

ノンの事で悩み、考えることが、辛くて辛くてたまらなかつた。

もう、我慢の限界だつた。

僕とカノンの距離はどうやっても近づけることはできない。
もつ、こんなに辛くなるのは嫌だ……

僕は、決めた。

もひ、忘れよう……何もかも。

そうすれば、こんなに考えることも、悩むことだつてないのだから。カノンと一緒に過ごした日々も、カノンとの思い出も、全て忘れよう。

カノンの事が好きだつたことも。カノンの笑顔も……カノンが泣いたことも……

忘れるのは、とても辛い事かもしれない。苦しい事かもしれない。でも、忘れてしまえば、あとは大丈夫。

そう決めた日から、僕は何かに没頭するようになつた。

部活の練習も積極的に参加するようになつたし、受験勉強も毎日するようになつた。

将来どうしたいかなんて、全然決まっていなかつたし、自分がこの先どうなるかなんて、想像もしなかつた。

ただただ、カノンのことを忘れるために、血反吐を吐くぐらい何かに没頭し続けた。

気づけば、僕たちは卒業式の日を迎えていた。
天気は、見事なまでの晴れであった。お天道様も、僕たちを元気に
見届けてくれるらしい。

卒業式は、お決まりの体育館で行われる。

なんとも言えない独特な緊張感の中、卒業式はついに始まった。

眠たくなるような、先生達のお別れの言葉。

今回で卒業式は3回やっているが、いつも思ひ。

この先生達のお別れの言葉といつのは、じつしこんなにも長いものなのだろうかと。

しかも、事前に書いた紙を見ながら読んでいるだけじゃないか。

だったら、その紙を僕たちによこせと。あとで、たっぷり読んであげるからだ。

先生の挨拶も終わり、校歌と国歌斉唱が始まる。

僕の隣で元気よく歌う真之介。

やはり、最後の最後まで真之介はしてくれる男だな。

もちろん、僕と「は、口パクだった。どうも、今日は声の調子が悪いらしい。

そして、卒業証書授与が始まった。

この時ばかりは、緊張が一気に高ぶった。

名前を呼ばれた生徒は、席を立ち、卒業証書を貰いに行く。
考えただけで、とてつもない緊張感に襲われる。
僕たちのクラスはAクラスなので、出番も近い。

生睡を飲みながら、僕は自分の出番が来るのを待った。

いつちーが、マイクを持ち、紙を見る。

かなりの度胸があるいつちーですら、緊張している様子だった。
一呼吸置き、Aクラスの生徒の名を読み始めた。

「出席番号2。内山信輝」

「は、は、は、はいつ！…」

メガネを異常なまでに直し、席を立った。

足は震え、今にでも倒れそうな様子だ。

いつちーも、心配そうに内山の事を見ていた。

内山信輝。

修学旅行でしか話したことはなかつたけど、とにかく印象的だった。
目的のカードを見つける速度が尋常じゃなく早く、カードの話になると、右に出るものはいない。

確かに、オタクっぽくて、よく分からなかつた奴だったけど、でも、根は良い人なんだと、僕は信じている。

「出席番号1-1。岡田真之介」

「はいっ！…！」

声を裏返しながら、席を立つ真之介。
いつちーも、真之介の声を聞くと、一瞬だが笑顔を見せていた。

岡田真之介。

こいつは、とにかく「元気な奴だ。
自分のことよりも、まず相手のことを少しでも知りたいと、相手の
話をよく聞く。

しかも、いくら嫌われても、いくら悪口を言われようと、真之介
はめげない。

だからなのか、真之介の周りにはいつも人が多く集まる。
結局、バイトの面接は不合格で終わつたけど、きっと真之介なら、
いつかはバイト、見つかるさ。

「出席番号115。田端洋平」

「はい」

冷静な返事で席を立つ田端。

田端洋平。

性格は、とても真面目で物静かだ。

部活は、僕と同じくテニス部であり、一緒にダブルスを組むと、本
当に頼りになる奴だった。

僕たちの引退試合では、田端の活躍により、準優勝を飾ることがで
きた。

将来は、会計士になりたいと、経済関係の大学に入学することにな
つた。

またいつか一緒にテニスをしよう。その時は、シングルスで勝負しよう。

「出席番号一七。内藤楓」

僕の出番だ。

名前を呼ばれた瞬間、もの凄い緊張感が僕を襲つた。

今までにない、かなりの緊張感だ。腰が今にでも抜けそうになる。

声を裏返さないように気を付けて返事をし、席を立ち、卒業証書を受け取りに行つた。

「はい、おめでとう」

校長先生の、今まで見たこともない笑顔が、なんとも言えず素敵だつた。

僕は、卒業証書を受け取り、一度大きく頭を下げ、自分の席へと戻つた。

「出席番号1-8。根本遙」

「……」

返事なしですか！？

いや、彼女なりに返事はしたのだらう。
いつづーは、根本さんの姿を確認すると、呼吸を小さく一つした。

根本遙。

とても、掴めない性格の持ち主。

根本さんは修学旅行の時に話したことがあるが、いつも淡泊な返事しか、返つてこなかつた。

ある大学に入学することになつたのだが、果たして大丈夫だらうか
……いや、心配ないな。

お決まりの「問題ありません」で、全では上手くこくますた。

「出席番号2-2。根本仁」

「つこつす」

仁は、軽快な返事をし、席を立つた。
さすがは、仁。と言つたところか。

宮本仁。

僕の親友であり、よきライバルだ。
ルックスも素晴らしいものをもつてゐるが、とにかく運動神経が人
間の域を超えてゐる。

他人を偏見せず、優しく接することが、当たり前かのようにできる。
友達のことを第一に考え、絆というものを凄く大切にする。
仁……、僕たちは、いつまでも親友だからな。

「出席番号25。山下カノン」

「出席番号26。山本桜」

山本桜。

正直、全然話したことがなかつた。

カノンと同じ部活だつたのに、音楽コンクールに参加できたのがカ
ノンだけだったことに対し、とても悔しがつていた。

それでも、カノンを一生懸命応援する姿は、とても格好良かつた。

話によると、音楽系の専門学校で自分の腕を磨くらしい。せひ、
山本さんだったら大丈夫さ。

「出席番号28。吉沢愛莉」

「はいー。」

吉沢さんは、力のある元気な声で返事をした。

吉沢愛莉。

吉沢さんは、図書室で偶然出会った。

とても社交的で、人情味が溢れる人。それに、しつかり者で、部長と生徒会長を務めた。

まるで男のような性格からか、女子からも男子からも人気者だった。僕も、吉沢さんに出会い、話すことができ、とても良かつたと思っている。

お互い、良き文学生でいられるように……いや、なんでもあります。

いつして、卒業証書は無事に終わり、僕たちの卒業式は終わりを迎

えた。

みんなは、目に涙を浮かべ、この日が終わるのを惜しんでいた。僕もまた、この卒業式といつ日を、複雑な想いで見届けていた。

僕は、卒業式が終わり、みんなと別れの挨拶をしたあと、ある所へ向かっていた。

“ 3 - A ”

そこは、僕たちが今まで過いじてきた教室。思い出がたくさん詰まつた教室だった。

教室に到着し、教室入り口の扉を開ける。

もちろん、教室の中には、誰もいなかった。

僕は、教室の中へ入ると、自分の席へ向かつた。

そこから、教室全体を見渡すように見る。

落書き一つない、綺麗になつた黒板。きちんと並べられた机。いつちーのいない教壇……

昨日まで、僕たちはここで、友達と話し、勉強し、騒いでいたのに……何事もなかつたかのような静けさだ……

僕は目を瞑る。

右も左も分からぬ高校1年生の時、初めて友達になつたのは、仁だった。

仁は、本当にスポーツが好きで、毎日スポーツの話を聞かされたつけな……それでも、楽しかつた。

そして、翔太に出会つた。本当に、馬鹿でウザくて、どうしようもない奴だったけど、どうしようもなく、良い奴だった。

高校2年生になると、吉沢さんや内山に出会い、修学旅行や体育祭などをした。

どれも、今思うと、本当に幸せな日々だつたんだと思うことができる。

みんなに会えて、本当に良かつた。

みんなと共に過ごした時間は、僕にとって、大切な大切な思い出だ

……

瞑つていた目を開け、僕はふと、カノンが座つていた席に目を向ける。

もちろん、そこにはカノンの姿はなかつた。

僕は、カノンのことを忘れようと決めた日から、今日という日まで、がむしゃらに毎日を走り続けた。

受験勉強も、部活も……バイトだつてした。

別に目的があつたわけじゃない。ただ、カノンのことを考えたくな
いと思つたからだ。

だが、今でも、僕はカノンのことが忘れられずにいる。
元氣で優しい笑顔……僕に一度だけ見せた、涙……カノンと一緒に
過ごしてきた日々……

忘れる事なんて、できるはずがなかつた。

でも、もうカノンに会うことは、この先ないだらつ……もし会つた
としても、笑顔で話すことはできない……

僕とカノンの関係は、結局、修復されることはなかつたのだから……

僕は、教壇の前に向かい、教室全体を見渡すよつて立つた。

「3・A、内藤楓。今まで、ありがとうございました。」

誰もいない教室で、僕は深々とお辞儀をし、最後の別れの挨拶をし
た。

卒業式から一週間後、僕や仁含め、元Aクラスだけで“謝恩会”が行われることになった。
今まで三年間、共に過ごしてきたクラスメイトで、お別れ会をするのだ。

この謝恩会を企画したのは、吉沢さんだつた。

卒業式の日に、お別れをするのも寂しいだろうからつて、卒業式の前日に、クラスのみんなに誘いを入れたのだ。
さすがは、元生徒会長。なんて気が利く人なんだろう。

場所は、僕たちの高校からそう遠くない場所にある、中華料理屋になつた。

少し料理の値段が高いのがネックだが、味も盛りつけやボリュームも満足がいくもので、お別れ会をするのにはもつてこいの場所だ。

当日、僕は最近買ったばかりのお気に入りの服を着て、謝恩会の会

場へ向かつた。

謝恩会に参加した人数は、吉沢さんの予想を遙かに上回った。

中には風邪や仕事があつていけない人もいたが、ほとんどのメンバーが集まつた。

クラスメイトたちは、1週間ぶりに会う仲間を目の前にして、高校の思い出話で盛り上がつていた。

僕も、仁や真之介たちと、修学旅行の話や、翔太との思い出話で盛り上がつていた。

1週間ぶりとは言え、どこかとても懐かしい感じがした。

「そついえば、カノンちゃん、いなくないか？」

仁が辺りを見回し、僕に尋ねるかのように言った。

僕も、辺りを見回したが、カノンの姿がそこにはなかつた。

「どうしたんでしょうか……風邪でも引いてしまつたのでしょうか
ね……」

真之介も心配している表情をしながら、カノンを探していた。

「あつと、寝坊でもしてるんだろ」

僕は、笑顔でそう言ってみせたが、とても嫌な予感がした。
なぜだから分からぬいが、とても嫌な予感だった。

- 11 : 40 -

謝恩会が始まって一時間が経った。

それでも、カノンが現れることはなかった。

僕の嫌な予感は、次第に強くなつていった。

「ちよっと、こめん。席外すわ」

僕は、「仁と真之介との会話を一時止めると、企画者である吉沢さんの元へと向かった。

「お、楓くんじゃない。どうしたの？」

吉沢さんは、僕の呼びかけに気づくと、友達の山本さんと喋るのを一時中断し、僕の方を向いた。

「あのせ。カノンは……どうしたの？」

僕が吉沢さんに尋ねると、吉沢さんは、意外なリアクションをとった。

「えー？ 楓くんに、言つてなかつたんだ！？」

「どういふことだ……

何がなんだか分からなかつた。

「言つてなかつたつて、何を？」

僕は、少し感情的になりながら、吉沢さんに尋ねた。

「あ、うん……今日は、カノン謝恩会に来ないよ」
「どうして？」

「今日……実家に帰るんだつてさ」

！？

僕は驚いた。

そんなこと、カノンから一度も聞かされたことはなかつたからだ。
カノンは、今日、実家に帰つてしまつ……

カノンの実家は、この町からずつと遠いところにある。
ということは、次、カノンといつ会えるのか分からな……

「やつか……ありがと」

いや、別にどうでも良いことじやないか。

逆に、これで良い。

カノンと今さら会つたところで、僕に何ができる?

カノンを傷つけ、涙を流させてしまった。

そんな僕が、なぜ今さらカノンに会いたいと言える「」ことができる?

「楓くん」

「……?」

吉沢さんは、少し考えるようすに間をあけ、何かを決心したかのように僕の方を向いた。

「楓くんとカノンの事だったから、私は今まで何も言わなかつたし、
これからも言いつもりはなかつた……」

「え……」

急に何を……？

僕とカノンの事……？

僕は、吉沢さんの一言一句を、聞き逃さないよう、しつかりと耳を傾けた。

「実はね……」

僕は、吉沢さんの話が終わると同時に、この謝恩会の会場から飛び出していた。

吉沢さんが話していたこと……それは、どれも信じられるものではなかった。

カノンは、堺先輩からの告白を断つたこと。

あの日、カノンが涙を見せた日。カノンは、僕に告白をしようとしたこと。

髪の毛を切ったのは、自分の気持ちに正直になることを決めたからだということ。

吉沢さんに聞かされて、ようやく分かったのだ。

遅かった。遅すぎた。

カノンと、あれだけ一緒にいたのに、僕はカノンのことを何も分かつていなかつた。

あんなに近くにいたのに、僕は、カノンのことを何も分からうとしていなかつた。

僕は駐輪場に止めてあつた自転車を拝借すると、急いで駅の方へと向かつた。

全力で自転車を動かした。

カノンが乗る電車の出発時刻は12時20分。と、吉沢さんが言つていた。

もう、30分もなかつた。

この場所からどれだけ飛ばしても、30分以上かかることぐらい、知つてゐる。

でも、諦めたくなかつた。諦めてはいけないと思つたのだ。

僕はカノンの事が、好きだつた。

でも、カノンに一度も本当のことを言つことが、できなかつた。いや、言えなかつた。

なぜか?……恐かつたのだ。

自分が、カノンに本当のことを伝えて、カノンがなんて言つんだらうつて。

結果や後先のことばかり考えてしまつていた。そうやって、ずっと自分の気持ちから逃げていた。

でも、カノンは違かつた。

本当の事を、自分の気持ちを正直に言おうとしていたんだ。なのに、僕はカノンの気持ちを踏みにじつてしまつた。

僕が勝手に思い込んでいたことを、カノンに押しつけた。

それが、カノンにとつてどれだけ悲しかつことなのか、どれだけ傷つくものだつたのか……

途中、大きな石につまずいた。

もの凄いスピードを出していたこともあり、僕は予想以上に吹き飛ばされた。

受け身なんてとつたことがなかつたので、僕は激しく地面に叩きつけられ、全身からは、今まで経験したことのない痛みが走る。

「くそつ……」

僕は、痛みを堪え、必死に立ち上がつた。
昨日、買つたばかりの服は、もうボロボロになつていた。
そんなことは、どうでも良かつた。
とにかく、駅に一秒でも早く行かなれば。

僕は、自転車を取りに行つた。

転がつていた自転車を見ると、自転車は大破していた。
ハンドルは大きく曲がり、タイヤはパンクしていた。
僕は自転車に乗るのを諦め、全力で走ることにした。

走ろうと、地面に足を置くと、とてつもない痛みが走る。
それでも僕は、全力で走つた。
どれだけ痛くても、どれだけ疲れようと、止まつとは決してしなかった。

もう悩まないつて決めた？もう苦しまないつて決めた？

一番悩んでいたのは誰だ。

一番苦しんでいたのは誰だ。

僕じゃない。カノンなのに……

部活で鍛えていたとはいえ、疲労は限界に近かつた。僕の足は、悲鳴をあげていた。
だが、もうすぐ。もうすぐで、駅に到着する。
少しづつ、駅の入り口が見えてきた。

カノン……

勝手なのは分かつてゐる。

でも、もう一度だけ。もう一度だけ、僕と会ってくれるなら……

人混みをかき分け、駅の入り口へ入る。

改札を抜けると、いくつかのゲートがあつた。

カノンが乗るゲートは、吉沢さんの話だと4ゲート。

僕は、4ゲートを探し、見つけると、階段を全力で駆け上がった。
階段を上るたびに、ズキズキと痛みが足から脳に伝わり、吐き気す

ら感じられる。

だが、絶対に止まりたくはなかった。

もう一度だけ、僕と会ってくれるなら、カノンに謝りたい。
そして……カノンに、僕の想いを伝えたい。

もし、それがカノンに伝わらなくても、カノンが僕にじょりとして
くれたみたいに……

自分の気持ちを……

ありのままの自分を……

もつすぐで、この長い長い階段を上り終える。
この先にはカノンがいる。
カノンが待っているんだ……

「そん……な……」

僕が、階段を上り終えた時にはもう、カノンが乗った電車は、発車していた。

間に合わなかつた……

カノンが乗つた電車は、無情にも、遠く見えないとこりへ行つてしまつたのだつた。

そうだよな……間に合はずがなにじやないか。

恋愛物語じやあるまいし、電車は都合の良い時間まで待つてはくれない……

僕は、その場に膝をついた。

知らず知らずのうちに、僕の目からは冷たいものが溢れていた。

P・17 わよひなら（後書き）

次回、ついに最終回。

最終更新予定日：2月29日

時間が経つのは早いもので、あれから丁度半月が経つた。

僕たちは、それぞれ違う道を歩んだ。

岡田真之介と内山信輝は、同じ大学に入学したみたいだ。

その大学で、また新たな仲間を作り、その仲間達と漫画研究部を設立し、キャンパスライフをエンジョイしているようだ。

もちろん、部長は真之介。あいつの事だから、きっとたくさん仲間に囲まれ、楽しくやっているだろう。

内山も真之介がいれば、恐らく大丈夫だな。

カードについて熱く語れる友達ができるのを、僕は祈っているよ。

吉沢愛莉は、某有名大学に入学した。

そこで吉沢さんは、様々な国の語学を学びたいそうだ。

日本だけではなく、色んな国の言葉を学び、コミコニケーションをとりたいのだという。

吉沢さんらしい考え方だ。

もし、今度会うときは、英語を一つ、僕にも教えてくれ。最高の発音で言ってやるうじやないか。

宮本仁は、スポーツで有名な大学に入学した。

高校から始めた陸上を極めるために、日々努力しているみたいだ。仁のことだ。きっと、将来はプロの陸上選手として活躍するだろう。親友として、ライバルとして、僕は応援している。

秋山翔太と、最近連絡をとった。

僕は、やっと翔太に、メールを送れたのだ。

翔太は、ちゃんと就職できたみたいだ。料理人の卵として、毎日下積み生活を送っているのだという。

忙しくてなかなか地元に帰れないと、愚痴をこぼしていた。

ゆっくりで良いさ。落ち着いたら、地元に戻つてくれれば良い。

僕たちは、どれだけ離れていても親友なんだから…

一流の料理人になったとき、僕と仁に、何か料理を作つてくれ。期待しているからな。

そして僕もまた、自分の道を歩んでいた。

高校三年生で、必死に勉強をした結果、なんとか第一志望の大学に入学することができた。

前々から、工業分野に興味があつたため、工業科の大学に入学した。もちろん、大学の講義は、今までに勉強したことがないものばかりだったので、とても難しい内容だった。

授業時間も、50分から90分に変わり、集中力が今まで以上に必要になつた。

だが、やり甲斐はあつた。

高校の時のように、やりたくないことをやるのではなく、自分がやりたいことを学び、知識を得るのだから。

毎日が充実した日々だった。

友達もつくることができたし、成績も今のところ良い。

高校の時のように、この先が不安で恐いなんて気持ちは、今の自分にはこれっぽっちもなかつた。

「まざい、遅刻する！」

今日は、いつも以上に寝過ぎたみたいだつた。
僕は急いで大学に行く準備をし、苺牛乳とパンを持つと、玄関を出
て、車庫に向かい、車庫から自転車を取りだし、家を後にした。

僕が通う大学は、自宅から通えるところにある。
もちろん、電車を使わなければ行けないのだが。
それでも、自宅から通えるなんて、自分にとっては好都合だつた。
やっぱり、自宅が一番落ち着ける場所だしね。

駅に到着した僕は、駐輪場に自転車を置き、駅の入り口へと急いだ。
次の電車の発車時刻は8時30分。

僕は、現在の時刻を確認した。

なんとか、間に合いそうだ。

定期券を買っているので、切符を買ひなへんことほしくて良い。僕は、改札を出て2番ゲートへ向かった。そこに待っていたのは、長い階段だった。

この階段を上れば、僕が通う、大学付近の駅に止まる電車が待っている。

僕は、急いで階段を上った。

急ぎすぎたためか、僕は鞄を落としてしまった。

しかも、追い打ちをかけるかのように、鞄から中身が出てしまったのだ。

なんてこつた。

僕は、慌てながら鞄からあふれ出た教科書や筆記用具を鞄の中に戻すと、再び階段を上り始めた。

汽笛が鳴る。

僕が、階段を上りきった時には、8時30分の電車は扉を閉め、発車していた後だった。

僕は、走ったために上昇した心拍数を下げるため、深呼吸を一度すると、次の電車が来るのは何時なのか確認した。

- 8 : 50 -

ここから大学の駅まで、電車で20分はかかる。
そこから大学まで徒歩10分だ。

僕が受ける講義の開始時間は9時10分。間に合ひはずがなかつた。

「なんだかなあ……」

仕方がない。遅れてでも良いから行くか。

僕はため息を一つし、次の電車が来るのを待つた。
ふと、空を見上げると、空は雲一つない天気だった。
日の光が、僕のいるホームを照らす。

僕は、自分の顔に左手を翳した。

とても眩しい……だが、11月という寒くなる季節。日の光はとて
も温かいものだった。

「かあくん！」

ほんのかすかな声だ。聞き間違いかもしれない、それぐらい小さな
声がしたようを感じた。

“かあくん”と、僕のことを呼ぶ人は、この世で一人しかいない。
だが、“彼女”は、もうここにはいない。遠く、離れた場所へ行つ
てしまつた。

だから、聞き間違いだつてことぐらい、分かつていた。

それでも、僕は後ろを振り返つた。
もしかしたら……そう、願つて……

僕は、その場に膝をつき、泣いた。

僕の目からは、自分で驚くほどの涙が溢れていた。

遅かった……全てが遅かった……

カノンの想いを知ったのも。

僕が自分の、本当の気持ちに気づいたことも。

そして、カノンに本当のことを言おうと決めたことも。

全てが遅かった……

カノンに気持ちを伝えられないまま、カノンは行ってしまった。
チャンスは、たくさんあった。

カノンに気持ちを伝えられるチャンスは、数え切れないほどあったのに。

僕は、チャンスがなくなつて、初めて気づいた。

もつと早く、自分の気持ちをカノンに言つていればと。あの時、力

ノンの気持ちをしつかり最後まで聞いていればと……

だが後悔しても、カノンはもう戻つてこない。
取り返しのつかないことをしてしまった……

「楓……くん？」

！？

この声は……

僕は、足の痛みをぐつと我慢すると、無理矢理立ち上がり、辺りを確認する。

辺りには、次の電車が来るのを待つ客がいた。

そして、その中に、ある一人の女性が僕の方を見ていた。

肌は白く、髪の毛はセミロングで。

まるで人形のように可愛い女性だった。

僕のよく知る人だった。

いつも、優しい笑顔を見てくれる人だった。
僕の初めての友達になってくれた人だった。
涙を流し、僕に平手打ちをした人だった。

「カノン……」

そう、僕の事に気づき、僕の名を呼んだのは山下カノンだった。
でも、どうして……

吉沢さんの話だと、さつき出発した電車に乗る予定ではなかつたのか。

「さつきの電車に乗るはずだつたんだよね?」

僕がそう言つと、カノンは首を傾げながら答えた。

「ううん。次の電車だよ……?」

なるほど……

吉沢さんの奴め……

僕は、カノンの話で把握することができた。

吉沢さんは、敢えて僕を急がせるために、一つ早い電車の出発時間

を教えたのだ。

なんて憎いことをしてくれる……

「楓くん、大丈夫？」

カノンは僕のボロボロになつた姿を見て、心配そうに言った。
だが、今でもカノンは僕のことを“楓くん”と呼んでいた。
そりやそうだ。

僕は、カノンを傷つけてしまったのだから……当然の事だ……

「カノン、話がある」

「え？ ちよ、ちよっと……」

僕は、カノンの腕を持ち、駅のホームでも人が少ない場所へ移動した。

なるべく人がいないところじゃないと、緊張して、自分の気持ちをうまく伝えることができないと思ったからだ。

この辺りで良いか……

僕は、なるべく人がいない所に行くと、カノンの腕を放し、カノンをじっと見た。

カノンは、僕から視線を逸らし、下を向いていた。
それでも僕は、カノンから目を逸らさなかつた。

もう、逃げないって決めたから……

僕は、ぐっと手に力を入れた。

いざ、カノンに自分の気持ちを伝えようとすると、緊張してしまつ。

僕は、なんて臆病者なんだ……

それでもカノンに言わなければ……自分の気持ちを。

本当の気持ちを言って、どう思われるかなんて分からぬ。

だが、言わなければ駄目だと、そう思ったのだ。

これが、ラストチャンス。これが僕に残された最後のチャンスなん
だ……

「カノンがさ、ある雨の日。図書室で僕に質問をしたのを覚えてる
?」

僕の問いかけに答えることもなく、カノンは黙り、下を向いていた。

「あの時、僕は何も答えることができなかつた。いや、答えられなかつた……」

「……」

「カノンは、いつ言つたよね。あの頃に戻りたいって……」

そう、僕たちが高校2年生になつたあの雨の日の図書室で、カノンは僕に一つの質問をした。

“かあくんは、もしあの頃に戻れるなら、戻りたい?”

と。

何も言えないでいる僕を見て、カノンはこう答えた。

“私は、あの頃に戻りたい……”

と。

あの意味が分からなかつた。なぜ、カノンは、あの頃に戻りたいのだろうかと。

僕は、小学生の頃、散々な虐めを受けていた。なぜ、その頃に戻らなければならぬのだろうかと。

カノンの言つていることが分からなかつた。

「僕も、やつと答えが見つかったよ」

でも、今ならその意味が少し……少しだけど分かる。だから、僕もちゃんとあの時の質問の答えをしたい。

「僕は……あの頃に戻りたくはない」

僕がそう言つと、カノンは一瞬だけ、僕の方を見た。だが、僕と田線が合つて、再び田を逸らし、下を向いた。

「カノンと一緒に遊んだこと、一緒に話したこと、一緒に過ごした時間……あの頃の思い出が、本当に忘れられないものなんだ」

「……じゃあ、なぜ？」

カノンは、ようやく口を開いた。

その声は、今にでも途切れそうな、重く悲しい声だった。

「だからいやそれ……」

「……」

「あの頃に戻つて、何かをやり直したい事なんて、僕には何もない。幸せだったと思えるから……」

そう。

あの頃に戻つて何かをやり直さなくとも、十分、幸せな日々だった。カノンと一緒に笑つたり、一緒に遊んだり、時には喧嘩だつてしたことわざつた。

そんな日々が、僕は幸せだった。

それだけで、僕は虐められていても、辛くなんて感じなかつたし、毎日が幸せだつた。

だから、あの頃に戻つて、やり直すことは何もないんだ。

僕の大切な思い出として、心の中に在り続ければ……戻る必要なんてない。

「そんなの……」

カノンは、僕を睨みつけるように見た。

「そんなの、綺麗事だよ！」

カノンが僕に初めて見せる顔だつた。

感情的になるカノン……カノンの表情はまるで、僕に敵意があるようなものにすら感じられた。

僕は、驚き、言葉につまつた。

そんな僕を見て、カノンは、少し間をおき、重い口を開けた。

「小学生の時……私が学校を休んだ月曜日のこと……覚えてる?」

「ああ……」

もちろん、覚えているさ。

あの日は、とても強い雨が降った月曜日だった。

その次の日、カノンは学校に来て、学校から去ることをクラスメイトに告げた。

「あの日は、凄い強い雨だったよね……でもね……私は学校に行つたんだよ?」

僕は、耳を疑つた。

カノンが月曜日に学校に行つた……?

そんなこと、全然分からなかつた。

「放課後に、楓くんを待つてたの。いつ、楓くん来るんだろうって

……」

「嘘だろ……」

「いつ、どこで待っていたんだ……僕の帰宅道と、カノンの帰宅道は、途中まで一緒なはず。

もし、カノンの言つてることが本当なら、僕はカノンに会つてこたはづだつた。

だが、どう考へてもカノンとは会つていなかつた。なぜだ……

僕は、記憶を辿つた。

眠つていた記憶を呼び覚ますかのように、僕は頭をフル回転させた。

……そうか。……思い出した……

その日は、強い雨が降つていたこともあり、僕は親に連絡を取り、車で家に帰つたのだ。

どおりで、カノンを見かけることすら、できなかつたはずだ。

「私、その日ね……楓くんに、伝えたいことがあつたんだよ?」

カノンは、どこか寂しい表情で僕を見つめた。
カノンの寂しい表情を見るだけで、僕の心は締め付けられるようになつた。苦しかつた。

「引っ越してしまう」とも……楓くんの事が……好きだつてことも

「……」

！？

そんな……

カノンの話を聞いた瞬間、僕の体は小刻みに震え始めた。

カノンは、一度だけじゃなく、一度も僕に告白しようとしていた。
それなのに僕は……

「でも、楓くんは来なかつた……。私の気持ちは……届かなかつた
の」

カノンは涙を流していた。

それでも、僕のことを睨むような目で見ていた。

その表情がとても、切なかつた……悲しかつた……

僕は、自分自身を憎んだ。

僕は、カノンの気持ちを一度も踏みにじつてしまつたんだ……
最後の別れの日ですら、僕はカノンと喋るうとはしなかつた。

“さよなら”と言つのが恐くて……

“ありがとう”と言つてしまえば、カノンが学校から去つていくのを認めてしまう気がして……

僕は、それが恐くて逃げていた。

カノンは、逃げずに、自分の気持ちと向き合つていたのに。僕と向き合おうとしてくれていたのに……

「かあくんは、幸せだったのかもしれない……でも、私は……」

カノンは、言葉に詰まり、下を向いた。

カノンが立つっていた地面は、カノンの涙の雪で濡れていた。

あの頃に戻つて、ちゃんと気持ちを伝えたいと、カノンは思つていたんだ……

僕は、それなのに“あの頃に、戻りたくない”と、平氣で言つてしまつた。

もちろん、カノンの気持ちを理解した上で、言つたつもりだった。だが、やはり、僕は何もカノンのことを……カノンの気持ちを分かつていなかつた。

「……僕は、今まで、カノンのことを、誰よりも知つていると
思つてた」

小学生から、カノンとは友達で。

カノンと友達になつてから、僕は、ほとんどカノンと一緒に行動をしていた。

休み時間は一緒に遊び、放課後は一緒に帰り……だから、僕は、カノンのことをたくさん知っていると思っていた。

知らない事なんてないと、そう思うぐらい、カノンのことは知っているつもりだつた。

「でも、僕は何も分かつてなかつた。分かろうとしてなかつた……」

でも、それは勘違いだつたんだ。

僕は、カノンのことを何一つ理解してはいなかつた。分かつてはいなかつた。

「カノンと一緒にいる時間は、たくさんあつたのに……カノンがこんなに近くにいたのに……僕は、カノンのことを分かつていなかつた……」

カノンと一緒にいる時間は、誰よりも多くあつたはずなのに、僕は何も分かつていなかつた……

「僕の好きな人が、悩み、苦しんでいたのに……僕は、気づいてあげられなかつた。それどころか、自分の気持ちに嘘をついて、逃げていたんだ」

僕は、カノンの笑顔しか見てなかつた。

カノンは、いっぱいいっぱい悩んでいたのに……それでも、笑顔を僕に見せていたつてことすら、僕は気づかなかつた。

ただ、カノンの笑顔を見ているだけで良いと思つていたんだ。だから、カノンの本当の気持ちを理解することもできなかつた。

「そして、勝手に焦り、自分の勝手な思いこみを無理矢理押しつけ、好きな人を……傷つけてしまった」

自分の気持ちに嘘を付き、カノンに本当の事を言えないでいる時、堺先輩が現れた。

堺先輩は、素直に自分の気持ちを認め、カノンに告白した。

僕は、焦つた。自分が情けなかつた。

挙げ句の果てには、カノンを傷つけさせてしまう結果となつてしまつた。

「それでも、謝ることも、本当の気持ちを伝えることだって、僕はしなかつた。」

明日やれば良いさ。

明日があると、僕は、それでもカノンに本当の事を言えることがで
きなかつた。

謝ることも、好きだつていう言葉も……

「恐かつた……好きな人に、僕の本当の気持ちを伝えてしまうこと
が……恐かつたんだ。」

結果のことばかり考え、僕は逃げていたんだ。
本当に辛い思いをしたのはカノンだったのに、僕は自分が一番辛い
思いをしていると思っていた。

「臆病者だよな……最低な奴だよな……」

僕は、感情的になってしまったみたいで、言葉が出なかつた。
でも、言わなきゃいけないんだ。

どんなことがあっても……カノンに云えなきやいけない。

「カノン……」

カノンは、涙を流しながら、僕の方を向いた。

「謝つて済む」とじゃないのは、十分承知さ。それでも、言わせて
欲しい……

僕の本当の気持ちを込めて、僕はカノンに言った。

「辛い思いばかりさせて、ごめん……」

「……」

カノンから田を逸らすことなく、僕は力強く言った。

「カノンのことが、好きです。」

「かえで……くん……」

まだ、言い足りない気がしてならなかつた。

もっともっとと、カノンに自分の想いをぶつけたい。

人の目なんて気にせず、僕は大きな声で言つた。
恥ずかしさなんて微塵もなかつた。

「カノンのことが、好きで好きで、どうしようもないぐらい、好き
です！」

僕の気持ちを、カノンに言えた瞬間だつた。

結果なんて、どうでも良かつた。

もし、カノンに、僕の気持ちが伝わらなくとも……届かなかつたと
しても……

カノンには、ちゃんと言いたかった。

誰よりもカノンのことが好きだと。誰よりもカノンのことを愛して
いると。

泣きやんでいたカノンの顔は、再び涙でいつぱいになっていた。

僕は戸惑つた。

また、カノンのことを泣かせてしまったのか……
また、カノンに傷をつけてしまったのかと……

カノンは、あははっと笑い、涙を拭いてみせた。

その笑顔は、あの頃の……いつもの、カノンの優しい笑顔だった。
僕は、カノンのその表情を見たとき、どこか安心感を感じていた。
久しぶりに、カノンの温かい笑顔を見れたから……

「かあくんつてさ……」

「？」

カノンは、駅のホームから見える空を見上げながら、僕に語りかけ
るよつこに言った。

「ほんとーに、人見知りが激しくて、冷たい態度しかとれなくて、
友達いなくて、虜められっ子で……」

「おま……」

「でもね……かあくんは、逃げなかつたよね」

「え……？」

カノンは、再び僕の方に顔を向ける。
その表情は、まるで太……

「かあくんは、私にとつて太陽だつたんだよ?」

「何言つてんだよ……僕なんて……」

カノンは、うつむきと首を横にふった。

「かあくんの通つ高校に転校してきて、私は本当に嬉しかった……」

カノン……

カノンも、そんな風に想つていてくれたのか……

「自分のことは、消極的なクセに、友達のことになると熱くなつて……でも、空回りして……」

「空回りは余計だつての」

僕が、的確なツッコミを入れる。カノンはくすつと笑つた。

「でも、私は、そんなかあくんが、好きなんだ……」

「え……」

僕の鼓動は、急激に早くなつた。

カノンは、僕のことをじっと見つめる。

こんなに、カノンのことを愛おしく感じたのは、初めてかも知れない。

それぐらい、僕はカノンのことが好きだつたんだと、今さらながら思った。

「かあくん……好きだよ……」

すつと、カノンは僕に近寄り、顔を近づけた。

僕たちのいる駅のホームに、電車が通過した。

僕の唇に、カノンの唇が触れていた。

カノンの唇は、とても柔らかく、とても甘かつた。いつまでも、こうしていたかった。

僕は、カノンの事をぎゅっと抱きしめた。
この手を離したくなかった。

この手を離したくなかった。

カノン……僕は、カノンの「」とか好きだ。

カバンの金語が好きだ。

が、
海がせやしない。
カリシを一生守あんざ。

卷之三

- - - - -

やはり、聞き間違いだつたみたいだ。
そこに彼女の……カノンの姿はなかつた。

電車が来た。

電車の扉が開き、僕は、その電車に乗った。

それでも、声のする方へと、僕は目を向けていた。

学校に向かう学生や、会社に向かう社会人。

様々な人たちが行き交う中、どれだけ探しても、カノンの姿を見つけることはできなかつた。

汽笛が鳴り、電車の扉が閉まる。

「カノン……」

悲しくなんてない。
寂しくなんてない。

今は、遠く離れてしまつてゐるけど、必ずまた会える。
その時は、ちゃんとしたデートをしよう。一緒に美味しいご飯を食べて、一緒に遊ぼう。

時には喧嘩もして、時には笑い合ひて……

あの高校の時のように、修学旅行の時のように……
みんなと笑い合って、騒げばいいじゃないか。

電車は、ゆっくりと動き出す。

約束だよ……

必ず会おう……みんなの待つ、あの日のあたる場所で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4170d/>

あの日のあたる場所で

2010年10月10日01時37分発行